

内案根

339

9331



始



379-933A

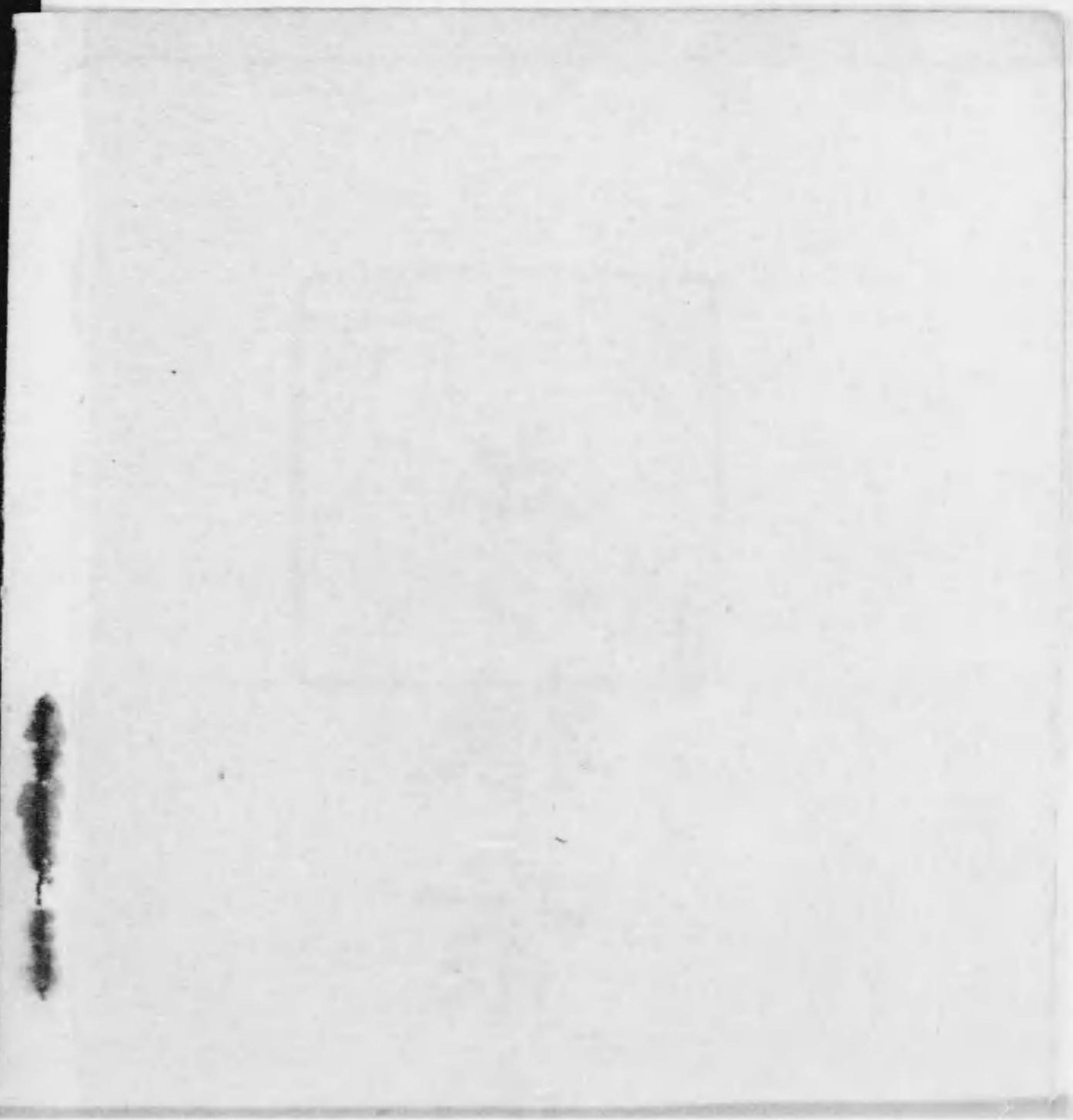


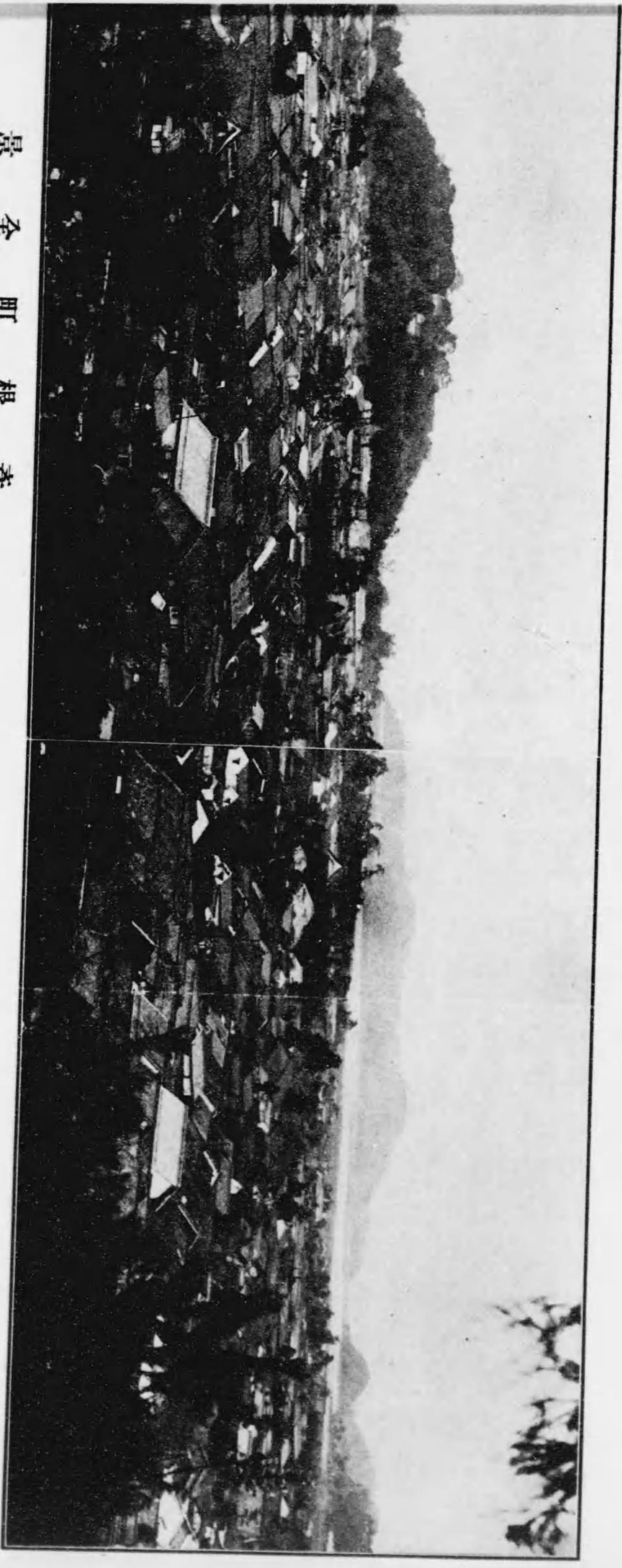
彦根案内

大正
6. 11. 16
内交

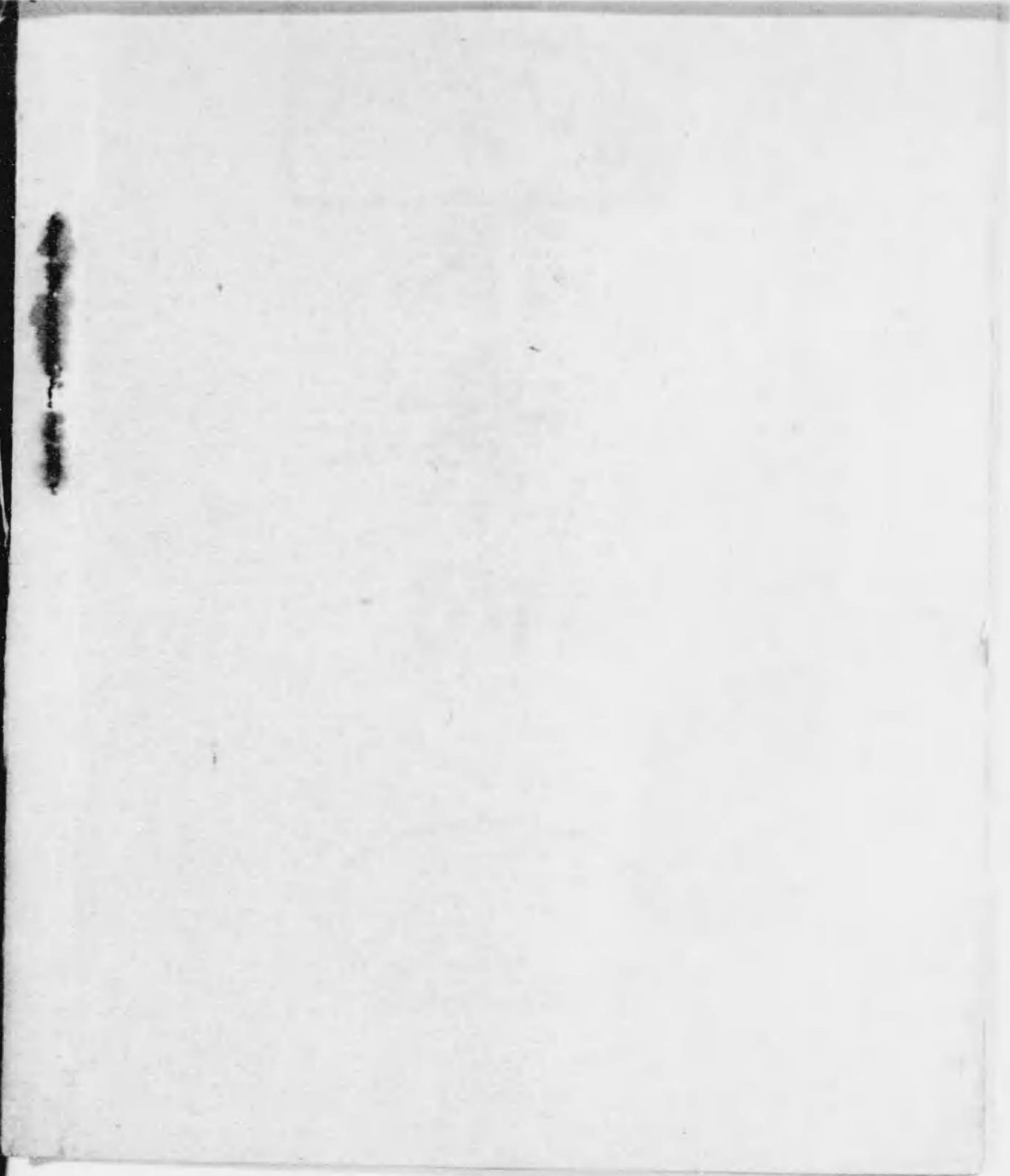


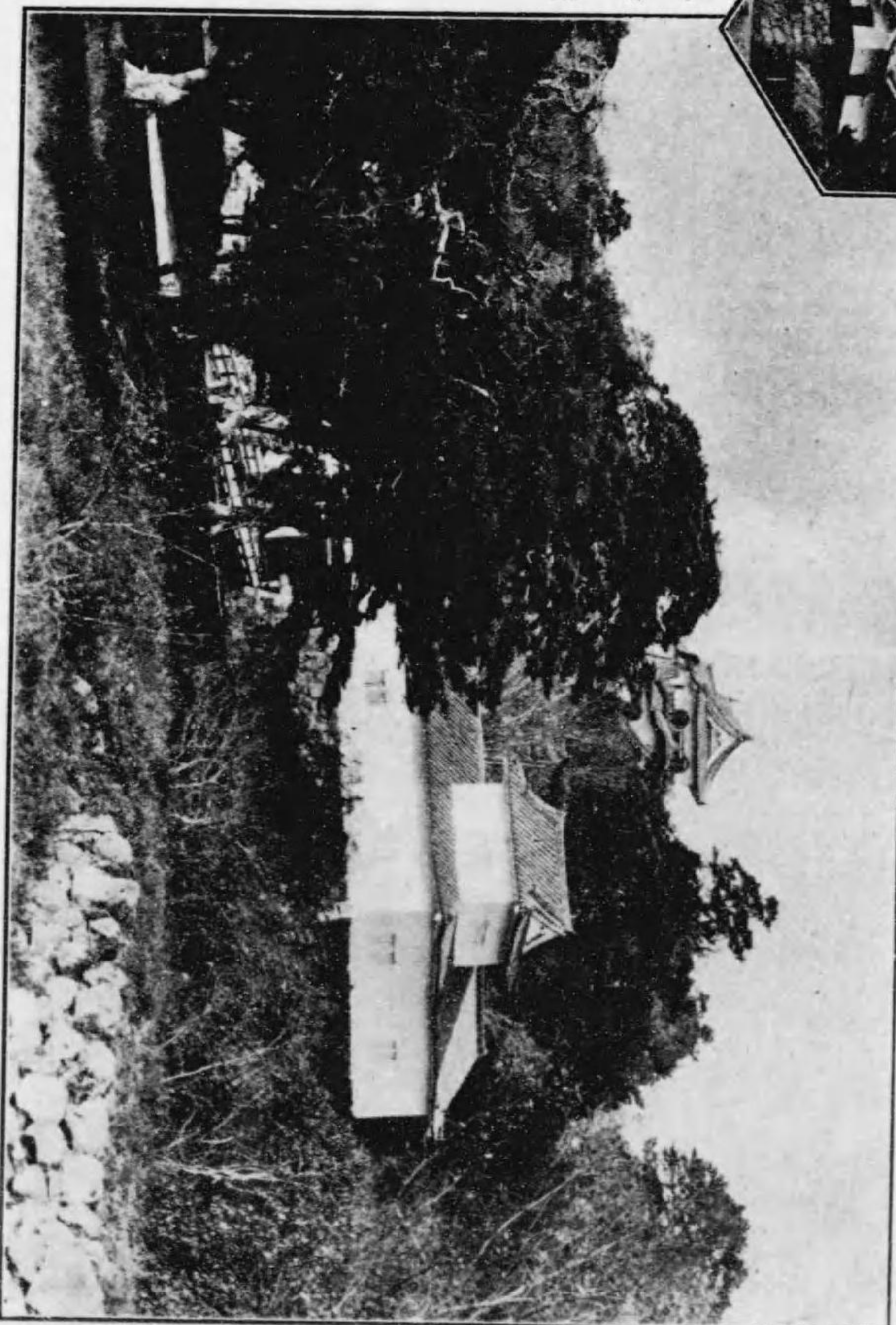
景全町根彦





景全町根彦





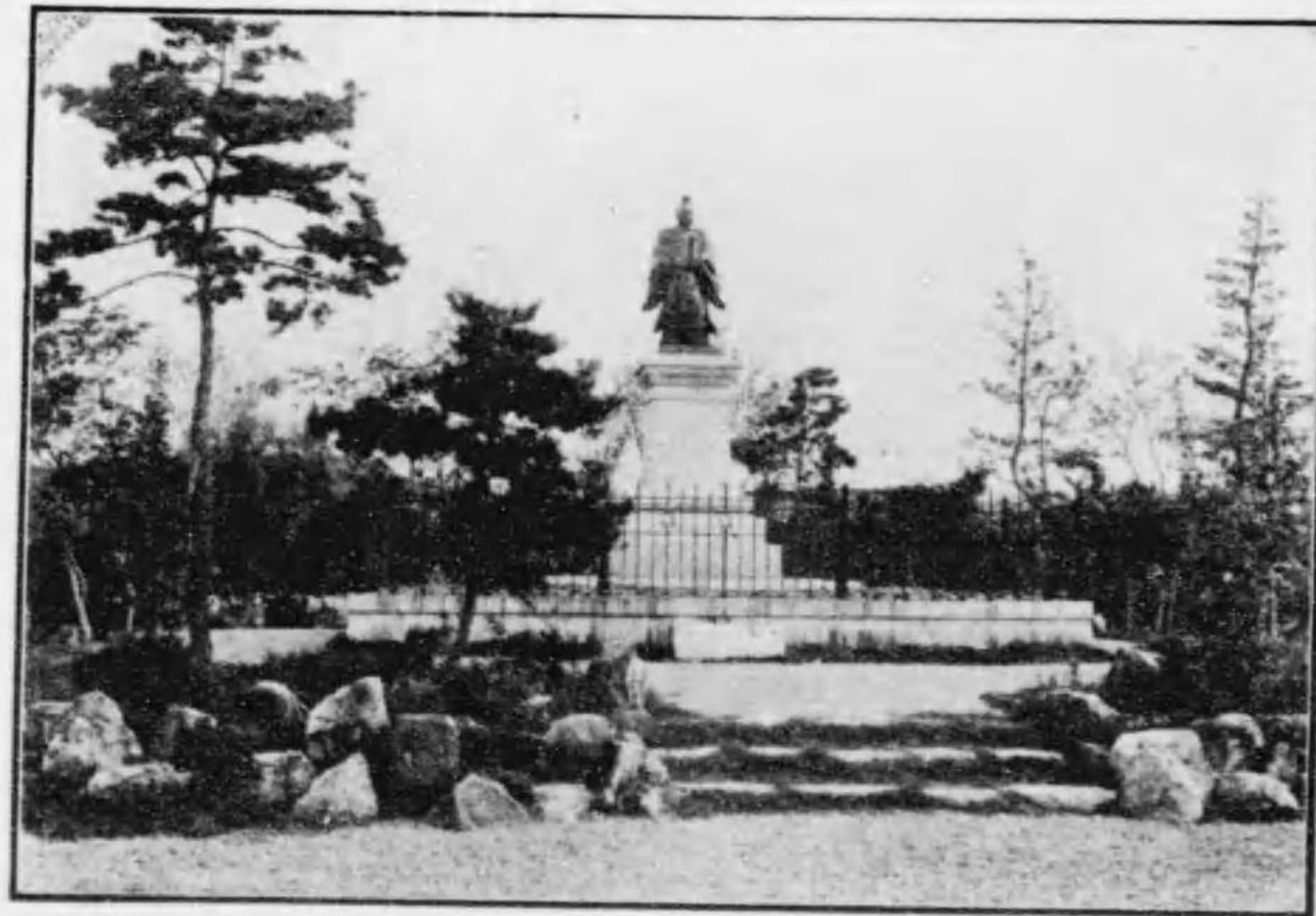
天守閣



山城根彦



城山迎春館



井伊直弼朝臣銅像

大洞内湖を望む
城山より八景亭々々を隔て



(景全園々樂)

(景全亭八景)



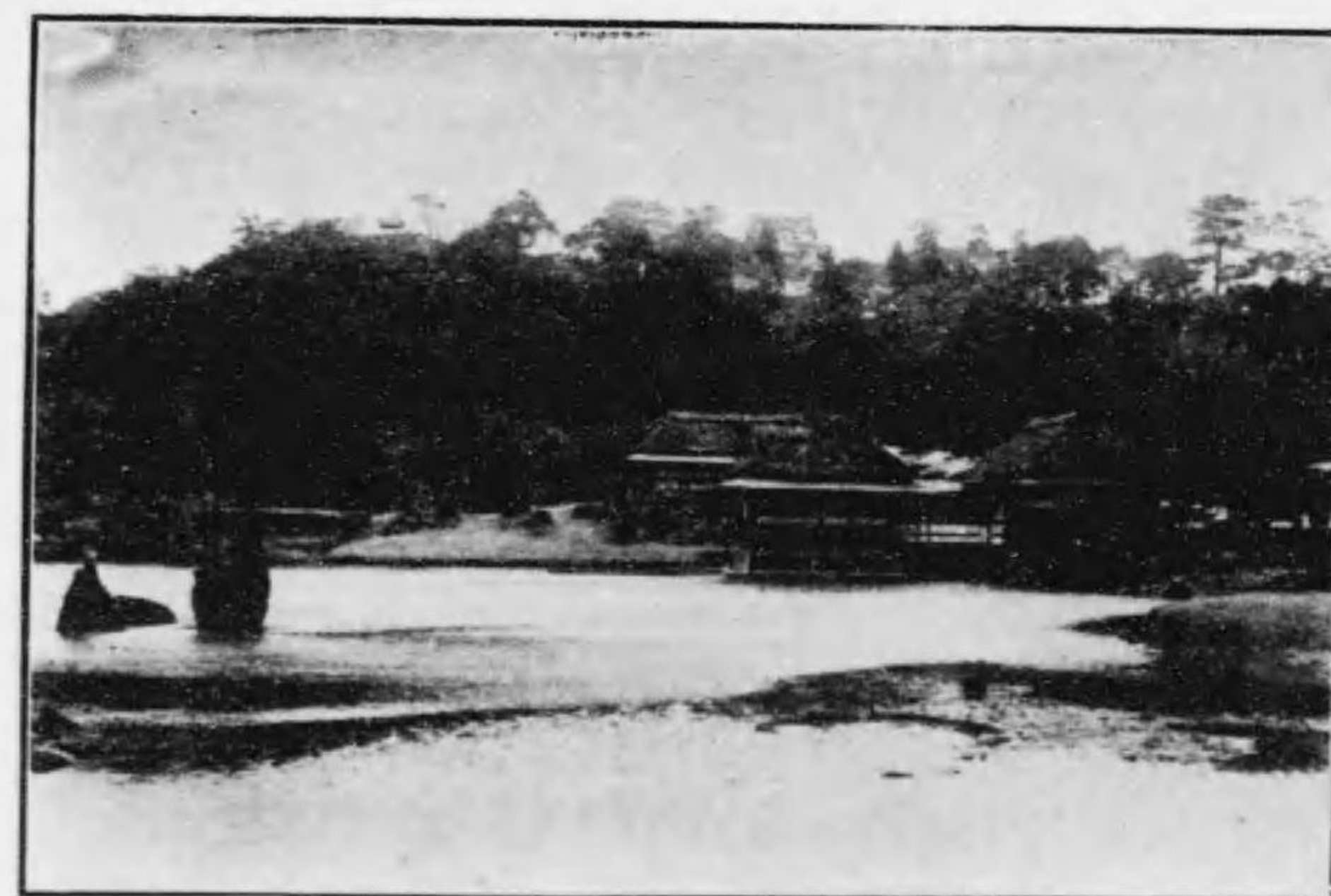
一の園々楽



一の亭景八



二の園々楽



二の亭景八



社神山和佐社縣



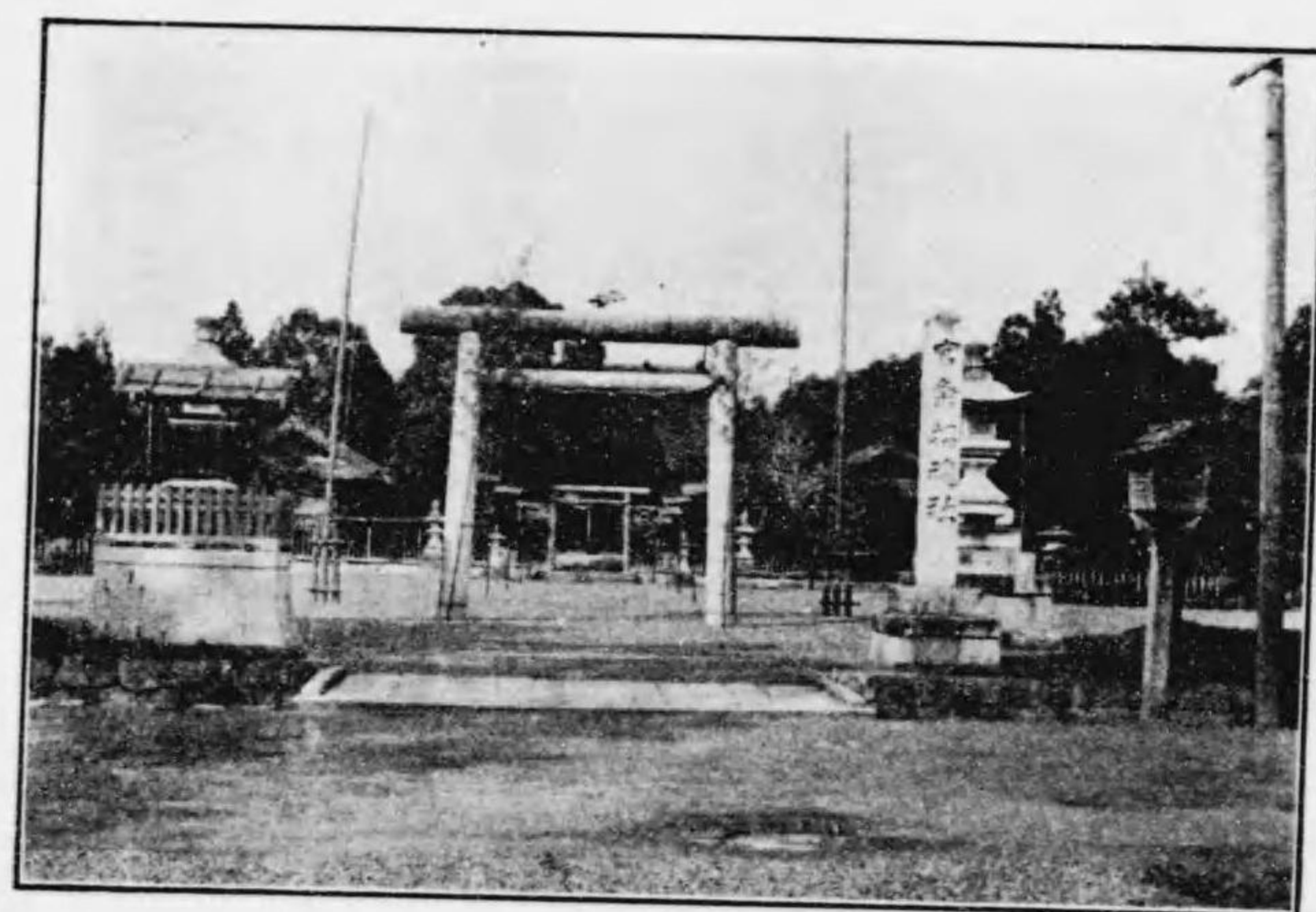
殿本社大賀多



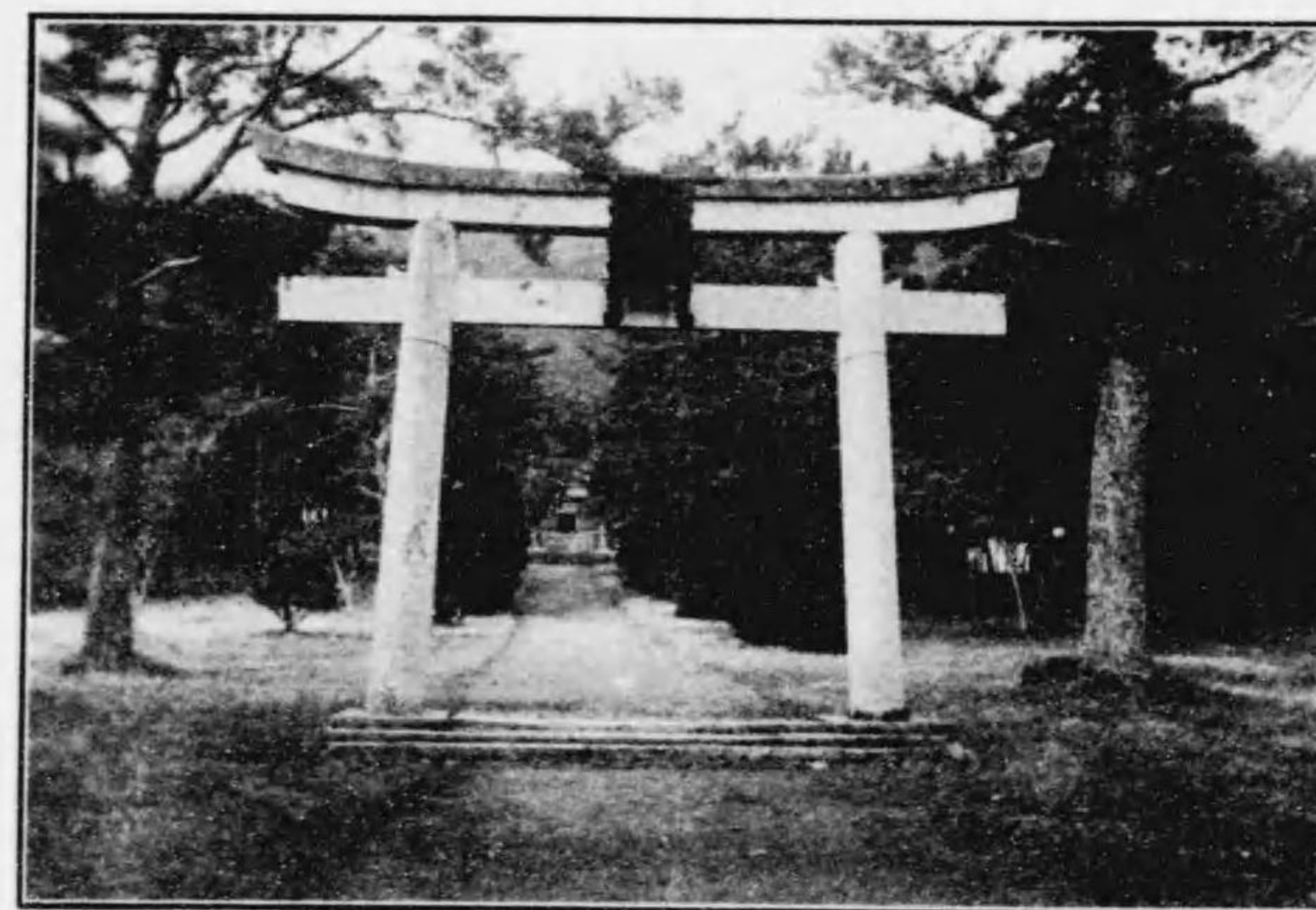
址城成三田石山和佐



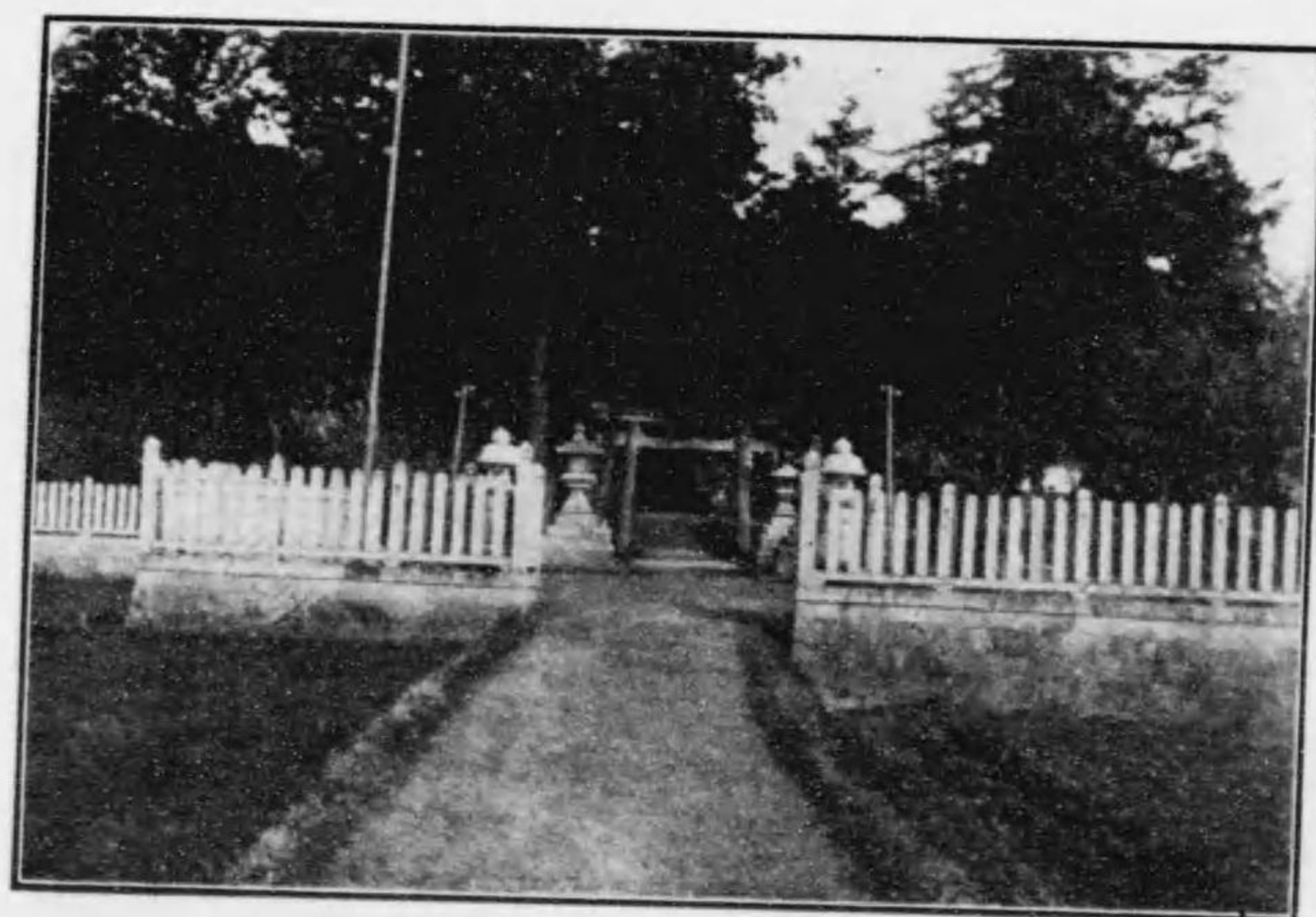
門表社大賀多



官祭招魂社



井伊神社



縣社千代神社



彦根神社



大洞辨財天



龍潭寺



彦根長曾根波止場



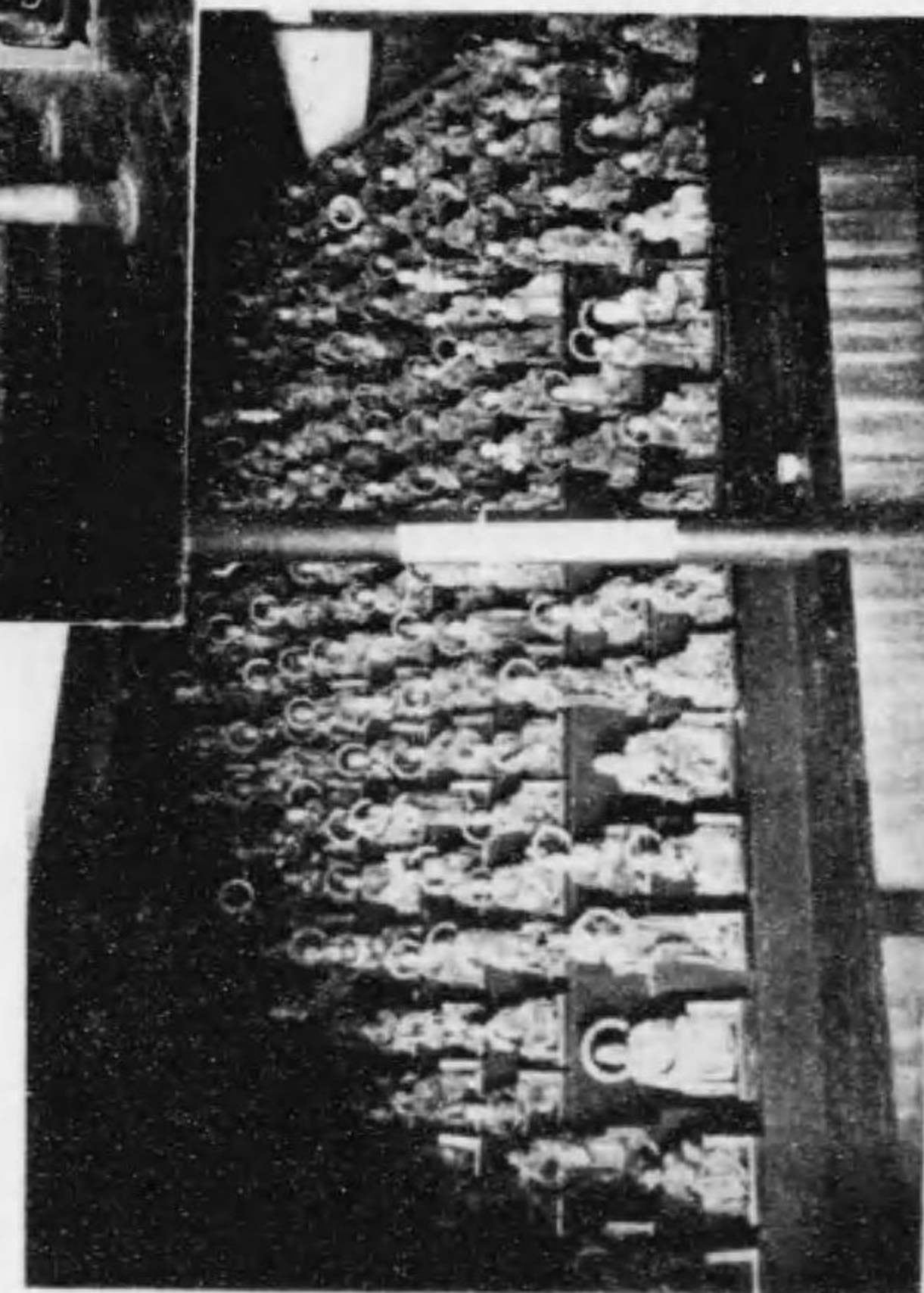
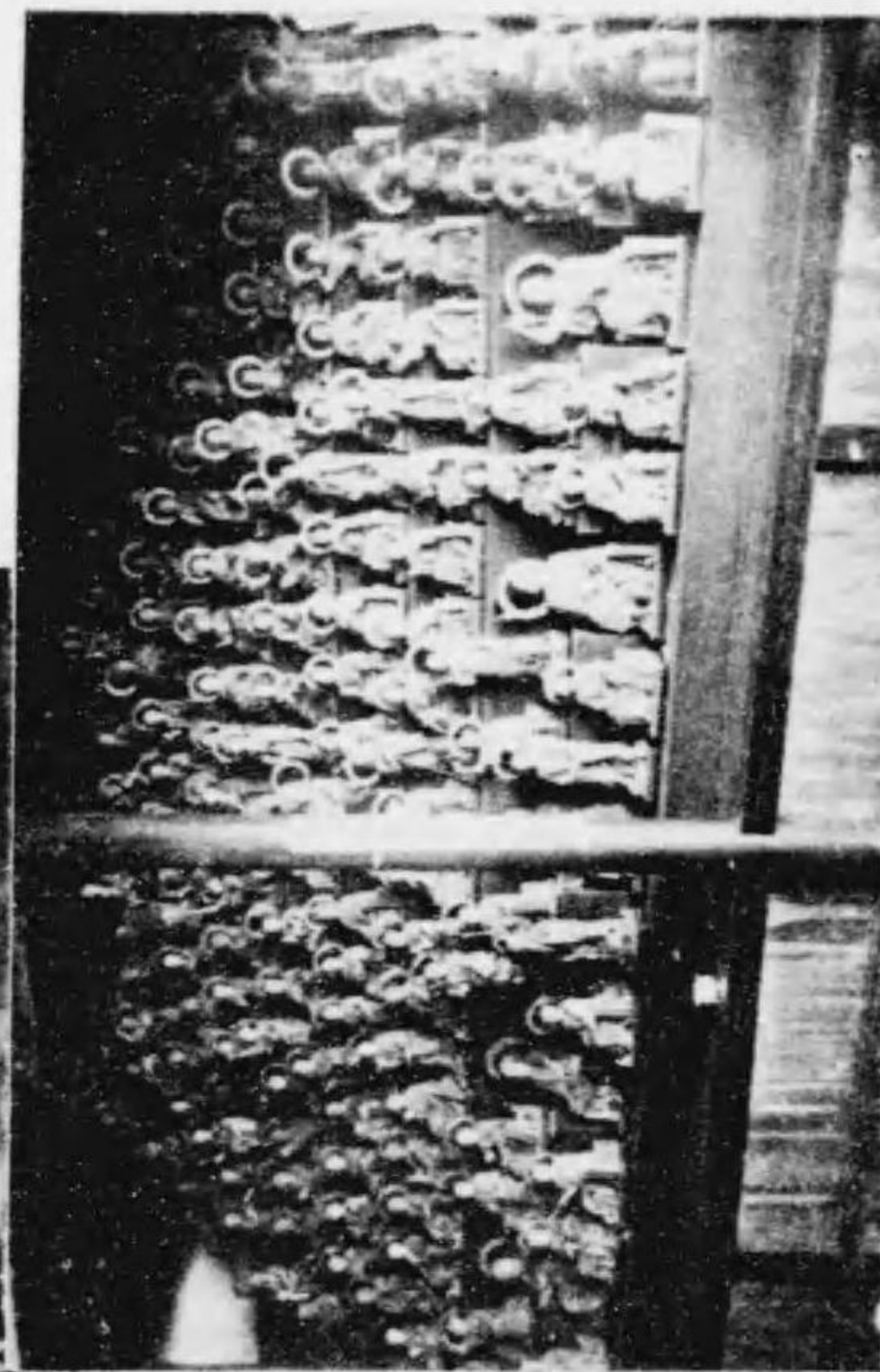
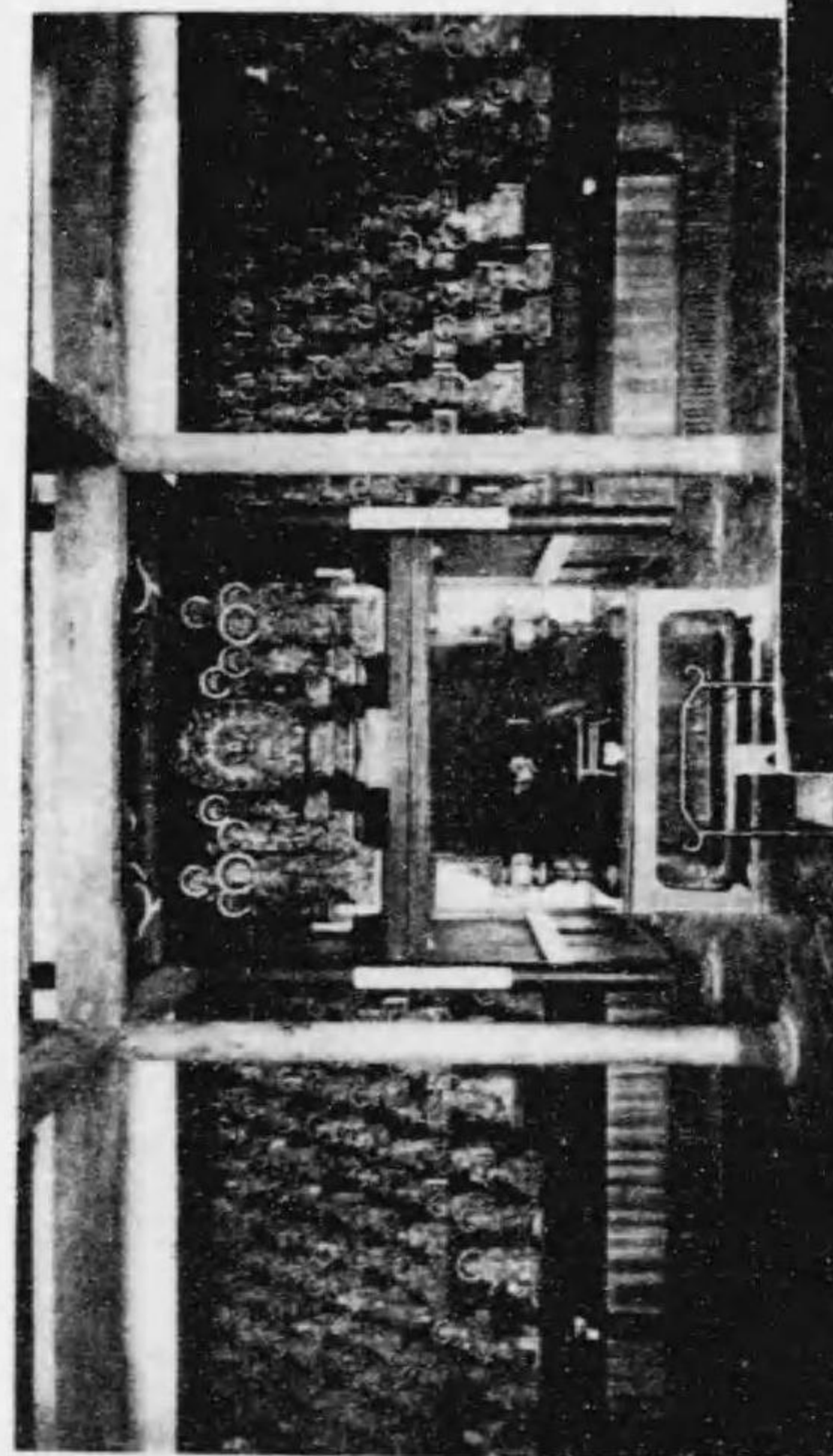
宗安寺



磯山湖畔



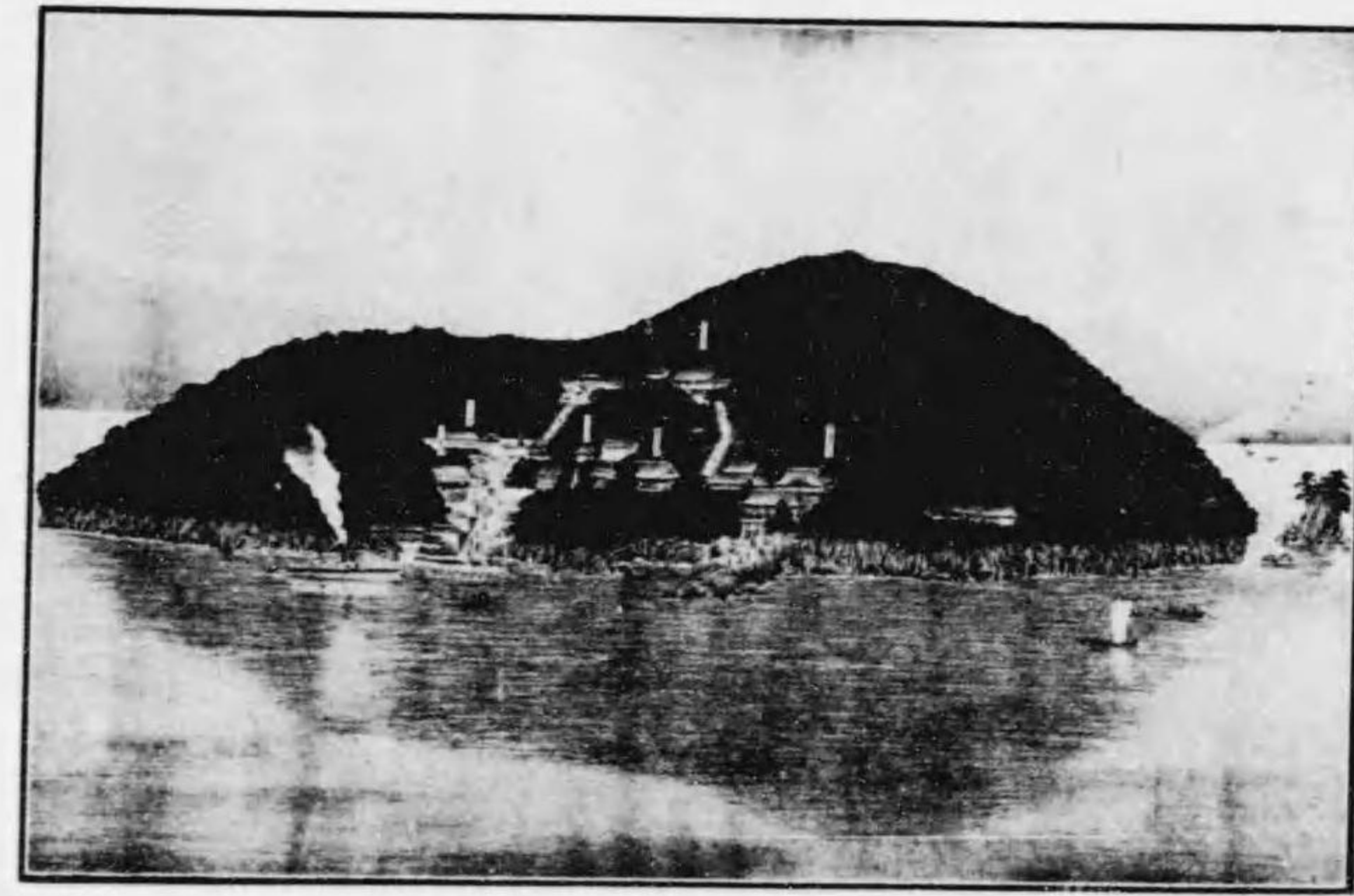
大洞内湖



五
百
羅
漢



新公園蟠龍亭



竹生島



いり松



多景島

門山寺性明



佛大の寺福濟



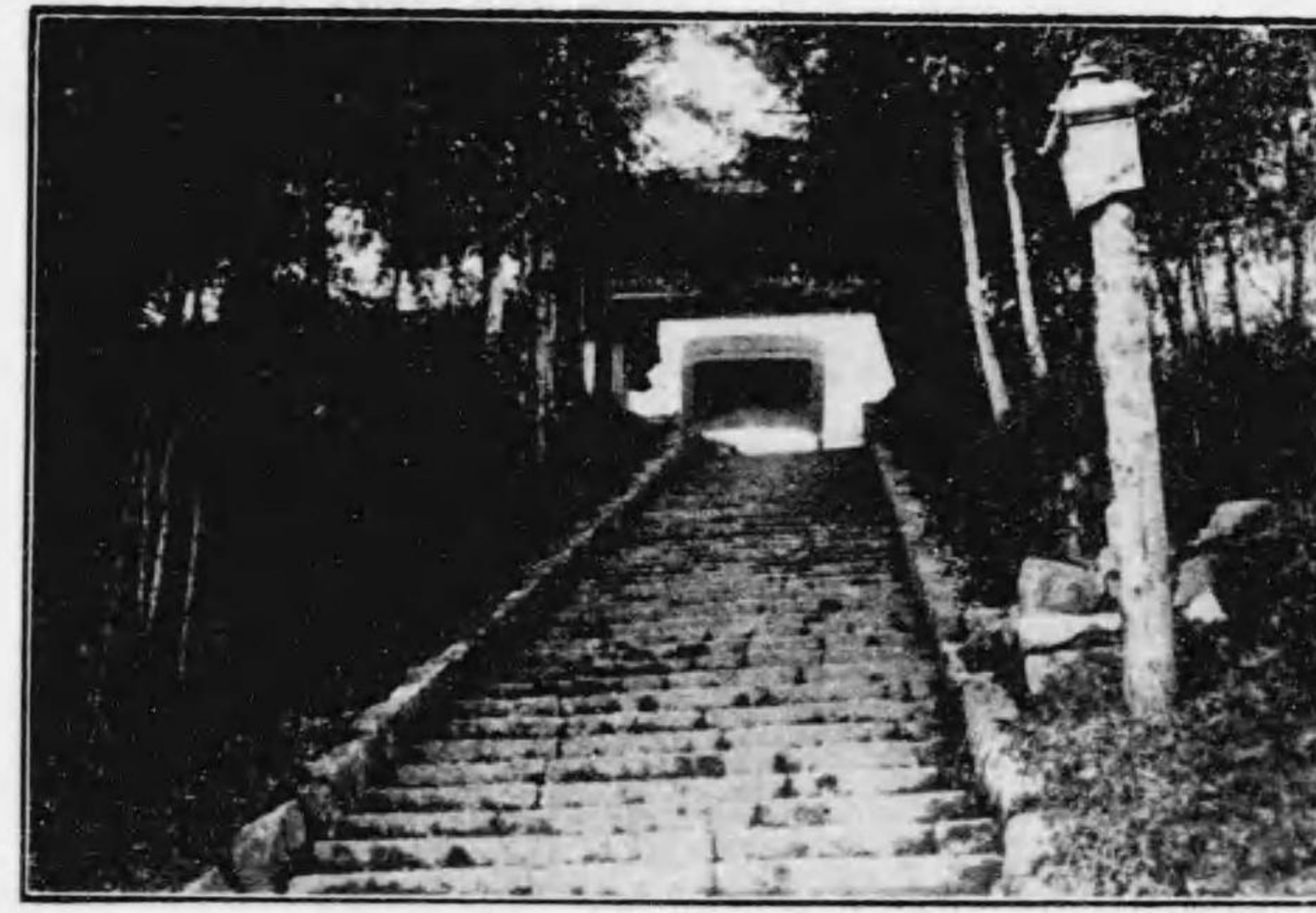
社 神 野 北



社 神 新



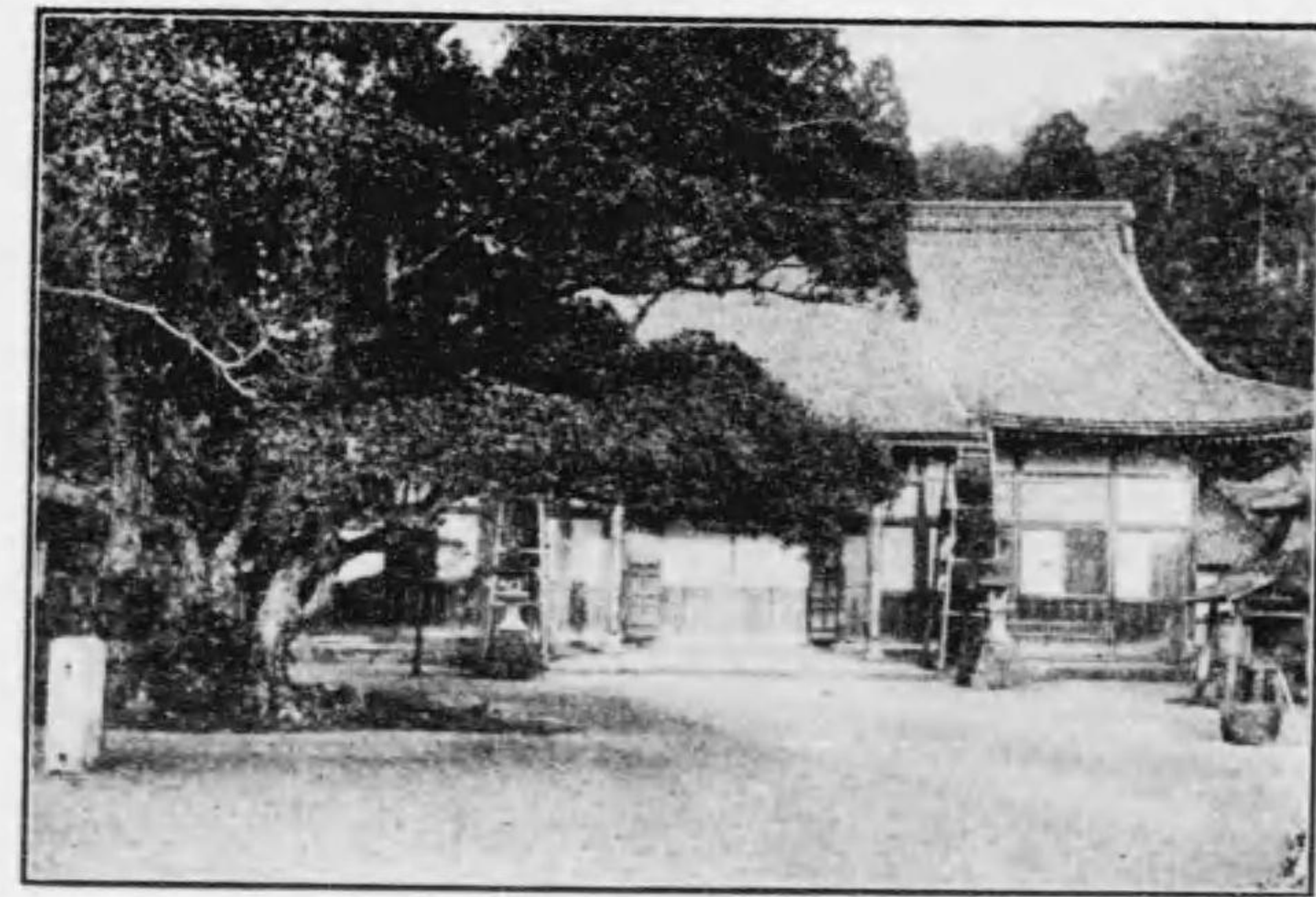
縣立彥根高等女學校



愛宕山仙琳寺



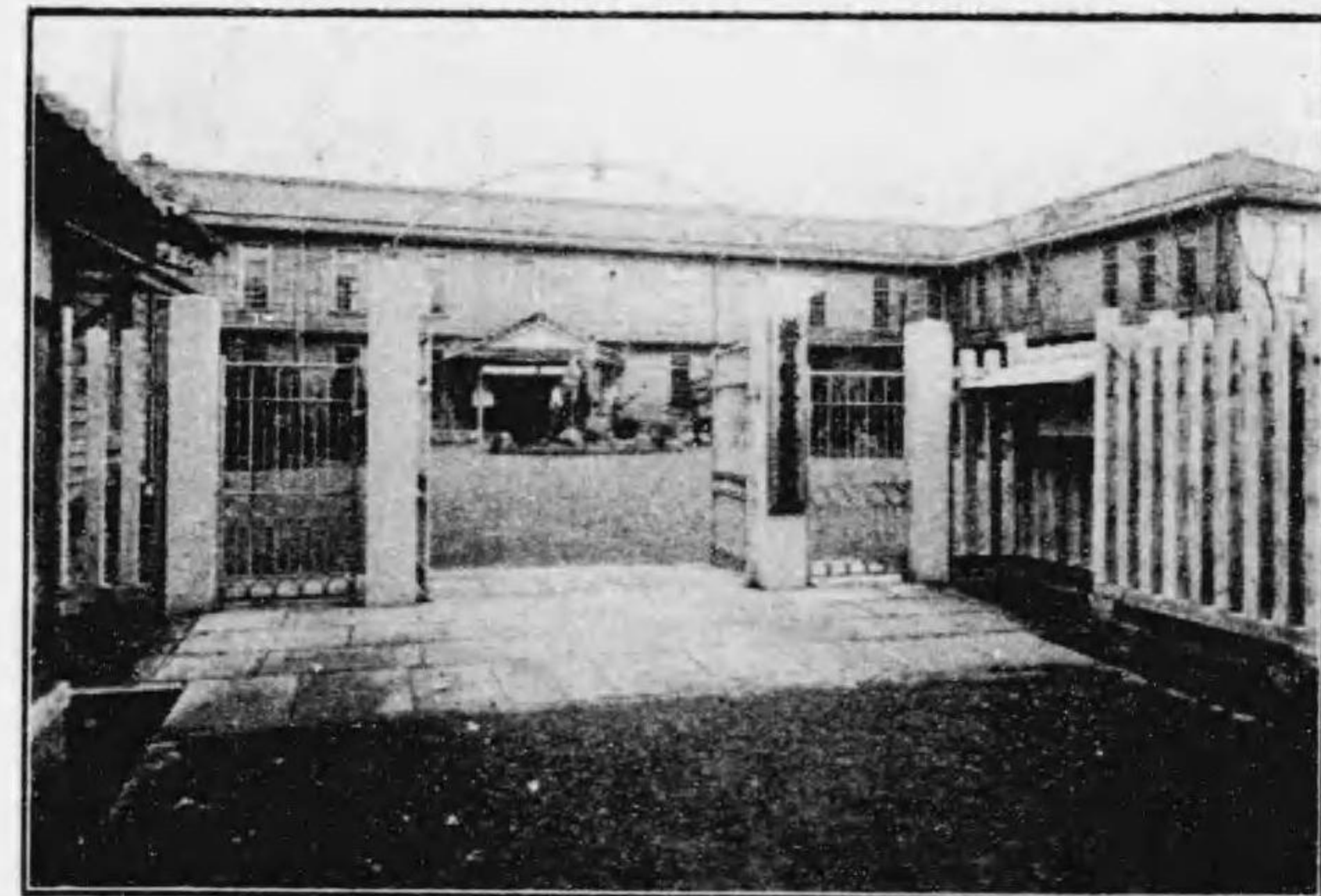
彥根町立工商學校



清涼寺



校學小東根彦



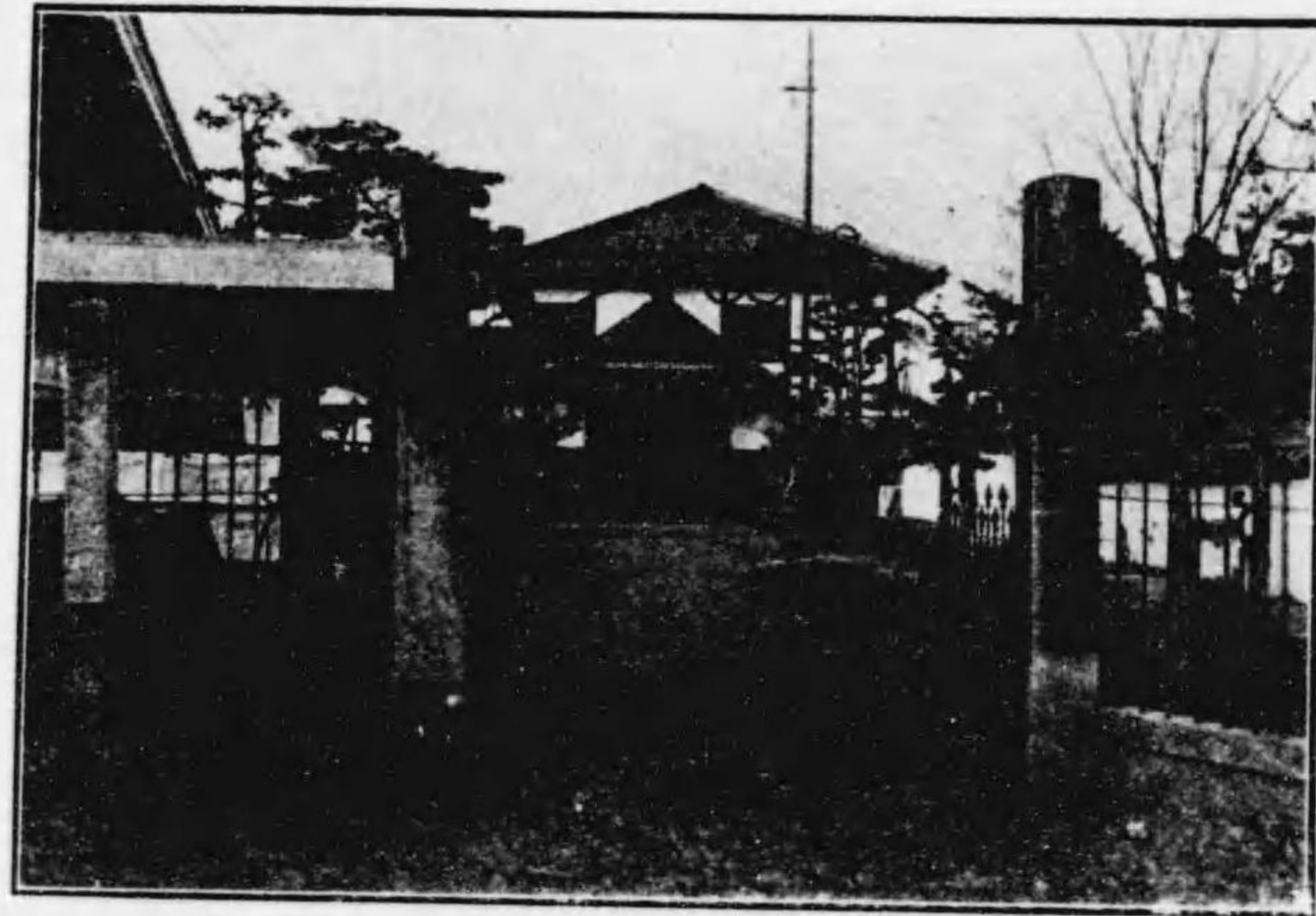
校學中根彦立縣



園稚幼根彦



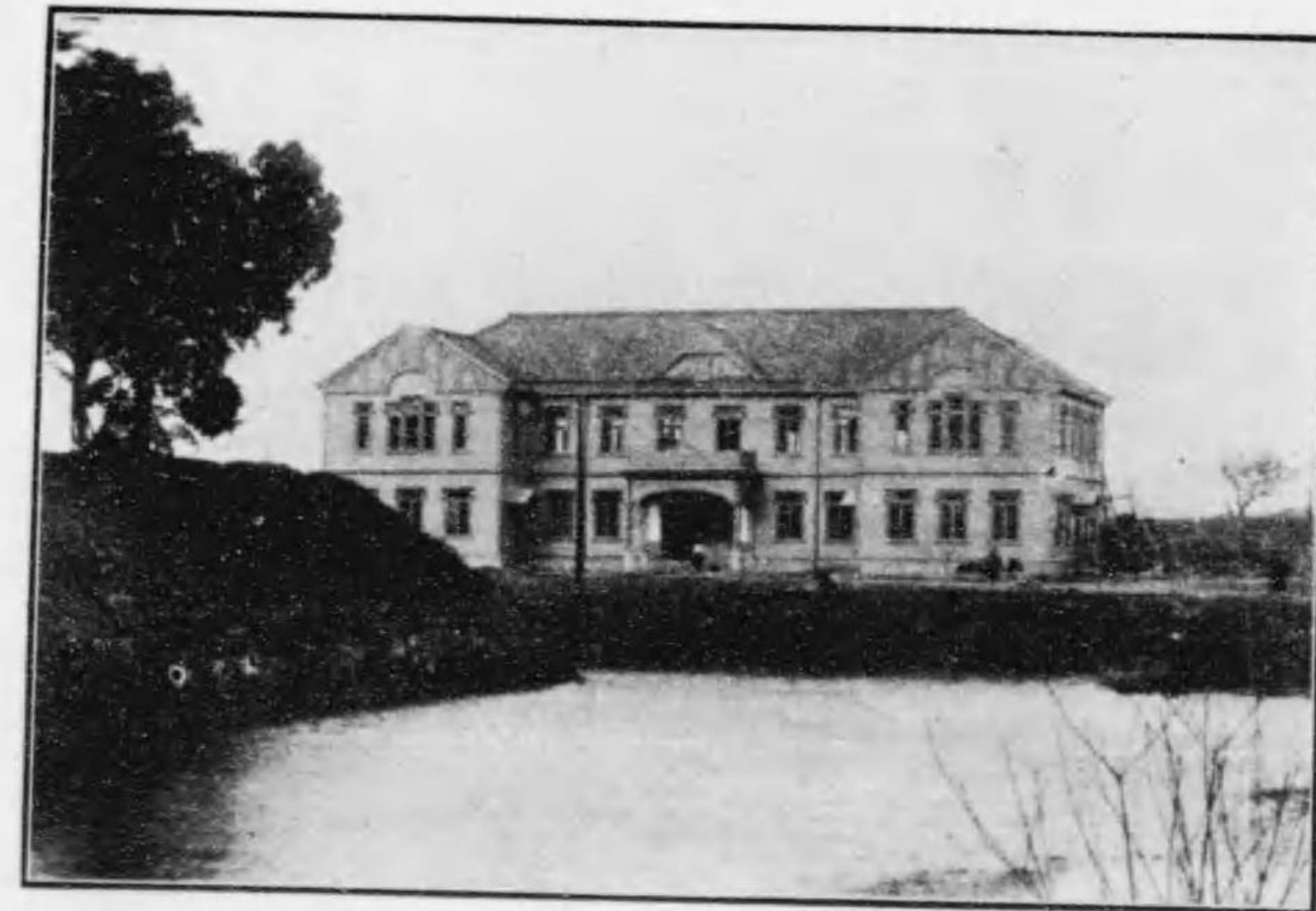
院病根彦立公



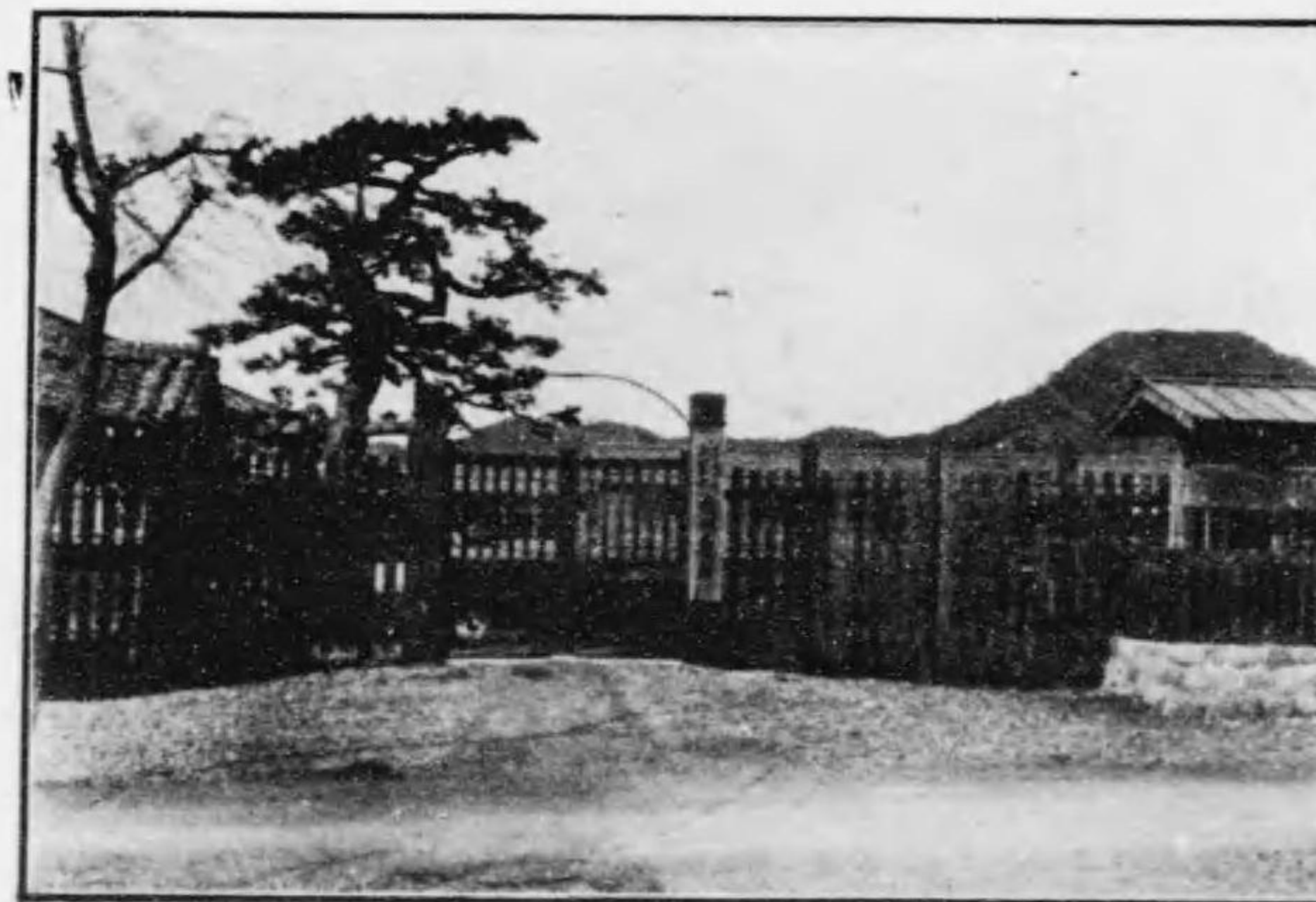
堂事議會町根彦



場驗試產水立縣



堂會公根彦



所造製草煙局賣專



橋 芹



橋 京



所 役 郡 上 犬



場 役 町 根 彦



彦根驛



彦根郵便局と通り町



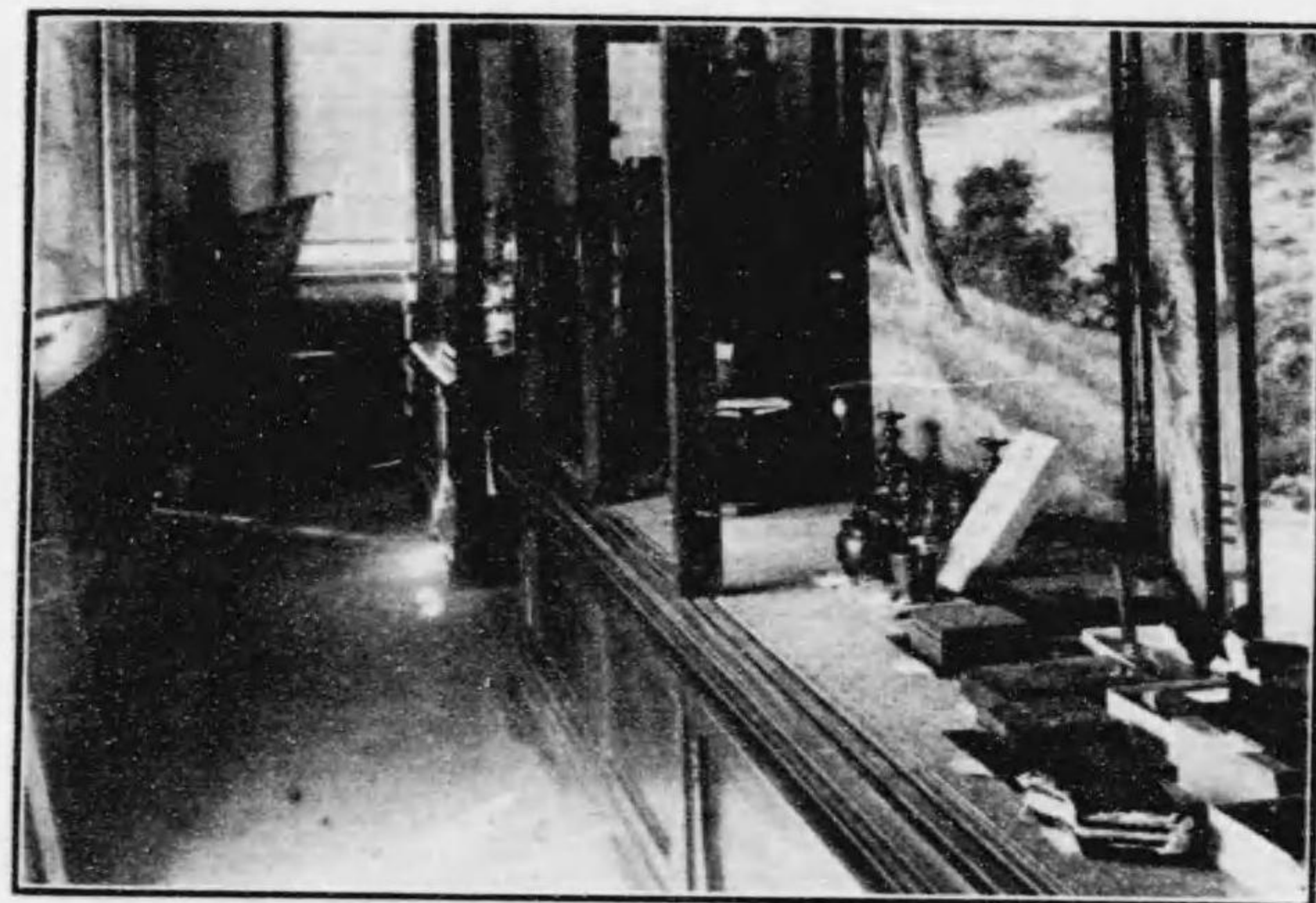
彦根驛前通



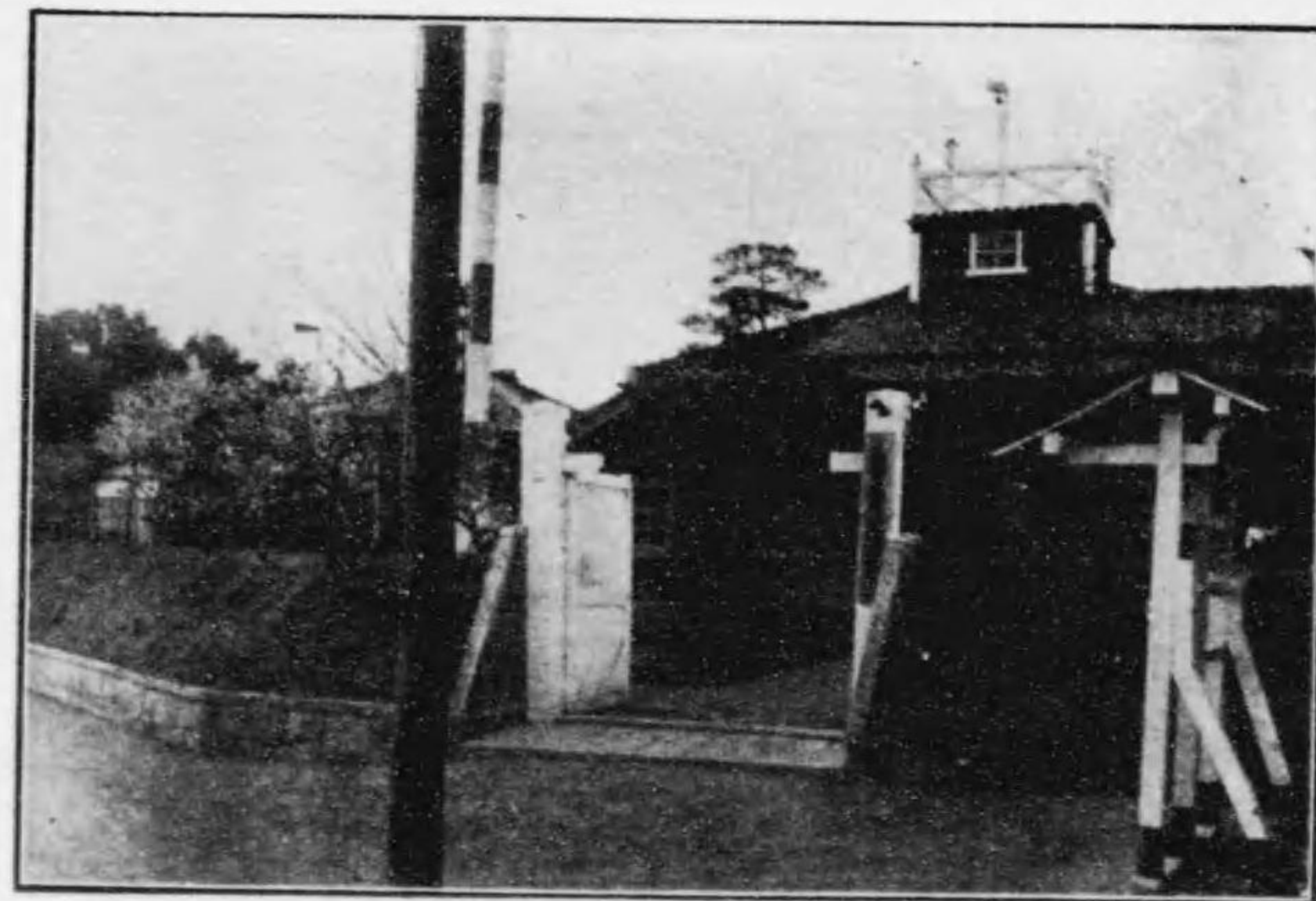
彦根上橋町通



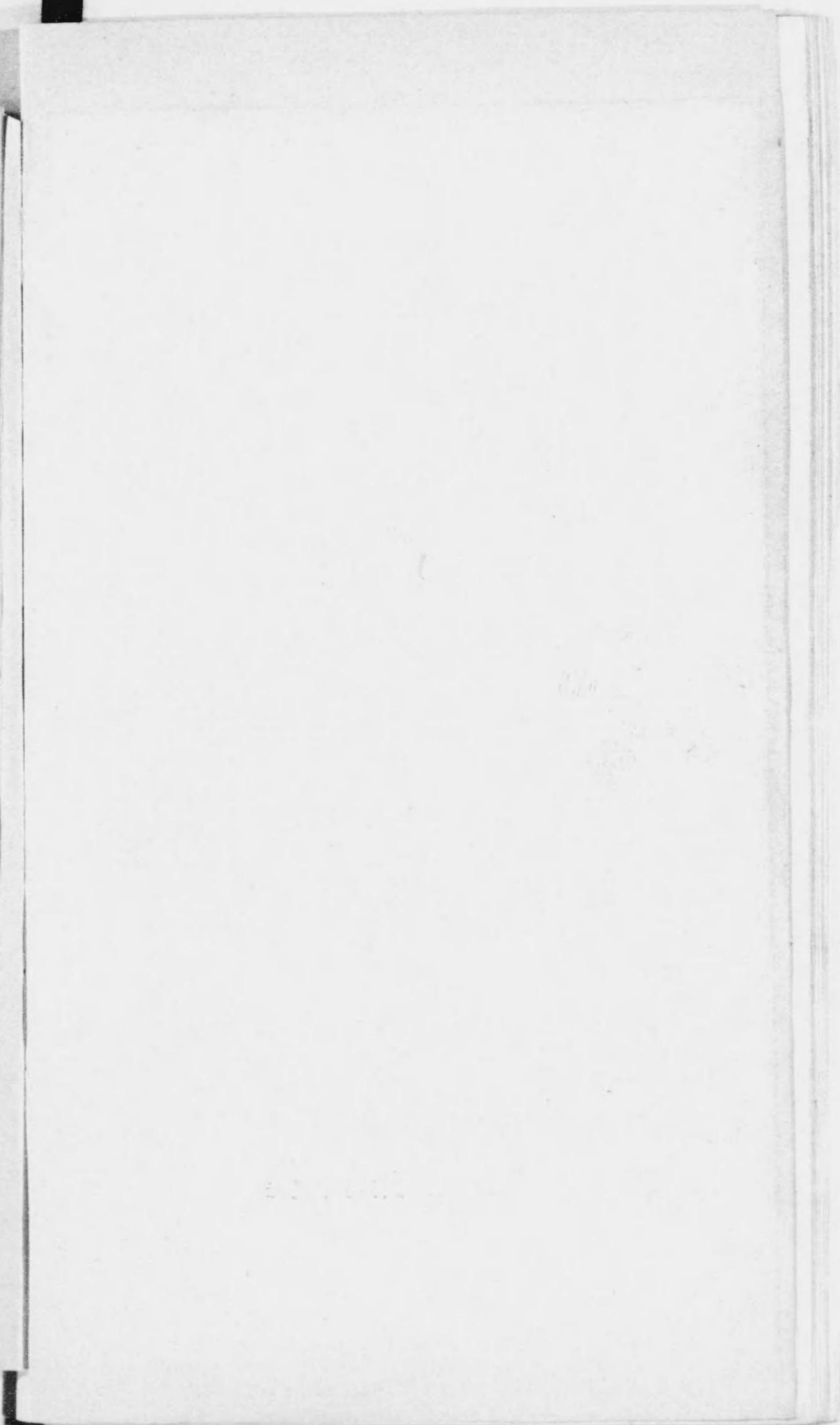
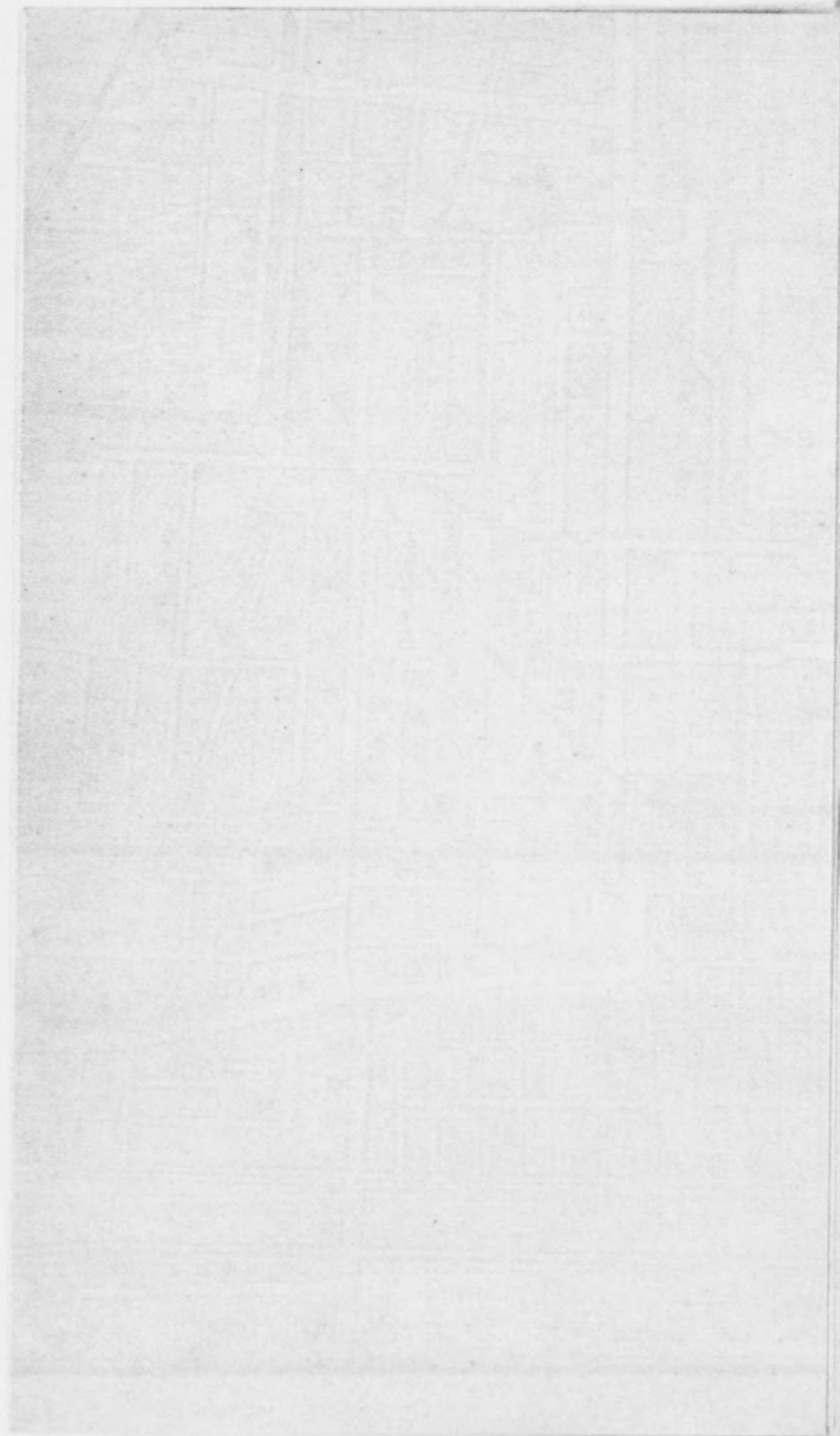
彦根町長石橋彦三郎



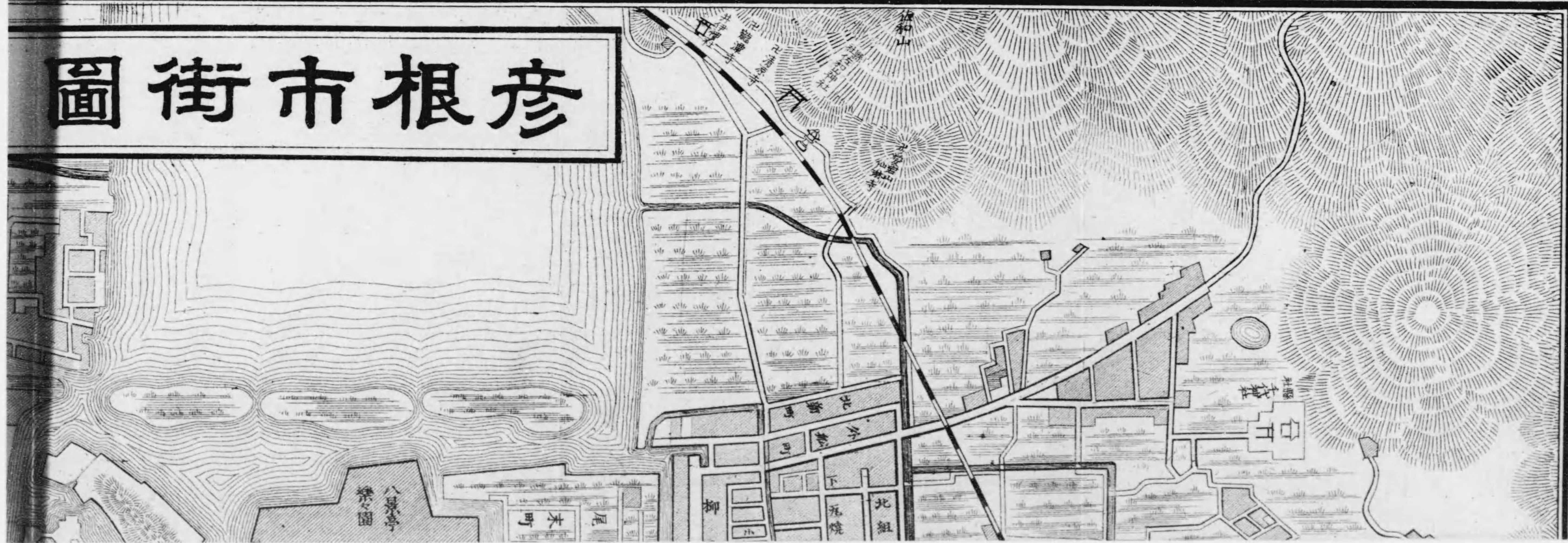
彦根物産陳列館



縣立彦根測候所

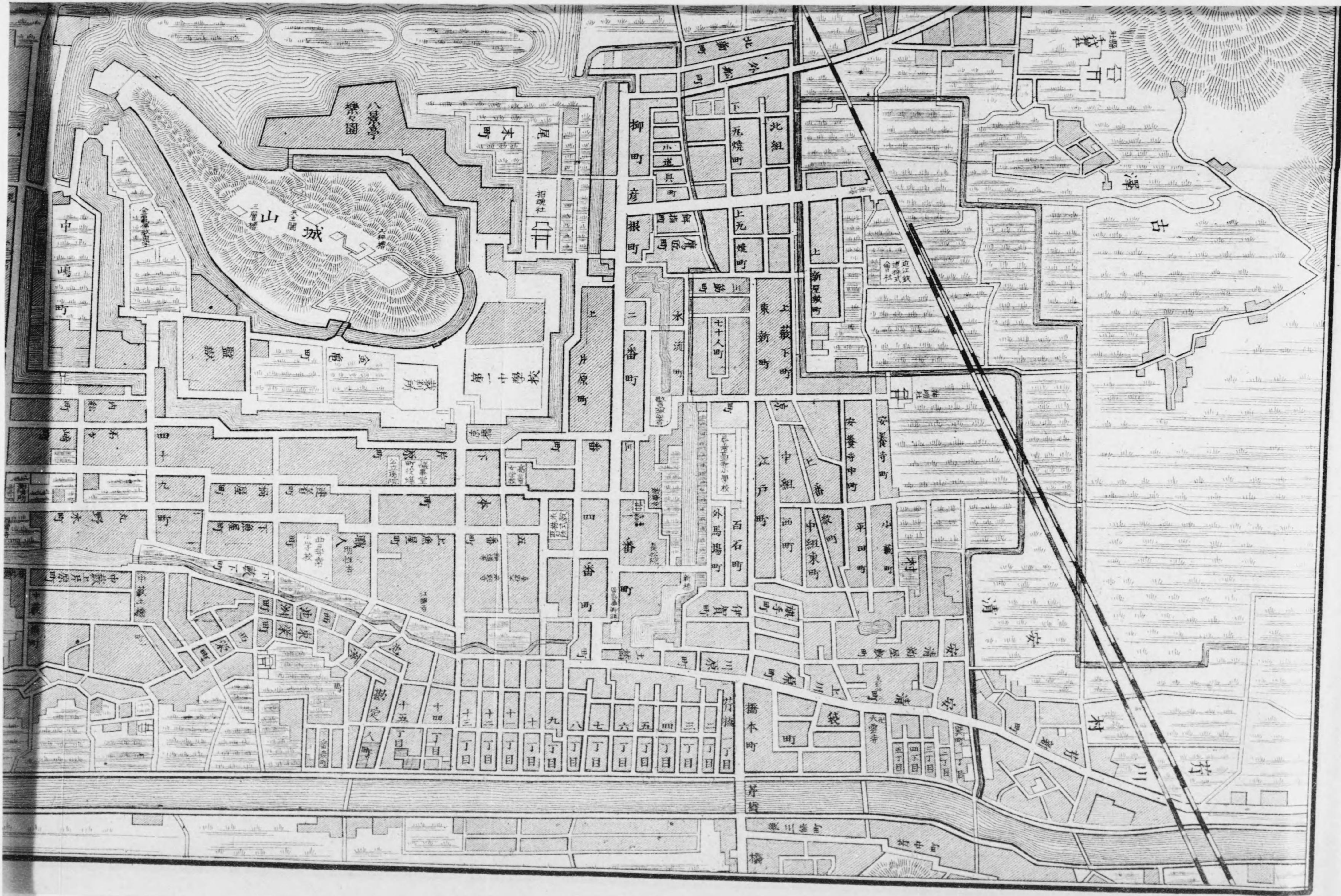


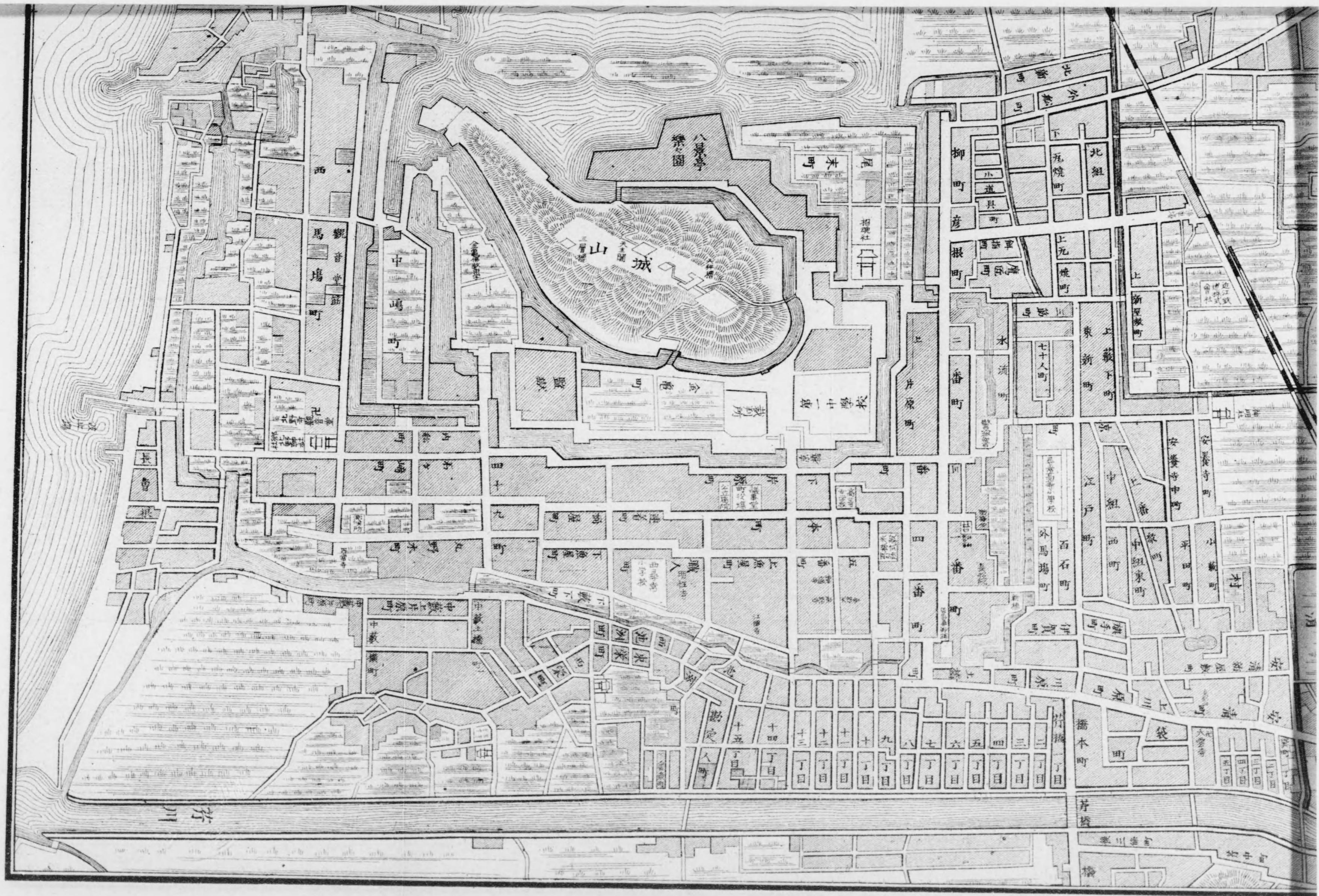
彦根市街圖



彦根市街圖







緒言

金風蕭颯、人をして自づから襟を正さしむるの時、允文允武なる大元帥陛下には大演習御親裁の爲め我彦根の地に行幸あらせらるる住民一同千古の光榮として欣仰措く能はざる、豈偶然の事ならんや。抑々彦根は明治維新以來世運の進歩に伴はざること多年生産力微細にして戸口亦年々減少し、轉た藩政時代の殷賑を追懷するに止まるのみなりしが、明治三十年以來居民漸く覺醒し事業振興戸口劇増し輓近著しき發達を示すに至れり。

茲に盛儀を迎ふるに當り著名なる舊蹟、明媚なる風光、傑出せる人物其他に就き廣く江湖に紹介する所あらんこと若しこれによりて大方の一瞥を惹くを得ば編者の本懷亦之に過ぎざる也。

大正六年十一月

彦根案内目次

彦根名勝

彦根山……………二
 彦根城……………三
 井伊大老銅像……………六
 いろは松……………七
 迎春館……………七
 樂々園……………八
 八景亭……………八
 官祭招魂社……………一〇
 北野神社……………二
 松原内湖……………三
 明性寺……………三

附近の勝邑

宗安寺……………三
 天寧寺……………三
 千代神社……………五
 佐和山城址……………六
 愛宕山仙琳寺……………八
 佐和山神社……………九
 清涼寺……………一〇
 龍潭寺……………一〇
 井伊神社……………一三
 大洞辨天堂……………一三
 多賀大社……………一四

官公衙其他

多景島……………一六
 竹生島……………一七
 專賣局煙草製造所……………一九
 彦根公會堂……………一九
 彦根圖書館……………一九
 縣立彦根中學校……………二〇
 町立彦根商工學校……………二〇
 縣立彦根測候所……………二〇
 縣立水産試驗場……………二二
 縣立高等女學校……………二三

露光量違いの為重複撮影



諸統計

一、面積	三
二、氣象	三
三、人口	三
四、町政	三
五、商業	三
六、工業	三
七、交通	三
八、官公衛	三
九、銀行會社	三
人物傳	三
井伊直中	三
井伊直孝	三
井伊直政	三

井伊直弼	三
井伊直憲	三
岡本宣統	三
八田金十郎	三
渥美平八郎	三
森川許六	三
澤村琴所	三
賀川玄悦	三
平石久平次	三
大菅中養父	三
野村公臺	三
檜物屋太右衛門	三
木具屋佐助	三
米屋文藏	三
西村助之丞	三
小原君雄	三

目次 (終)

張月樵	三
西澤道庵	三
宮村藍園	三
伊藤半兵衛	三
中川綠郎	三
宇津木駒吉	三
河上吉太郎	三
新野古拙	三
遠城謙道	三
岸竹道	三
谷鐵臣	三
大東義徹	三
西村捨三	三
中居忠藏	三



海産物問屋
 産根川原町
 鯛紫商會
 店主 若松栄吉
 電話三五番



諸統計

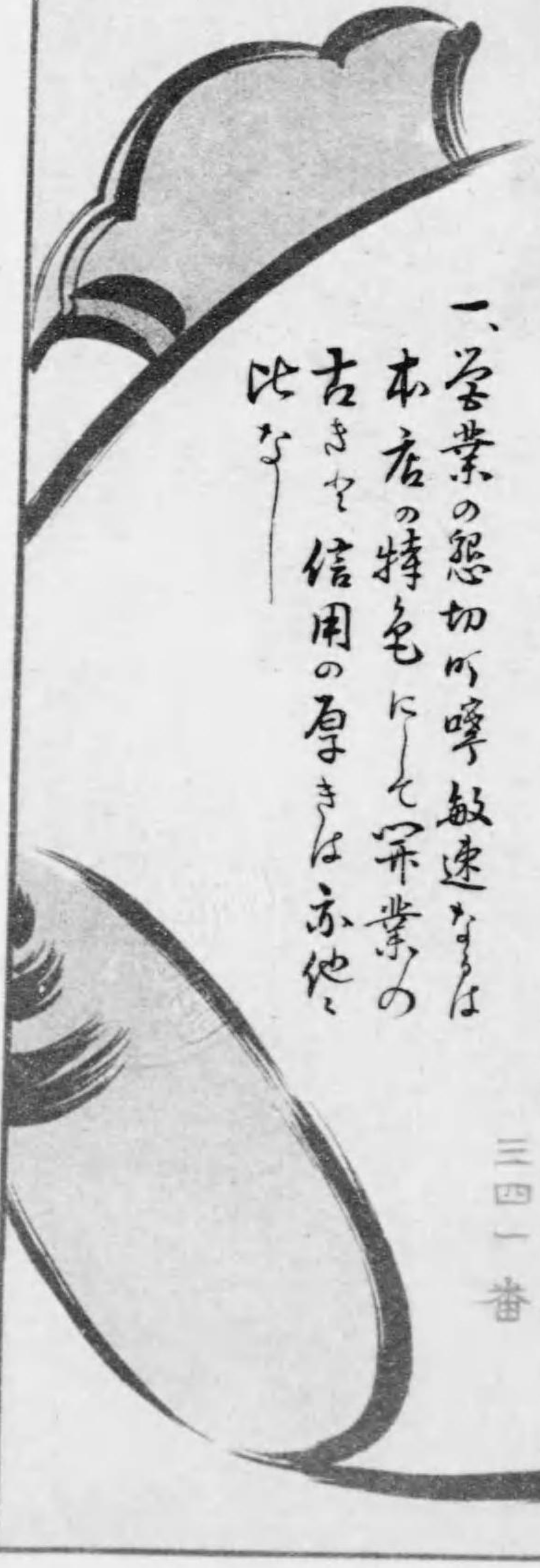
一、面積	三
二、氣象	高
三、人口	高
四、行政	高
五、商業	六
六、工業	六
七、交通	六
八、官公衛	四
九、銀行會社	三
人物傳	
井伊直政	三
井伊直孝	四
井伊直中	五

井伊直弼	三
井伊直憲	四
岡本宣統	四
八田金十郎	四
渥美平八郎	四
森川許六	五
澤村琴所	五
賀川玄悦	五
平石久平次	五
大菅中養父	五
野村公臺	五
檜物屋太右衛門	五
木具屋佐助	五
米屋文藏	五
西村助之丞	五
小原君雄	五

目次 (終)

張月樵	五
西澤道庵	五
宮村藍圖	六
伊藤半兵衛	六
中川綠郎	六
宇津木駒吉	六
河上吉太郎	六
新野古拙	六
遠城謙道	六
岸竹道	六
谷鐵臣	六
大東義徹	六
西村捨三	七
中居忠藏	七

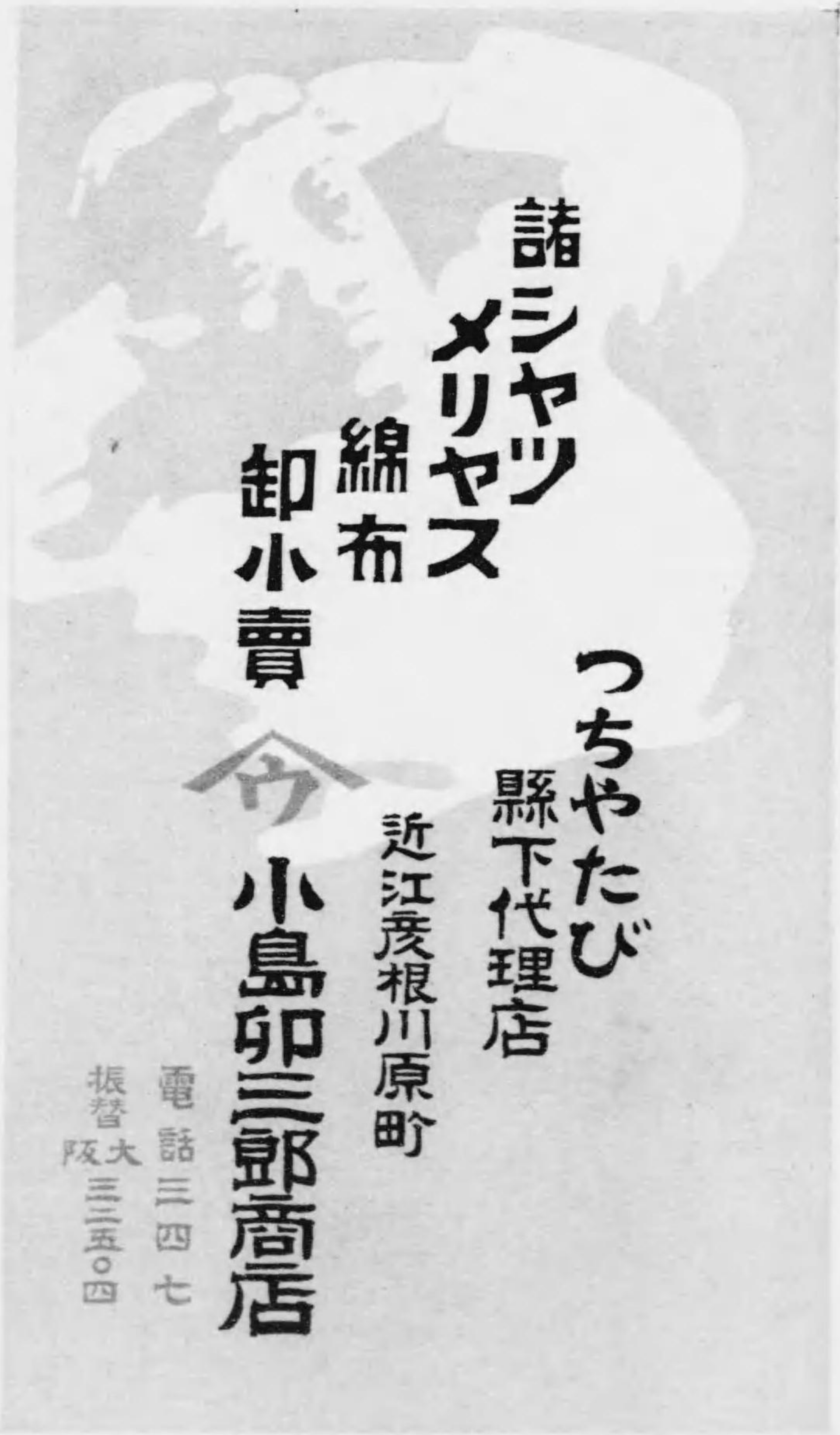
米



一、各業の懇切な交渉迅速なるは
本店の特色にして各業の
古きや信用の厚きは亦他
比な

株券公債
現物仲買
彦根一番町
山崎両替店

電話 長一七番
一七〇番
三四一番



諸シヤツ
メリヤス

綿布

卸小賣

今小島卯三郎商店

つちやたび

縣下代理店

近江彦根川原町

電話三四七
振替大 三三五〇四
阪

彦根土橋町

近江實業新報社

電話二二三〇番



社長 赤井安夫



出資金額

大正三年度末
大正四年度末
大正五年度末
大正六年度末
大正六年三月末

大正六年三月末
大正五年度末
大正四年度末
大正三年度末
時当立設

彦根四番町

有限責任彦根信用組合

電話二一番



社長 組合

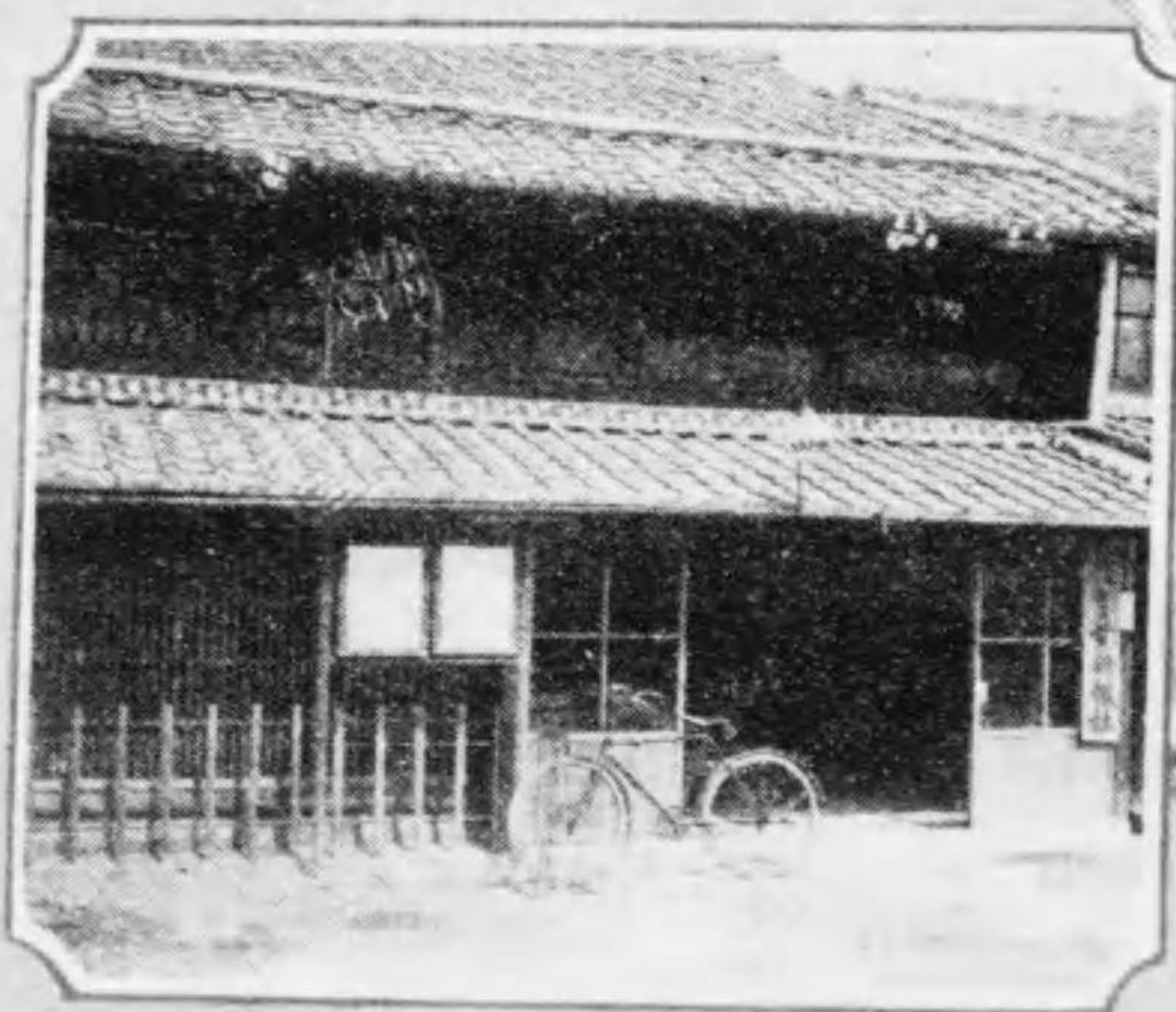
露光量違いの為重複撮影

彦根土橋町
近江實業新報社

電話二二三〇番



社長 井長 安夫



彦根四番町
有限責任 彦根信用組合

電話二一番

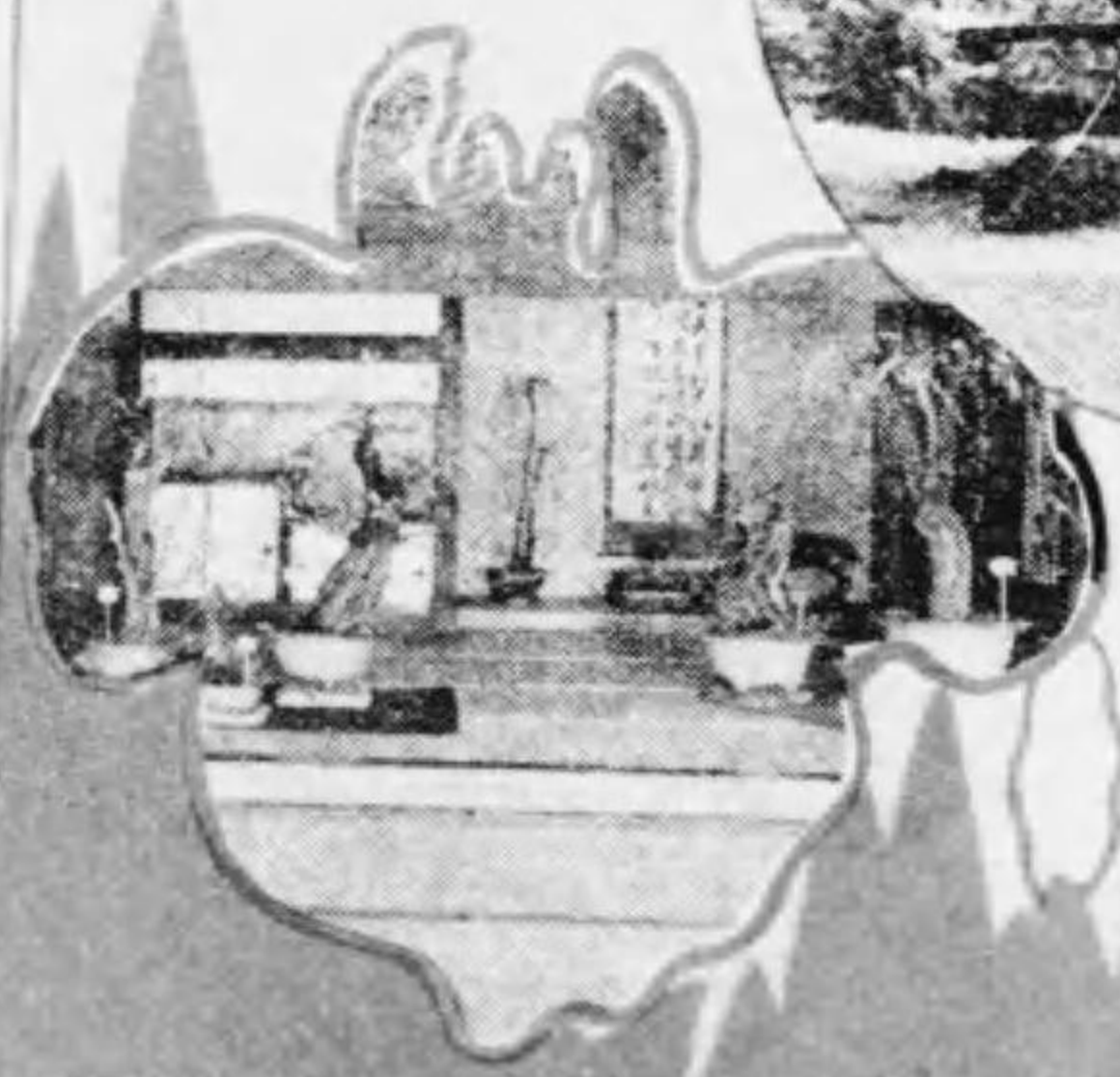
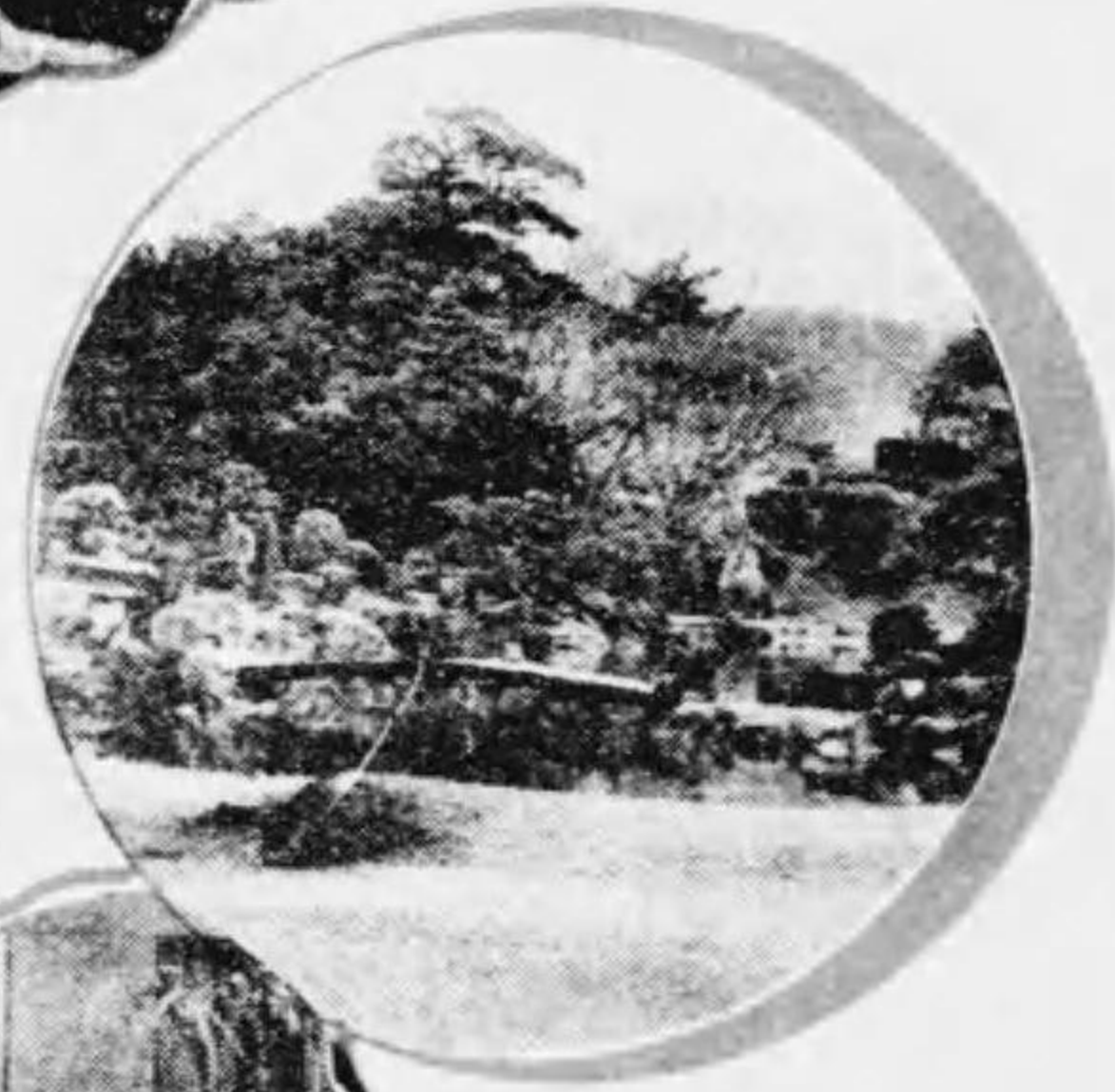
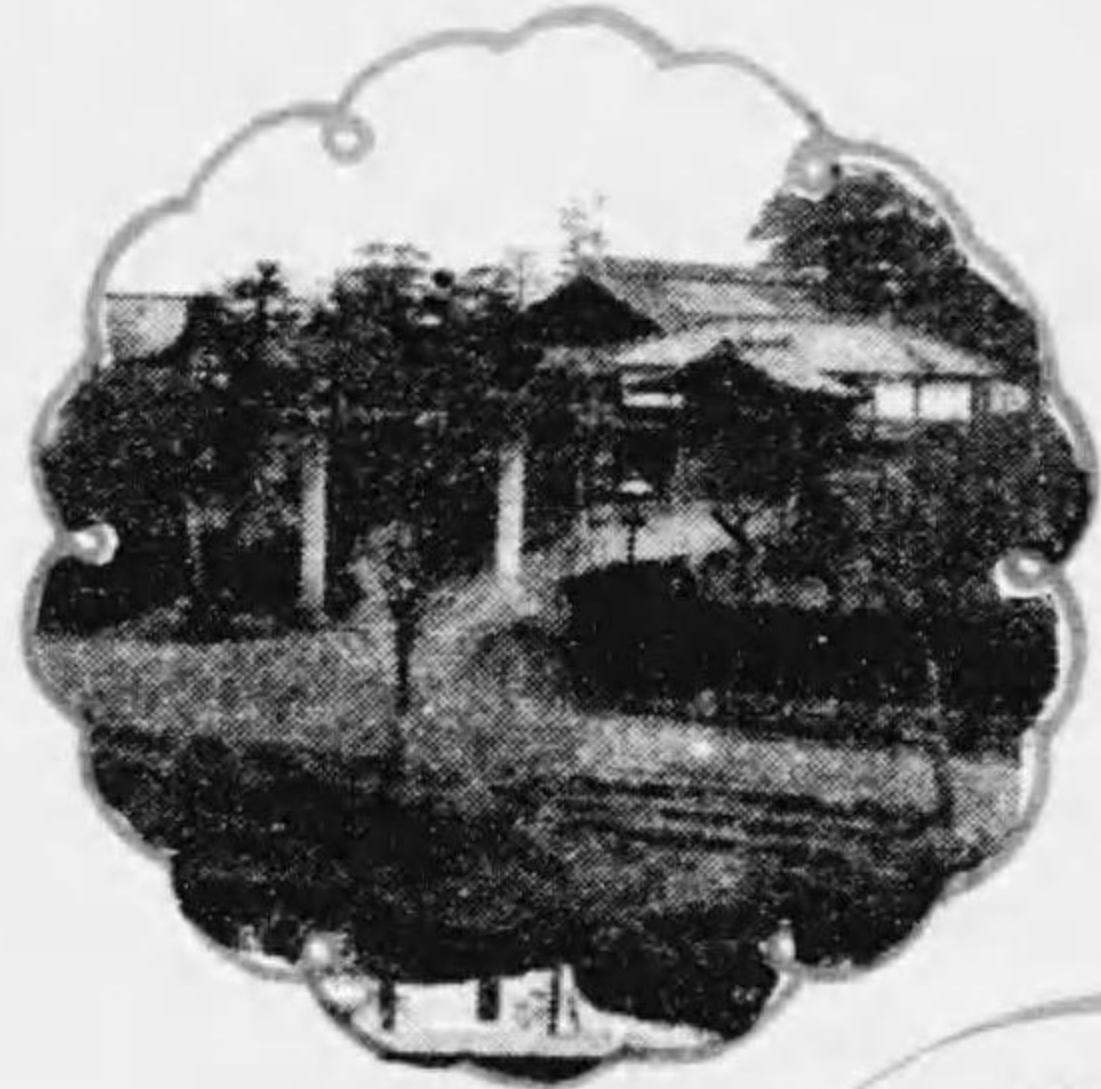


社長 合 組





御料理
御旅館



電話
百五十八番



園主小澤吉三郎

北城根彦
園々樂

(本客用)





乾物 卸小賣

キリンビール
布引サイザル 特約店

彦根川原町

ヤ 伊勢已事 之 輪彌平

電話一五八番



懇切。迅速。正確

庄

奥村兄弟會社

彦根駅前 電話一三三番
全内社 電話一六一番



洋服調進 舶來雜貨

廣田
紅屋吉三郎本店

長電話二一〇二番
振替東京五九一八番
老根土橋町キツアリ



支店 消防ポンプ製造販賣部
老根土橋町西側



産根川原町
石田吳服店



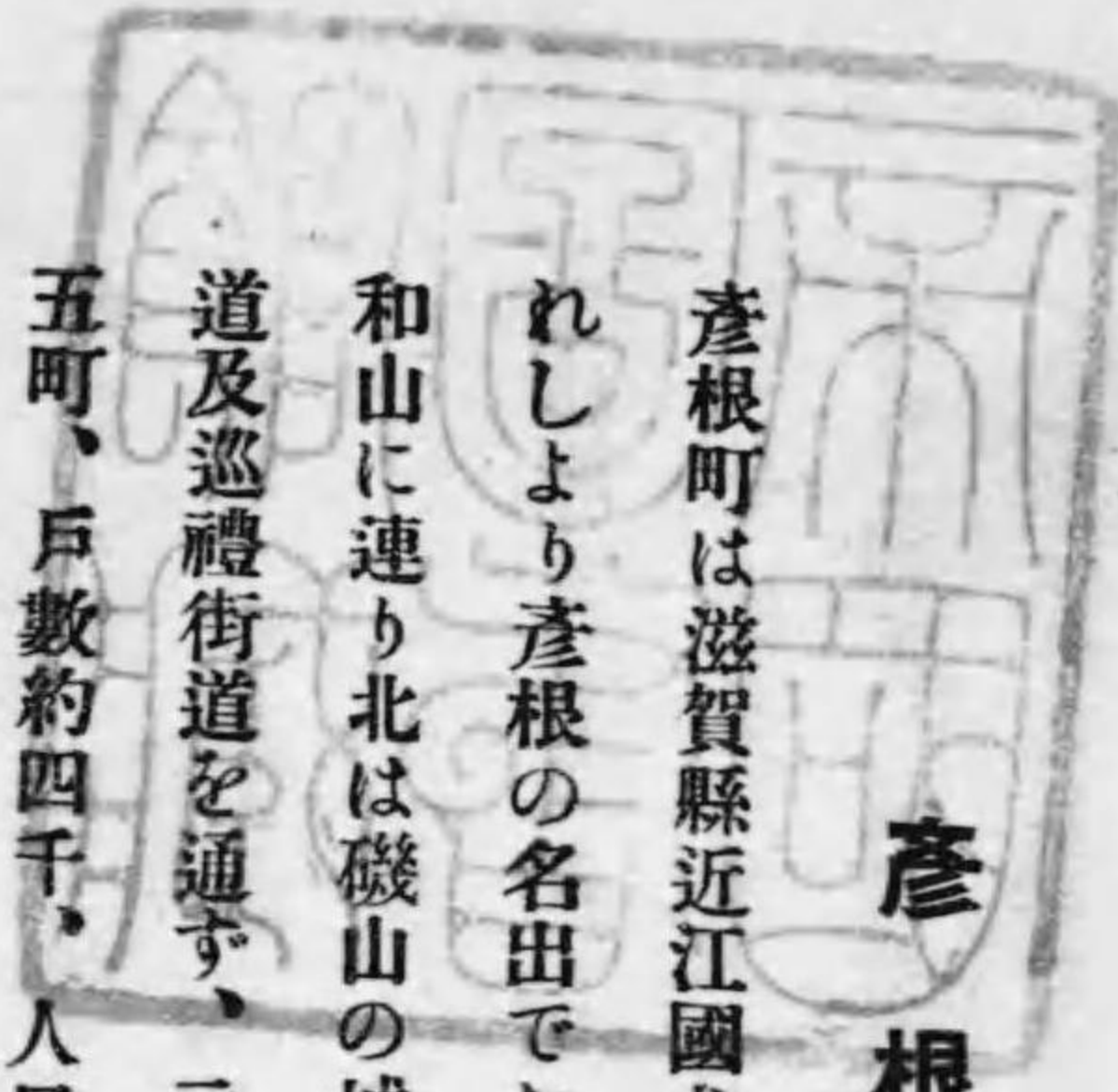
卸 小賣 確實

強 實
(正札附)

彦根案内

彦根名勝

彦根町は滋賀縣近江國犬上郡にあり、往古天照大神の御子活津彦根命彦根山に降臨せられしより彦根の名出でたりと傳へ云ふ。西は琵琶の太湖に接し東は裏湖の秀を抱きて佐和山に連り北は磯山の城址より大湖に臨む、南方は芹川を隔て、湖東の平野に朝鮮人街道及巡禮街道を通ず、元井伊氏三十五萬石の城下にして市街の廣袤東西三十町、南北十五町、戸數約四千、人口貳萬五千を有す、町内には官衙、公署、諸會社、銀行、工場學校、公園、劇場等散在し加ふるに山姿水容の景極めて秀麗、且つ名勝舊跡に富みたれば頗る殷賑を極む、交通機關としては東端に彦根停車場ありて鐵路東南に通じ、且つ近江



高等履物一切

東京製兩傘名持



彦根土橋

高鳴屋履物店

電話番十

振替(大)五八〇番

鐵道なる私設線南方に分岐し、多賀大社、永源寺等參拜の乗客は茲にて乗り換ふるを以て旅客の乗降織るが如く、又町の西端に長曾根港あり、汽船發著して湖上の勝地、多景島、竹生島、白石等の遊覽に便し、水陸の交通兼ね備りて餘す無し、茲に名勝舊跡其他の概略を摘録して遊客の便に供せん。

彦根山

彦根驛より西北約八町にして達す、裏湖を陰に市街を陽に西南より東北に長き丘阜にして大古より活津彦根命鎮座の神域たりしが元正天皇養老年間神域を變して佛宇を創し彦根寺と稱す、當時近江若狹按察使兼授刀長官として此地に住せし參議藤原房前が守護佛として金の龜に乗れる丈け一寸八分の觀音像を安置したり、當時此觀世音の靈驗著しく寛治三年十一月白河院太上天皇王侯卿相を引率して當寺に參入し給ひし旨扶桑略記に見ゆ、又此丘山の西北長尾山即ち現今の觀音堂と稱する附近に丈餘の白巖在り燦として日

月の光輝を湖上に反映し漁業の妨害をなす事夥しきより土民之を地下に埋め其上に佛寺を營み石上寺と名づけたりと古書に見えたれども其年代等を詳かにせず慶長八年築城に際し彦根寺は城下に移せり、以來井伊氏居城の地にして現に天守閣其他往時の俵を存す山上には迎春館あり、御野立所あり、翠綠の間に點綴する楓櫻は春秋の目を喜ばしめ腑瞰する四圍の風致は宛然一幅の好畫趣たり、我國に於ても稀に見る風光明媚の地にして一度杖を山上に曳かんか、去るに忍びざるの思あり、宜なる哉先年 今上帝東宮に在して行啓の砌り最も其風光を御感賞あり朝夕飽かず眺めさせ給ひしごか。

彦根城

彦根山頂にあり、城廓の周圍凡そ一里、慶長五年關ヶ原役終るや、家康井伊直政の戦功を賞し六萬石を加へ（近江十五萬石舊封上野三萬石）通前十八萬石及び敵將石田三成の所據たりし佐和山城を與ふ、翌六年直政上野群馬郡高崎城より移り燒舎を修して居る、

後佐和山の西磯山に城を移し築かんとして果さず、關ヶ原の傷痍再發して卒するや嫡男直繼（後直勝と改む）遺志を承り群臣と相謀り磯山を彦根山に改め同八年工を起す、時の將軍徳川秀忠、伊賀、伊勢、尾張、美濃、飛騨、若狹、越前の七箇國十二大名に役夫を課し之を助けしむ、此年西南なる鐘郭成り九年佐和山城より移る、鐘郭の名は初め報時鐘を茲に置きしを以て爾く呼ぶ、然れども鐘聲城下の北隅に達せずとて後牙城の樓門太鼓櫓の外に移せり、同十一年家康の命に依り京極高次が築きし大津城の天守閣を移轉し濱野吉兵衛大工棟梁となりて初て三層の牙城成る、後元和元年伏見城番直孝（直繼の庶弟）亡父の後を繼ぎて彦根城主となりて十五萬石を領し直繼は上野安中城三萬石の主として分家す、同二年直孝更に工を起し同八年に至り茲に全く城態整ふ、築城法は山本勘介の流に則り軍學者の所謂平山城なり、殊に城地には直孝の時諸國より數多の樹木を取寄せて栽培し城内の洞見を防げり、就中竹は山城男山産にして其質堅く刀劍の目釘に

適し又樞は土佐國の産にて槍柄に適す梓は俗にかみなりさ、けと稱し、又な、かまどの二樹を天守閣及寶藏の附近に植ゑて避雷樹となし、はりのき、楓を植ゑて籠城の薪材に用ひ、かくれみのは血止に用ひし等普く人の知る所にし藩主が焦心苦慮の跡察すべし、當城の通路は高宮八幡口、澤山切通口、船手松原口の三口ありて八幡口は西南に在り追手と云ひ、澤山口は東南に在りて搦手とし、松原口は東北に在りて船手と稱したり、總面積七萬五千八百餘坪三十五萬石の鎮城なるも加祿と共に纔に外郭を増したるのみなれば櫓樓、障壁等總て十八萬石の規模に過ぎず、現存する樓郭は

【太鼓樓門】 寛治三年十二月白河太上天皇當山にありし彦根寺へ臨幸の砌通御の門なりと傳ふ、慶長八年建築の際彦根寺は山の西麓に移したるも此門のみは舊態の儘之を牙城の樓門となせり、故に兩柱に今猶大なる釘穴の存するは廻國順禮札懸の跡なりと、往時報時鼓を置きたれば此名あり。

【天守樓】 大津城の天守を移築したる事前述の如く其石壁は所謂牛蒡漬と稱し外見醜なるも實要を旨とし頗る堅固なりと、又樓閣に穿ちし窓は櫛形にして簾垂窓と云ひ他城に比を見ず、是れ直政の時禁裏守護の密敕を蒙り

し事あれば異變に際し車駕を迎へ奉らんが爲めに作りしものなるべしと傳ふ。

【三層樓】 西の丸にあり、淺井長政の小谷城の天守樓を移築したるものなりといふ、されど今は改築したるもの存せり。

【天秤樓】 門を中央に左右二層樓あり其形狀恰も天秤に似たれば名付く、羽柴秀吉の創築にして内藤豊前守信成の舊城長濱城の樓門にして全部樟材を用ひたりと。

爾來井伊氏此城に居て藩屏たりしが明治四年廢藩に際し陸軍省の所管に移り十一年城郭櫓樓等を撤廢せんとするに際し車駕通御の事あり時の參議大隈重信、滋賀縣令籠手田安定の盡力に依り保存の恩命に浴した後井伊家拂下げを得て今日に迫ぶ、地方民の大隈侯を崇敬するは因を此事に發す。

井伊大老銅像

彦根の産みたる千古の英傑、井伊掃部守直弼は開國の元勳として普く人の知る處なるが往年五十年祭を行ふに中り公の絶大なる偉勳を永久に顯彰すべく舊藩領七郡の有志相謀

り銅像建設を議し明治四十三年一月其筋の許可を得て製作に著手し同年十一月七日竣工同月十二日を以て除幕の式を擧げたり、像は正四位上左近衛權中將の正裝にして丈は六尺、原型は渡邊長男、鑄造は岡崎運聲の手に成り彼の横濱市掃部山に建てられたるより一年後なり、驛より西南三町彦根城山の麓尾末町にあり附近櫻樹多く春花の眺めよし。

いろは松

彦根城山の麓尾末町にあり驛より三町にして達す、城主井伊直孝諸國より竹木を取寄せて城内に植栽せし際土佐より移し植ゑたる松なり、土佐松は根地上に出でず道路の妨害とならざるが故にして俗に此松を稱していろは松と云ふ、其四十七株ありしが故なりしも今は枯るゝもありて其數滿たず、又植繼ぎたるため土佐ならぬもまじれり。

迎春館

城山の西の丸にあり、東宮殿下の行在所に宛つる爲め明治四十三年九月工を起し貳拾萬

圓の工費と數百人の名匠を以て僅か二十六日間に竣成せしめたるものにして手中宮内省技手の設計に係り其用材建築法地方に其比を見ず、四十三年及び四十五年の兩度行啓を迎へ奉りたるが四十五年の如きは參謀演習御見學の爲め前後七日間の御駐輦を辱ふせり井伊伯爵家の有にして乞ひ拜觀するを得。

樂々園

彦根城山の北麓第二郭湖岸にあり、彦根驛より八町にして達す、靈元天皇延寶年間藩主井伊直興の造營に係り所謂下屋敷にして槻御殿と稱したり、春風秋雨爾來今日に至る迄屢々修治を加へたるも舊態の存するは十分の一にも及はず、邸は數棟の亭榭より成り其最も廣きを書院と稱し上段の間下段の間に別れ上段の壁は總て金箔を張り頗る莊麗なり又奥まりたる小高き亭を樂々と謂ひ廣からざるも同じく上下の二室に別れ、天井床柱等數寄を疑し古雅掬すべきものあり、これ井伊直亮の築きしものにして兩室の欄間には藩

主か民の樂を樂むの意をとり樂々の二大字を彫拔けり、樂樂の二字は彦根の書家宮村藍園の書きしものなり是れ樂々園の名の起れる因なり、又楣間に谷鐵心の賦せる樂々十景の詩、大洞白櫻、松原漁火、三曲紅蓮、龜峯大月、龜城新綠、佐和山返照、膽岳積雪、石崎過雨、槻苑涼風、磯浦客帆の扁額を掲ぐ、其他邸内には紅葉の間、雀の間、豹の間の四伍の間、一伍の間等あり、又庭園は泉石の布置妙を極め加ふるに遠近の連山悉く一眸の裡に集り殊に城山の樓閣綠翠の間に隱見する狀得も云はれざる景趣にして春花秋楓夏蓮冬雪の眺め亦湖國稀に見る處にして風流人の杖を曳くもの比年多きを加へしかば邸内に於て料理宿泊を營ましめつゝあり。

八景亭

樂々園に隣る東方にあり、井伊藩主の舊庭園にして槻の御庭と稱し池を造り橋を架す、木石の布置亭榭の建造、綠樹奇石池畔を圍み其間に點綴する櫻楓の二樹は春花秋葉の眺

めを一層美麗ならしむ、中にも臨池閣月夜の景趣は眞に一幅の圖畫の如し、又鳳翔臺、臨池閣、魚躍沼、龍臥橋、鶴鳴渚、春風埒、鑑月峯、薩埵林、飛梁溪、涵虛亭の十景に至りては實に能く園の勝區を盡せしものにして本亭又遊覽者の爲に割烹料理店を營めり

官祭招魂社

驛より三町、尾末町にあり、明治二年舊彦根藩に於て佐和山麓龍澤寺の畔に招魂碑を建設せしに因を發し、井伊直憲及戊辰役從軍の藩士等協議し明治九年本社を創建し六月二十日を以て勸匠の式を舉行し戊辰役に從軍戦死せし隊長青木貞兵衛賴實以下二十五名の靈を祀る、後明治卅一年官許を經維新前後殉難者、及神風連暴動の節、竹橋暴動の節及明治十年、二十七八年戦役に於ける戦死者の合祀を行ひたる以來卅七八年戦役及元治元年京都甲子役彦根藩戦死者の合祀を行ふ、目下全縣下に涉り合祀者二千十九名に達す、九月廿二日官祭を行ひ縣官供進使として參向し春四月十七日には私祭を行ふを例とす。

北野神社、北野寺

彦根町石ヶ崎にあり、驛より十四町にして達す、菅原道眞を祀れる祠にして元和元年直孝の崇敬せし上野國後閑村なる天満宮を彦根寺の境内に移し藩主の氏神と定められ、彦根寺を北野寺と改め井伊家の祈願所として永代寺祿を寄附し大和式上郡福瀬村眞言宗本山長谷寺小池場僧正秀算を別當職となす、寛政七年祝融の災に罹り堂宇悉く烏有に歸したれば直中舊の如く再建せるも之がため記録の徴すべきものなし、後明治六年神佛混淆を廢し新に北野神社と改め北野寺と判別す、明治五年一月郷社に列せらる、末社には屢々堀川天皇の御拜を忝ふせりと傳へらる、白山神社あり、又北野寺は本社と境を接してあり金龜山と號す、本尊は彦根山に於て祀せし金龜に乗れる觀世音にして寺内に神變大菩薩の堂あり賽者多し、詠歌に曰く

御佛のちかひの海はかれけめや黄金の龜の甲はふるとも

松原内湖

町の東北に位する小湖にして一に堺の入江と云ふ、東北は大洞磯山に添ひ西北は松原に接し松原村の川に由て大湖に連る、延長凡二里、巾廣き處は十餘町あり、石田三成佐和山城にありし時代松原に米倉庫ありし爲め百間橋と稱し湖上三百間の木橋を架し連絡を保ち居たるが今はなし、湖中魚類水草を産すること多く風光亦頗る明媚を極む。

明性寺

明性寺は驛を距る十二町、字下魚屋町にあり、明性房法善の開基にして當時天台宗に屬す、後法善、蓮如上人に隨喜し門弟となるに及び本願寺派に代る、後世藩主直孝の歸依に由り本堂を建立し、彦根山の西北に在り、聖徳太子の作なりと傳ふる石上寺の佛像を寄附され今尙本堂に安置せり。

宗安寺

井伊直政の北の方深く浄土宗に歸依し上州箕輪に安國寺を建立す、是れ當寺の根源にして後井伊家に從つて高崎より彦根に移る、直孝の世宗安寺と改稱し元祿十四年祝祿子の見舞ふ所となり堂宇悉く灰燼に歸せしも翌年再建して今日に及ぶ、慶長十二年朝鮮人來聘に際しては此寺を以て宿泊所に充てられ爾來十一ヶ度宿泊所となれり、境内に木村長門守重成の首塚あり、元和元年大阪夏陣の際、玉串川の戦に井伊家の家老庵原助右衛門大阪の部將木村重成を倒し安藤長三郎首を誅す長三郎其功により家康に賞せらる、長三郎重成の首を持ち歸り香花寺なる當寺の自家の墓地に埋葬し、五輪の塔を建て知覺院殿忠翁英勇大居士と號して祭る、徳川時代には憚る處あり唯大切なる先祖の墓のみ云ひ傳へたるも近世に至り何れに憚る所無きを以て追々世に喧傳さるゝに至れり。

天寧寺

彦根驛の東南約十七町青波村字里根にあり、曹洞宗永平寺派にして萬年山と號す、境内

一四
に羅漢堂あるを以て俗に五百羅漢と呼ぶ、文政年間藩主井伊直中下敷下町にありし崇徳寺を移したるものにして、堅光和尚を開祖とし本尊には聖觀音を安置す、又寺内に井伊直弼の守本尊准提觀音を安す、直弼未だ埋木舎にある時一日當寺に賽す寺僧つくく直弼を觀て曰く『君は後年高位高官名聲を四海に轟かし給ふの徳を具へさせらるゝと雖も惜哉眉宇に劍難の御相在り宜しく准提觀音を崇信して御難を遁れ給へ』とて京都の佛師林茂助の作れる白檀製の尊像一體を贈れり、爾來直弼は常に此の觀音像を身邊に安し須臾も手放し給はざりしに天命なりしか萬延元年三月三日登營に際し此の像を携ふるを忘却せられたる爲遂に彼の危難に遭ひ給へりと傳ふ、門内左側に直弼供養塔ありて直弼遭難の際身に著けられたる遺物を納む、本堂前なる羅漢堂は直中寄附に係る五百羅漢像を安す、右は文政十一年佛師駒井法橋朝運の作にして完全に五百體存し彫刻又凡ならず、寺背の小丘に直中、直弼を祀れる祖靈社あり。

千代神社

彦根驛の東北に位し十一町にして達す、孝元天皇々女倭迹々姫命御降誕ありて創立し給ふ所にして天宇受賣命を祀る、後履中天皇の御宇再建の事あり反正天皇三年春二月木菟の臣詔を奉じて二十一社田鹿宮伴社を祭る、中古織田氏の治世兵亂屢々起り附近の堂宇悉く兵燹に罹りたるも當社のみは其厄に遭はざりき、後天正十三年春石田三成佐和山に築城後一度彦根山麓尾末の地に移したるも慶長六年井伊直政命に依り舊地姫袋の地に移し寛永年間直孝將軍家光の命を奉じて多賀大社と共に造營す、從來千代宮と稱せしも明治二年千代神社と改め十六年縣社に列せらる、祭神天宇受賣命は人も知る我國舞樂の祖にして宮中八神殿の一柱へ大宮能賣女命即ち是なりにも祭祀されあるに拘はらず本邦中之を祭祀する社殿稀なるを以て信仰者甚だ多く四時賽客の絶ゆる事なく諸方より集り來る遊藝人藝妓の如きは必ず賽するを常とす、拜殿は今より七十年前坂田郡常喜の名匠

太平の作に成り入母屋千鳥唐破風造りにして其精巧稀に見る處にして今日にては萬金を投するも之を造る事尙不可能なりとて名匠の觀察するもの少なからず。

多賀大社に藏する『多賀大社儀軋卷三』千代宮史中に次の如く見えたり。

御神體は天の鈿女命にて御す、皇孫天上より降臨之時天照大神勅有_レ世二神を相添へ令供奉給ふ、其一神也然るに猿田彦之大神天之八衢にて路次の障なさんと擬處を鈿女命の謀にて強勢成心をも柔和に令成守護を加へ結局は臨降の先陣となりて令隨給ふ事偏鈿女命徳也名譽の事共也猿田彦之命御暇を申し勢州へ趣き給ふ時に内々鈿女命を誘引し給ふと皇孫聞召て勅曰此神の名を顯しけるも鈿女命也、さいはひの事也夫婦なるべしとて此神の名を

姓氏として猿田君の號を賜ふ、云々、それよりして若君姫君とて君の字付て言事したるなり。
猿田彦之大神勢州を起て當地に赴き給ふとき此神の曰く、江州彦根山の麓に鎮座し千代の宮と垂迹したまふ也、毎月兩神共に十五日は山田之社に住常神遊の池水有り世間早魁の時分は此池にて神を祭り雨を祈ればかならず降雨あるなり、下十五日は彦根の千代宮に兩神共住給ふと也、是れにも池あり千代の池と名付る也。

佐和山城址

彦根驛より東北約十二町、城山と相對して聳立する佐和山の頂にあり、佐々木定綱の六

男佐保六郎時綱居住せし地にして寛正應仁の頃六角政頼より數代犬上郡を六角家より支配し佐和山城に小川左太夫を城主とし愛知、犬上の旗頭をして之に附屬せしめて京極勢に備ふ其子孫一郎も在城せしが永正年間磯野伊豫守員吉來り又此城に居る、其子丹波守員昌之を繼ぎ淺井氏に屬す、元龜元年員昌姉川の戰破れて城に入る織田信長の臣丹羽五郎左衛門尉長秀、市橋長勝等來り圍む員昌城を開いて若狹の武田氏に據る、信長丹羽長秀を此城に封じ五萬貫の地を給す、後長秀封を若狹に受けて移る、天正十一年羽柴秀吉堀久太郎秀政を此地に封せしも秀政越前國北庄に移るに及び石田治部少輔三成を封じ二十三萬石を領せしむ、後慶長五年三成秀頼の命を僞て諸將を招き軍を起す、同年九月十五日關ヶ原の役東軍大に勝ち井伊直政をして此城を攻めしむ、時に城兵、長谷川右兵衛反忠して城に火を放ちたれば三成が父隱岐守正繼、兄木工頭正澄、其子左近太夫朝成其他一族郎黨悉く自殺す、三成のみは伊吹山下に匿れしも後捕へられて斬せらる、此年十

月勳功に依り徳川家康直政を佐和山城に封じ十八萬石を領せしむ直勝に至り彦根城を築き之に移りしを以て終に廢墟となれり、清涼寺住職漢三石田群靈碑を山の半腹に建て、群靈を弔せり。

愛宕山仙琳寺

彦根驛より東北約十一町にして達す、佐和山の支丘愛宕山の中腹にあり、彦根城主井伊直興の庶子幼にして僧となり京都般舟院の職務に任じ本宮上人と稱し嘗て一寺を創建するの志願ありしが中途病を得て歿す、弟子義空遺命を受け彦根に來り此地に堂宇を創す當時の城主直中此の擧を聞き堂宇を造營して寺祿三百石を寄附し仙琳寺の號を授く、是本寺の始めなり、寺内愛宕堂には將軍地藏尊を安置す、火災消除の露驗顯著なりと傳へ世人の信仰深し『文武天皇御宇役行者清瀧に於て秘呪を修せしに火氣赫々として地藏尊の白頭に騎り大旗を擁し稻荷秋葉權現等を率ゐて出現し給ふを拜せり、神頭鬼面戴金の

者あり曰く我は靈山會上に於て佛の附屬を受け大魔王となれり永く群生を利益す云々』と古書に残る、之れ將軍地藏をして火災消除の祈願に靈驗ある所以なり。

佐和山神社

井伊家中興の祖直政及び其子直孝を祭祀せる社にして文化四年五月井伊直中の造營に係り八年六月成りて護國殿と稱したり、井は直政關ヶ原の役の勳功により佐和山城に封せられし際『祈るぞよ子の子の末までも護れ近江の國つ神』と詠じたるによる。

爾來世々藩主領民の崇敬最も厚かりしが王政復古して維新となるや明治九年十月舊彦根藩領の庶民深く藩宗の恩徳を追念し官に請ひ神社に列して佐和山神社と改め後社格累進して縣社となる、毎年四月一日古式に依る祭典を執行し金龜山へ鳳輦渡御す、其行列は武者渡と稱し何れも甲冑を著し劍を佩けり。

殿舎の内部は黒漆を以て塗り頗る壯嚴を極む、又社前石燈の下に大阪の役若江堤より記

念として持ち歸りし薄を植ゑたり、俗に血染めの薄と稱す、傍に田部密が此事を記せし石碑を建て賽者の便に供したり、其他境内には正二位勳一等伯爵井伊直憲の瘞髮塚在り彦根驛より十五町にして達す。

清涼寺

寛永八年井伊直政菩提の爲めに井伊直孝の命により上野國叢明寺の愚明和尚の開基せる寺にして直政の法號を祥壽院殿清涼泰安大居士と稱したれば寺號之によつて起る、代々井伊家の香華院として寺祿三百斛を寄附し諸堂の營繕器具等一切の供給は悉く城主の供養になりたる爲めの曹洞宗寺院中屈指の大叢林と稱せられたり、建立後今日に至る迄約三百年間代々の住職は井伊家に於て必ず高德知識の師を請したれば當山の名普く知らる井伊直弼幼時此寺にあつて禪學を修し遺物多し、堂宇頗る宏壯、後に佐和山の翠巒を負ひ前に彦根城山の英姿を望み山門、本堂、座禪堂、方丈、庫裡等斷續して相列る、本堂

の前に二丈餘の大南天樹あり、稀世の大樹なれば世人南天寺と俗稱す、彦根驛より十六町にして達す。

龍潭寺

一條院の御宇正暦年間、井伊氏の祖備中守共資の子共保遠州の國司として引佐郡井伊谷にあり同地の地藏院を改めて自性院と號す、夫より十三世を経て直盛に至り永正四年龍潭寺を建立す、當寺は實に此の寺刹の分刹にして元和三年井伊直孝現地に之を建立せしめ遠龍五世昊天和尚を請じて開山とす、井伊直弼の母堂の灰塚あり、又後醍醐帝の皇子宗良親王の位牌を藏す、方丈、開山堂、法會堂、庫裡、經藏、觀音堂、鎮守堂の諸建築物あり、其の位置大洞湖畔の勝地を占め大洞辨天井伊家の香華寺清涼寺に接隣し其名天下に高し、本堂に掲ぐる龍潭護國禪寺の扁額は某親王の筆に成り元祿年間下賜されたるものにして菊花御紋章燦として殘れり。

井伊神社

天兒屋根命二十二代の孫大職冠鎌足の後裔藤原共資一條帝の御宇遠江守に任せられ村櫛邑に居り治績大に擧り民悦服す、其子共保長するに及んで蝦夷を征し功を以て三條帝の御宇父の如く遠江守に任せられ同國引佐郡井伊谷に居る、依て井伊氏と稱す、是即ち井伊家の鼻祖たり、井伊直亮天保十三年社殿を石ヶ崎（今龍潭寺前招魂碑のある所）に創立して共保を祀り稜威鞍安彦命と追號す、其社殿朱を以て塗り殿前の彫刻物は近江長濱の住人早瀬守次の作にして精麗を極む、其華表の額は神祇伯白川三位資敬王の筆と傳ふ明治二年井伊直憲現今の地に移し神祇官の許可を得て井伊神社と稱す、境内廣濶幽邃能舞臺、神樂所、社務所等建て列なり、鬱蒼たる松樹之を圍繞して翠色滴るが如し、彦根驛の東北十六町人車の便あり。

大洞辨天堂

彦根驛より約十七町にして達す、井伊神社の東方大洞山にあり日本三辨天の一と稱す、元祿九年藩主井伊直興の建立に係り山麓より石階を通ず、樓門の左右には日、光月光の二神像を安じ本堂には辨財天女の座像を安置す、像は相州江ノ島の辨財天を模して造れるものにして其顔面常に賽者の祈願によつて喜怒を現す靈像なりと傳へらる、殿堂は凡て青丹を以て彩り用材建築の美頗る壯麗、堂前に一基の石塔あり内に井伊直興の遊獵に用ひし鐵砲を鑄潰して作りたる三尊佛を安じ西國三十三ヶ所及四國八十八ヶ所、阪東秩父三十三ヶ所の靈地の土を蒐集し塔下に埋むと傳ふ、又經堂には一切經、二千百一冊を納め堂内の兩側には丈四寸許の木彫大黒天像一萬體を藏む、此像は富貴繁昌の靈驗ありとて賽人等堂守に請ひ其内一體を借受け之を自家に祀り祈願成就の曉新に一體の像を添へて返す風習あり、故に本堂草創以來信徒の調製して奉納せるもの無慮何萬體なるを知らず、其他蛇形を祀れる奥の院、本地堂等あり、地は前に松原内湖を控へ遙かに彦根城

と相對し境内櫻楓の二樹多く春花秋葉の眺めは素より盛夏の候山麓の湖上に輕舸を放ちて涼を汲み又魚網するに宜ろしく眞に彦根に於ける遊樂の一勝區たり。

附近の勝邑

多賀大社

彦根市街を距る約二里犬上郡多賀村にあり、彦根驛より近鐵線に乗り換へ多賀驛に下車すれば數町ならずして達す、官幣大社にして井井諾、伊井冊の兩神を祀る、一に日の小宮と稱し、神代、伊邪那岐大神國家經營の功を畢へ天に登りて復命し給ひし後此の地に鎮座し給ふ處なり、反正天皇三年木兔臣勅を奉じて降臨の地を檢せる旨、清寧天皇群臣と共に本社の祭儀を論定し給へる旨何れも古書に見へたり、元正天皇養老年間御不豫の事あり勅して祈願を命せらる、時に齋火を以て蒸飯を調ひ神山の扶移の樹を以て飯匙を作

り獻りしに御不例頓に癒えさせ給ひたり、之れ即ち御多賀杓子の起源なり、當時飯匙を作りし樹枝を地に挿したるもの根を生じ繁茂し飯盛木と稱して現存せり、後深草天皇建長三年祭使馬上役を六波羅及關東將軍に下知ありし旨社藏古書に見ゆ、祭使役とは國司の祭事に奉仕したる事にして徳川時代には毎年例祭に當り神事奉行として麾下の士を派遣し京都二條城より雜色來り警護をなせり、神事奉行は十萬石以上の諸侯兩名を任じ井伊家之が接待役なりしが其煩に堪へず幕府に乞ひ後井伊家に委託せられたれば物頭役二名組子百名宛を率ゐて參向警護し廢藩後は犬上郡長神事奉行として參向せしが今は遺例に依り郡内名望あるものを選びて頭人たらしむ、呼んで馬頭人と云ふ乗馬にて供御するを例とす、彦根藩は質素の藩風にして士分の絹帛を着するを許さざりしも神事奉行たる當日のみは縮緬羽織着用を許したり之れ諸侯たるの資格による、古來より朝廷の崇拜深く大嘗、御即位、立太子、又は皇嗣御著帶或は御惱みの時は特に勅命を以て御祈禱を命

せられ又正、五、九月の三回は内儀より代參を參向せしめらるゝこと恒例とせり、代參は伊勢大廟を拜して後本社に來りたるが現に其通路たる東海道土山宿より中仙道愛知川宿迄を御代參街道と稱せり、然れども何時の時代より始まりしやは桃園天皇安永二年祝融の災に罹り記録烏有に歸して判明せず、大正三年一月四日官幣大社に列せられたり、境内廣濶にして而も高燥の地に位し石の反橋を渡れば社門あり、内に本社、拜殿、社務所、能舞臺、四足門、三宮、聖社、熊野神社、天神社、蛭子社、荒神社、伊勢社、日向社等數多の社殿相連り千年の老杉鬱蒼として神寂びたり、毎年四月二十二日及九月初午の日を以て大祭を行ふ例なるが、遠近より參拜する者其都度十幾萬を以て數へらる。

多景島

琵琶湖島に浮く一小島にして東西十三間南北二町餘間周圍凡五町、長曾根波止場より海上一里半の沖合にあり往古島内篠竹繁茂せしかば竹島と呼ばしが今は風光佳絶の故を以て多景島と稱す、島内の見塔寺は日蓮宗に屬し明暦年間の創建に係り出山釋迦、金像釋迦、毘沙門天等を安置す、寺の北方蟻の戸渡りを渡れば巨岩に法華題目を刻す一偉觀たり、島の西南に當る沖合に水面を聳出する約三丈許の大白石あり、沖の白石と呼び太古天より降りしものと傳ふ。

竹生島

彦根港を北に去る六里の湖上にあり、汽船に便して達するを得、島内に竹生島辨財天の祠あり、日本三辨天の一に數へらる、風光明媚にして四時遊客の絶ゆる無き勝地なるが辨財天の由緒を調するに、聖武天皇の御宇、天照大神兩寶童子に變じ神託して宣く『江州の湖中に一小島あり辨財天女降下の地なり、堂塔伽藍を建立して祭供すれば國家安泰、五穀豐饒、萬民利益多かるべし云々』神龜三年僧行基に勅して此島を開かせ給ふ、同年六月十五日第一寶殿成り之を嚴正山大神宮寺大梵涌樓飛殿と勅し給ひ、辨財天を安置さ

る、翌年寶殿成り本業寺と稱し千手觀音を安置す。

代々皇室の勅願所にして維新迄は陛下の身代を御預けあり無財天女の前に安置し玉體安穩、天地泰平を祈願せられたり、延暦七年桓武帝勅命に依り傳教大師來りて祭供す、弘法大師又此島に來りて秘法を修したり、貞觀二年慈覺大師傳教大師の遺命を受けて寶殿を改修し天女の像を彫刻安置す、昌泰三年十月寬平法皇行幸宮殿増築の勅あり、淺井郡の檢校出雲春雄旨を奉じて造營し法皇御燈明料として勅旨田三町を寄進さる、貞永元年火を失し寶殿以下十四坊三十餘院焼失す、京徳三年四月再び火災を起す、永祿元年重ねて祝融の災に罹り寶物悉く灰燼に歸す、秀吉長濱城に封せられ後關白となるに及び改築を劃したるも果さずして逝く、秀頼の時、伏見桃山殿を移して修築し以て今日に及ぶ今は天台宗に屬せり。

官公衙其他

專賣局烟草製造所

彦根驛前にあり、名古屋支局の管下に屬し明治三十八年四月の創設にして當時は犬上郡福滿村大字平田にありしを四十一年四月現地に移す、就業工女四百名餘にして一ケ年間約十萬貫の刻煙草を製造し居れり。

彦根公會堂

金龜城山の麓に位し彦根驛より十町にして達す、大正三年十月工を起し翌四年三月二十五日を以て竣成、十月五日盛大なる落成式を舉行せり、前に城山の雄姿を仰ぎ後に大洞内湖より膽嶽の勝景を負ひ風致極めてよし。

彦根圖書館

彦根公會堂に附設し大正五年二月一日の開館に屬す、集むる新古の書籍凡ゆる部門に涉りて約六千部、別に新聞雜誌の縦覽所の設けあり、又井伊直弼公の功業を追慕する爲め開國記念文庫を設置し開國に關する約一千部の書籍を藏せり。

縣立彦根中學校

彦根驛より十一町城山の麓にあり、明治八年十月舊藩主井伊直憲伯以下有志釀金して五番町に彦根學校を建築し小學優等生を募りて教養せしを糊とし後滋賀縣廳の管理に移し縣立彦根中學校と改め明治四十五年四月工を起し七萬四千圓を投じて大正四年三月現校舎竣成し生徒定員を六百名に増加せり、開校以來卒業生總數千二百人に達す。先年 今上帝の行啓（東宮時代）の榮を得たるが、今回特別大演習を行はせらるゝに中り畏くも大本營に宛てさせられたり。

町立彦根商工學校

市街の西北に位し驛より十二町にして達す、町立にして明治四十四年五月の開校に係り元工業學校と稱し建築家具の兩科を教へたるも今は家具科及乙種程度の商科に改めたり同校敷地は元眞宗佛教中學校の趾なるを以て敷地三千六百八十四坪の廣きものあり、校庭の運動場尙二千三百坪に達し居れるを以て自轉車競争其他斯種の運動競技場として常に用ひらる。特別大演習後の御饗宴場に當させられたり。

縣立彦根測候所

明治二十六年十月一日の創立にして、氣壓、氣溫、雨量、濕度、風、雲等の氣象觀測をなしたるが其後規模を擴張し日照時間、地面温、蒸發量、地中温度、琵琶湖水温、風壓等の觀測に従ふ、就中自記寒暖計、自記晴雨計、自記雨量計、自記温度計、自記風力計を備へて氣壓、氣溫、風力、雨量の不斷觀測と大森式簡單微動計による地震觀測と琵琶湖の定常振動調査は其誇りとするに足る。

縣立水産試験場

彦根市外を南に距る十六町、犬上郡福満村字平田にあり、明治三十三年四月近江水産組合の所有する養鯉場たりしを縣の經營に移し、水産に關する各種の試験を行ふ、明治四十一年より十年計畫にて琵琶湖水産經營事業を起すに當り、鯉兒一千三百萬尾を得べき設備を爲し、金龜城外壕一萬四千五百七十三坪を利用し、附屬養魚地となし本場に於て孵化せし鯉兒を移して養成し以て琵琶湖に放流し其の繁殖を促しつゝあり、本場の設備は孵化池(三百坪)産卵池四個(三十二坪)親鯉飼養池(千三十一坪)養龜池(二百坪)養鰻池(二十坪)養鱒池二個(六十坪)各種試験池(四百坪)を有し亦高島郡百瀬村字知内に一千三百坪に及ぶ鱒卵孵化場を有し、滋賀郡小松村字南小松には鱒池中養殖を目的とする約五百坪の養魚場を有し居れり。

縣立彦根高等女學校

驛より南西十二町大字池洲町にあり、明治十九年彦根町有志女子教育の不備を慨き釀金して教養を開始せるを根源とし後町立に移し更に三十五年四月を以て縣立に變更し以て今日に及ぶ、四十三年十月八日 東宮行啓授業台覽あり且つ御寫眞を下賜さる、後四十五年再び鶴駕台臨の光榮に浴したれば校内に行啓記念文庫を設け且つ年々記念講演會を開きて之を記念す、特別大演習外國武官の宿舍に充れたり。

諸 統 計

一、面 積

彦根の廣袤は東西二十五町、南北十五町、周圍二里七町、面積二十八町方里とす、現在の地積左の如し。

公有地 七町一段三畝步
 民有地 百八十六町七段步
 内 譯
 宅地 九十七町九段步
 田 九町二段步
 畑 五十六町七段步
 池沼 五町步
 山林 十七町一段步
 原野 一町四段步
 免租地 十一町八段步

二、氣象

氣候は概して溫和にして空氣乾燥せるを以て衛生に適す、今大正五年中の氣象狀態の大要を示せば

月次	氣溫	地面溫	濕度	雲量	日照時數	降水量	蒸發量	天氣	日數	上ノ内 日降ノ水 數
一月	三四度	三二度	六度	六四	二八二時	一〇八〇	一四	快晴	三	〇
二月	三四度	三二度	六度	六四	二八二時	一〇八〇	一四	晴天	三	〇

月次	氣溫	地面溫	濕度	雲量	日照時數	降水量	蒸發量	天氣	日數	上ノ内 日降ノ水 數
二月	四〇	四四	七七	七五	六七七	一七六七	一三	—	—	—
三月	五〇	七二	七三	六二	一六九七	八八四	二二	—	—	—
四月	二一〇	二三八	六六	七〇	一六五〇	一九三五	二六	—	—	—
五月	一五三	一九四	七六	六〇	三六〇	一七三六	三八	—	—	—
六月	三三〇	二五〇	八一	七六	一五七〇	三〇〇〇	四一	—	—	—
七月	二五〇	三〇二	七九	四四	二八四一	一〇〇〇	五五	—	—	—
八月	二六〇	三〇三	七九	五九	二二二二	一〇〇一	四七	—	—	—
九月	二三一	二六三	八二	六五	一七七四	一四七〇	三五	—	—	—
十月	一八〇	一九九	八一	六〇	一九九七	一六三三	二八	—	—	—
十一月	二二六	二二六	八一	五〇	一六一一	八九六	一七	—	—	—
十二月	五四	四八	八二	五四	一五二一	一〇七四	二二	—	—	—
全年	一四二	一六三	六六	六二	二〇九〇	一七七一	二八	—	—	—
全年	一三五	一五六	六六	六四	一九七四	一七三六	二八	—	—	—

表中氣溫、地面溫、濕度、雲量、蒸發量は何れも平均量を記載したり。

三、戸口

舊幕時代は三十五萬石の城下として人口三萬餘を有し近縣罕に見る殷賑を極めたるも、明治維新と共に廢藩置縣の制布かるゝや俄かに火の消へたるが如く衰微し年々人口減少を見たるも明治三十年頃より漸次町勢恢復の機運を示し明治の末葉より大正年代に入りて各種工業の勃興と共に益々町の發展繁榮を加へ、戸口又増加し現今戸數二千八百餘戸人口三萬に垂とし漸く舊態に復せんとするに至れり、今試に最近五ヶ年間の統計を掲ぐれば左の如し。

年次	戸數	人口		計
		男	女	
大正二年	三、六〇二	一〇、九七七	一〇、七五四	二一、七五一
大正三年	三、六八八	一一、五五五	一〇、八三三	二二、三八九

大正四年	三、七六四	一二、三〇七	一一、〇六五	二三、三七二
大正五年	三、八三三	一二、三九六	一一、五八八	二三、九八六
大正六年	三、八八一	一二、四三六	一一、八三九	二三、二七五

四、町政

廢藩後種々の形式に變化したるも現今にては九十二ヶ字町を十區に分ち各區に區長及代理者を置きて事務上の便を圖り大字本に町役場を設置して之を總轄す、現在職員及議員左の如し。

町長	石橋彦三郎	助役	柳瀬銀藏
助役	勝辨藏	収入役	滿島善次郎
町會議員 (議席順)			

後藤健藏	竹村伊平	木下喜七	藤村清平
小川喜市	伊藤喜三郎	田原辰藏	赤井安吉
金森寅藏	若松榮吉	森彦三郎	近藤平兵衛
夏川熊治郎	片野喜平	橋詰猪三郎	奥野久太郎
北村利平	渡邊九一郎	清瀬宗碩	山田彈
小林弁三	松居六三郎	木下長太郎	廣野長三郎
小堀留治郎	佐木鑛二郎	原甲次郎	高木喜三郎
上野庄太郎	田井中牧人		

五、商業

彦根は往時大藩の餘澤を蒙り生計なし來り從て明治維新廢藩に際し一大打撃を受け加ふ

るに西方は琵琶湖に限られ北方は山嶽を以て阻まれ交通不便にして商業不振衰退を極めしが近江鐵道の開通は大に商權區域の擴大せられ居民の覺醒と相俟つて近時著しき繁盛を見るに至れり。

六、工業

彦根町の工業として最もよく世に知られたるは彦根佛壇なり、其起源は今を距る三百年前寛永時代にして爾來多少の盛衰ありしが交通機關の發達に伴れ輓近著しく發達し年額拾餘萬圓に達せり、然れども其他に於ては區々たる家内工業の外に見るべきものなかりしを以て彦根實業同志會を始め斯種實業團體竝に地方有力者は多年地方興業の振興に努めたる結果明治の末葉に至り近江水力電氣株式會社の設立により工業勃興の機運を促進し爾來瓦斯、製絲、製藥、絹紡、製綿、製材、製鐵等其他大小工場の設立を見るに至り

著しき進歩を遂げ尙其機運は益向上せんとしつゝあり。

七、交 通

市内縦横の道路は附近町村との連絡を保ち東海道線は町の東端にあつて北南に縦貫し、私設近江鐵道は彦根驛より南東に分岐して關西線に連なる、水運は町の西北端長曾根港により長濱、大津其他に通ずるを以て交通機關は略完備せりといふを得べし。尙大正五年四月末日現在の電話一般加入者は二百八十三個、自動電話一ヶ所にして目下架設申込中のもの百餘個あり。

八、官公衙

町内にある官公衙左の如し

犬 上 郡 役 所 (池洲町)

彦 根 税 務 署	(四番町)
彦 根 區 裁 判 所	(金龜町)
滋賀縣第三工區出張所	(池洲町)
專賣局名古屋支局彦根出張所	(驛前通)
彦 根 郵 便 局	(土橋町)
本 町 郵 便 局	(本 町)
彦 根 町 役 場	(本 町)
彦 根 警 察 署	(二番町)
鐵 道 院 彦 根 驛	
執 達 吏 役 場	(金龜町)
縣 立 彦 根 測 候 所	(丸ノ木町)
縣 立 水 産 試 驗 場	(下片原)



滋賀縣彦根町

近江商業銀行 株式會社

長電話一五番

支店

水口支店 電話六三番	高宮支店 電話四番	愛知川支店 電話一一番	八幡支店 電話四三番	米原支店 電話一〇番	八日市支店 電話三八番
---------------	--------------	----------------	---------------	---------------	----------------

九、銀行、會社

銀行

株式會社百三十三銀行
株式會社近江商業銀行
株式會社近江貯蓄銀行
株式會社不動貯蓄銀行代理店

會社

(水電) 近江水力電氣株式會社
(製絲) 合名會社小口組
(瓦斯) 彦根瓦斯株式會社
(製絲) 國華製絲株式會社
(製絲) 琵琶製絲合資會社
(醬油) 上野合名會社
(絹綿) 近江絹綿株式會社

土橋
藪下

新聞社

株式會社彦根米穀取引所
(漆器) 彦根漆器合資會社
(運送) 彦根棧橋合資會社
(運送) 奧村兄弟合名會社
(鹽酸加里) 近江製藥株式會社
(屑物) 小北合資會社

(日刊) 近江實業新報社
社交ノ友新報社

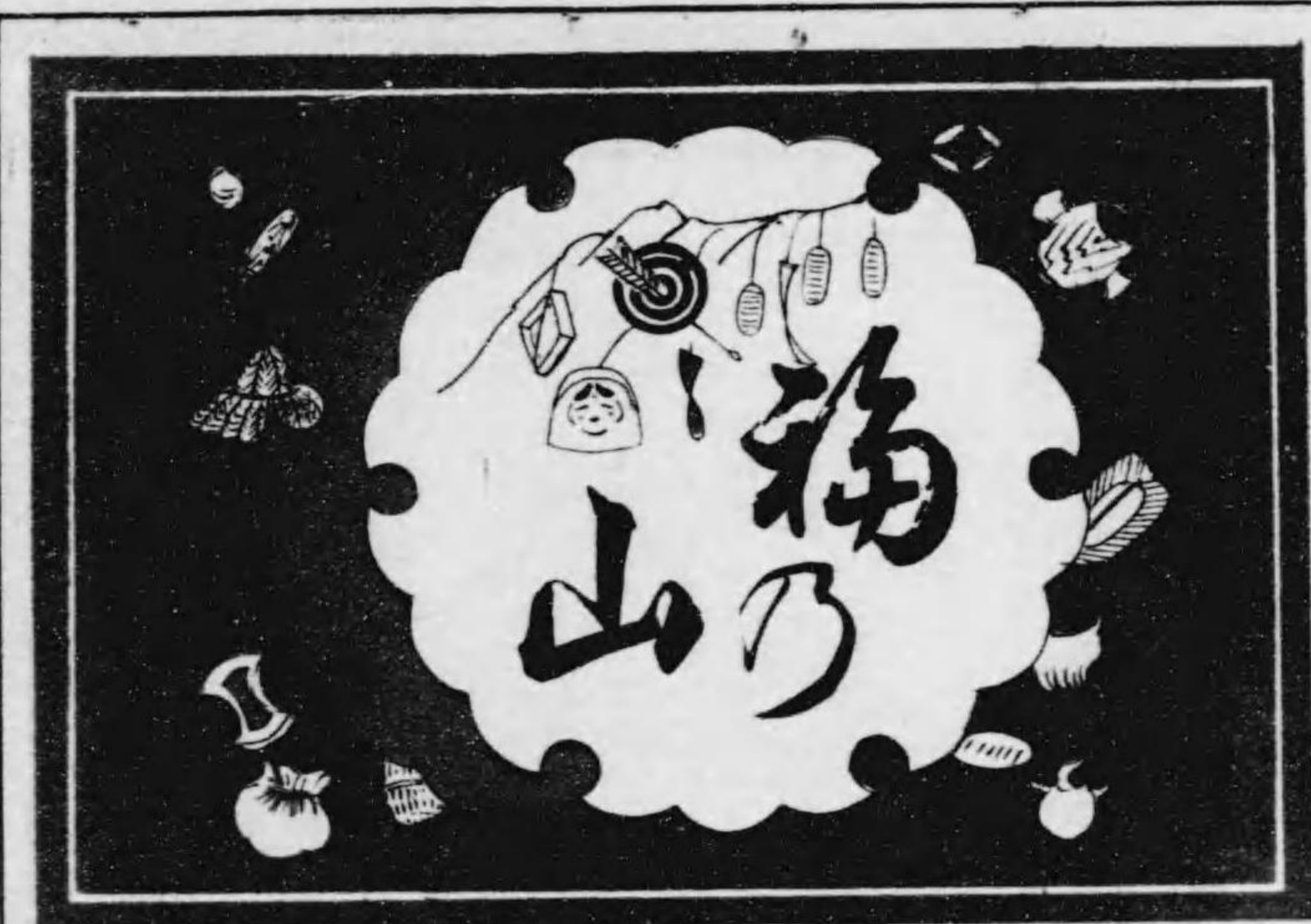
支局
近江新報社
大阪朝日新聞社
滋賀日報社
淡海新報社

石杖庭石
石燈籠

建築請負

松居六三郎

電話二一五番



酒醸業

松居安齋寺所
福山源吉

電話二二九番

大日本優等清酒

福山源吾

醸造元 福山源吾

福山

酒醸業

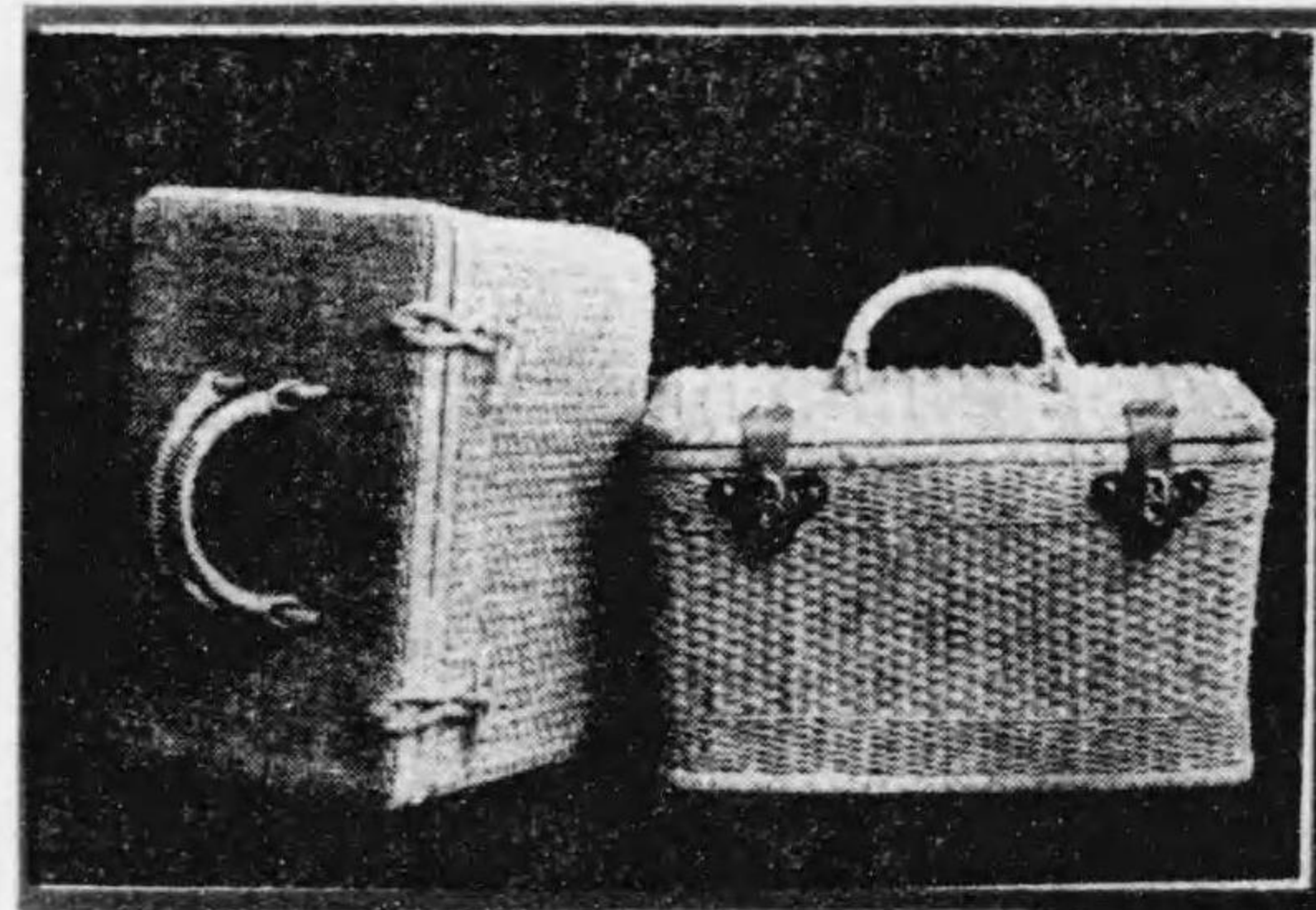
福山源吾

石杖庭石

石燈籠

建築請負

松居六三郎



藤製手提靴
製造卸販賣



舶來雜貨商
彦根町川原
藤田商店
電話拾六番



御料理
御旅館

彦根城内

八景亭

電話一〇五番

御料理仕出し
名産鮎壽し

彦根内大工町

西吉

電話一〇六番



合 御茶處



彦根町大字川原
筒井軒 小椋周藏

電話百五十一番

御旅館

彦根橋本町

井筒屋

電話五十七番

御旅館

彦根橋本町

米文旅館

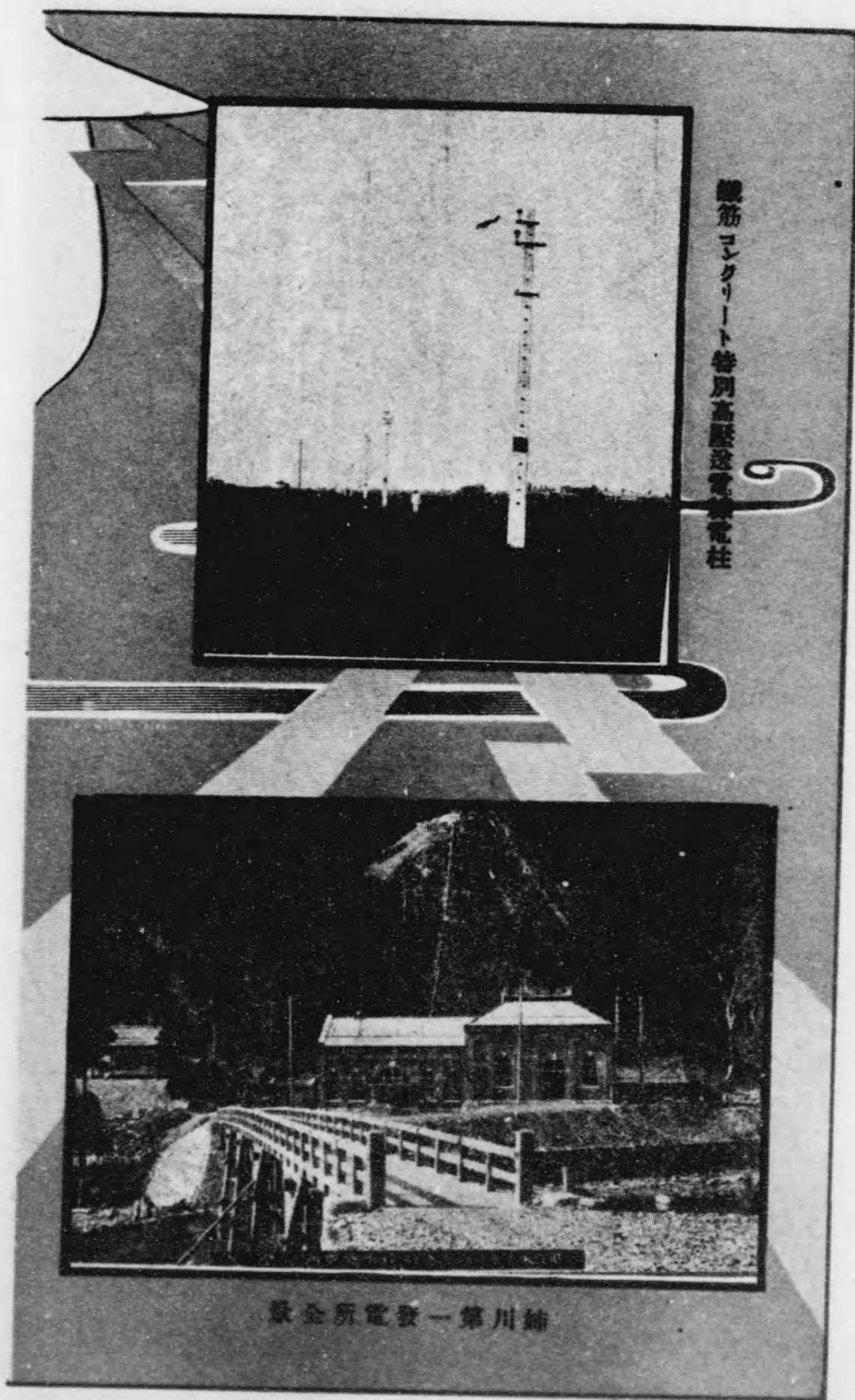
電話四十番

近江水力電気株式会社

電話 園二三番

<p>創立 明治四十二年十月</p> <p>資本金 貳百萬圓</p> <p>積立金 拾壹萬五百圓</p> <p>固定資本償却高 八萬圓</p> <p>配當率 年一割二分</p>	<p>電氣供給區域 八郡百十ヶ町村</p> <p>電燈個數 八萬燈</p> <p>電力 九百馬力</p> <p>電線互長 六百哩</p> <p>電柱數 一萬九千本</p>
---	--

<p>重役</p> <p>常務取締役 前川善平</p> <p>取締役 安居喜八</p> <p>監査役 渡邊九一郎</p> <p>相談役 野口 進</p> <p>西田庄助</p>	<p>吉田幸治郎</p> <p>西田久太郎</p> <p>田中彦次郎</p> <p>門野安太郎</p> <p>田中善助</p> <p>西川甚五郎</p>
---	--

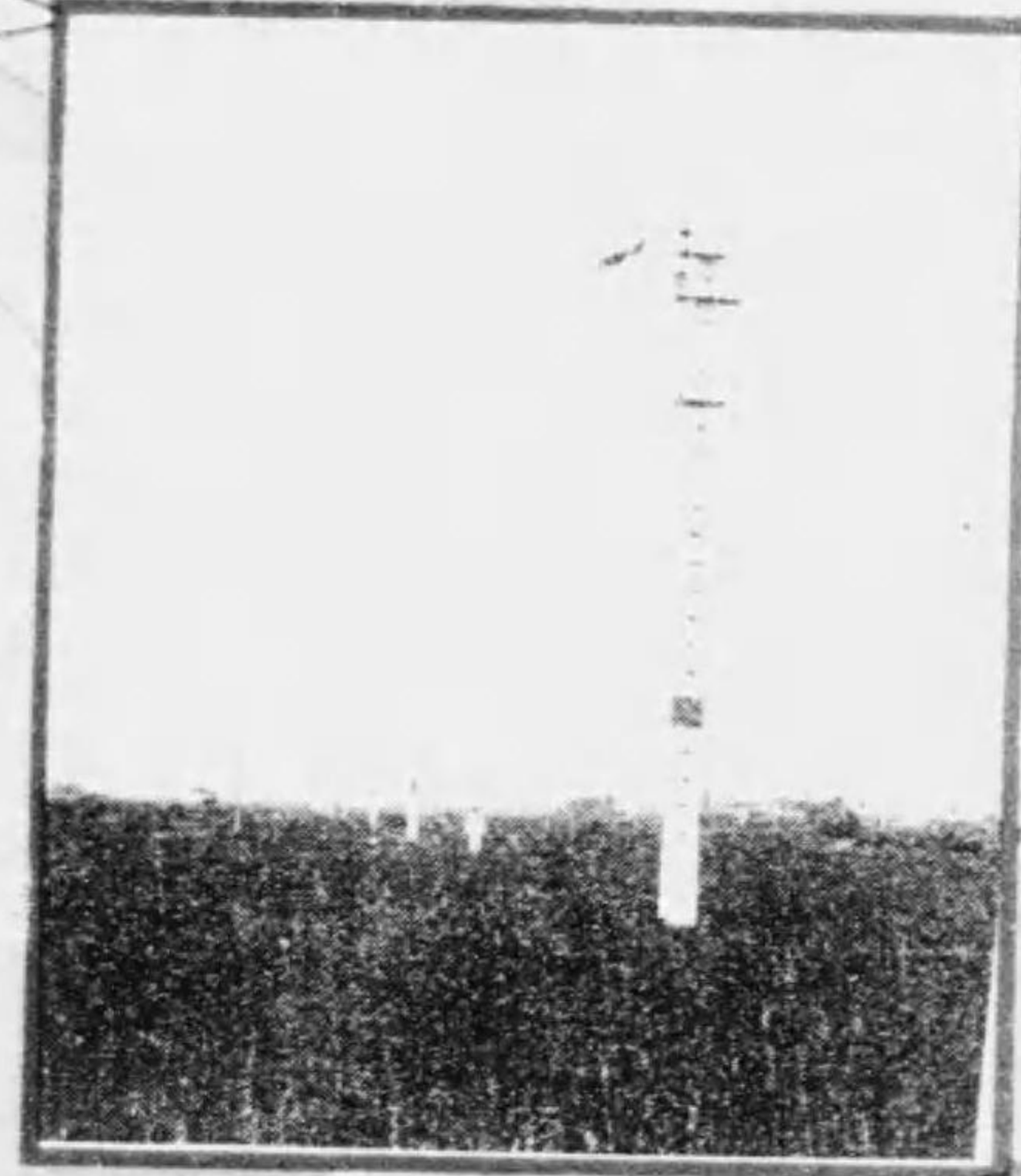


鋼筋コンクリート特別高壓送電電柱

川第一發電所

露光量違いの為重複撮影

鐵筋コンクリート特別高壓送電線電柱



景全所電發一第川姉

創立 明治四十二年十月 電氣供給區域 八郡百十ヶ町村
 資本金 貳百萬圓 電燈個數 八萬燈
 積立金 拾壹萬五百圓 電力 九百馬力
 固定資本償却高 八萬圓 電線互長 六百哩
 配當率 年一割二分 電柱數 一萬九千本

近江水力電氣株式會社

電話 二二三番

重 役

常務取締役	前川善平
取締役	安居喜八
監査役	渡邊九一郎
相談役	野口 遵
	西田庄助
	吉田羊治郎
	西田久太郎
	田中彦次郎
	門野安太郎
	田中善助
	西川甚五郎

醬油
醸造

平西村字左衛門

電話三九番

H. NISHIMURA
HIKONE

吳非本物洋友物

菱
三吉屋支店
電話百十五番
大森重太郎

鶏肉
壽司

三吉屋本店
電話百十五番
大森新吉

呉服類卸小賣

富田半七商店

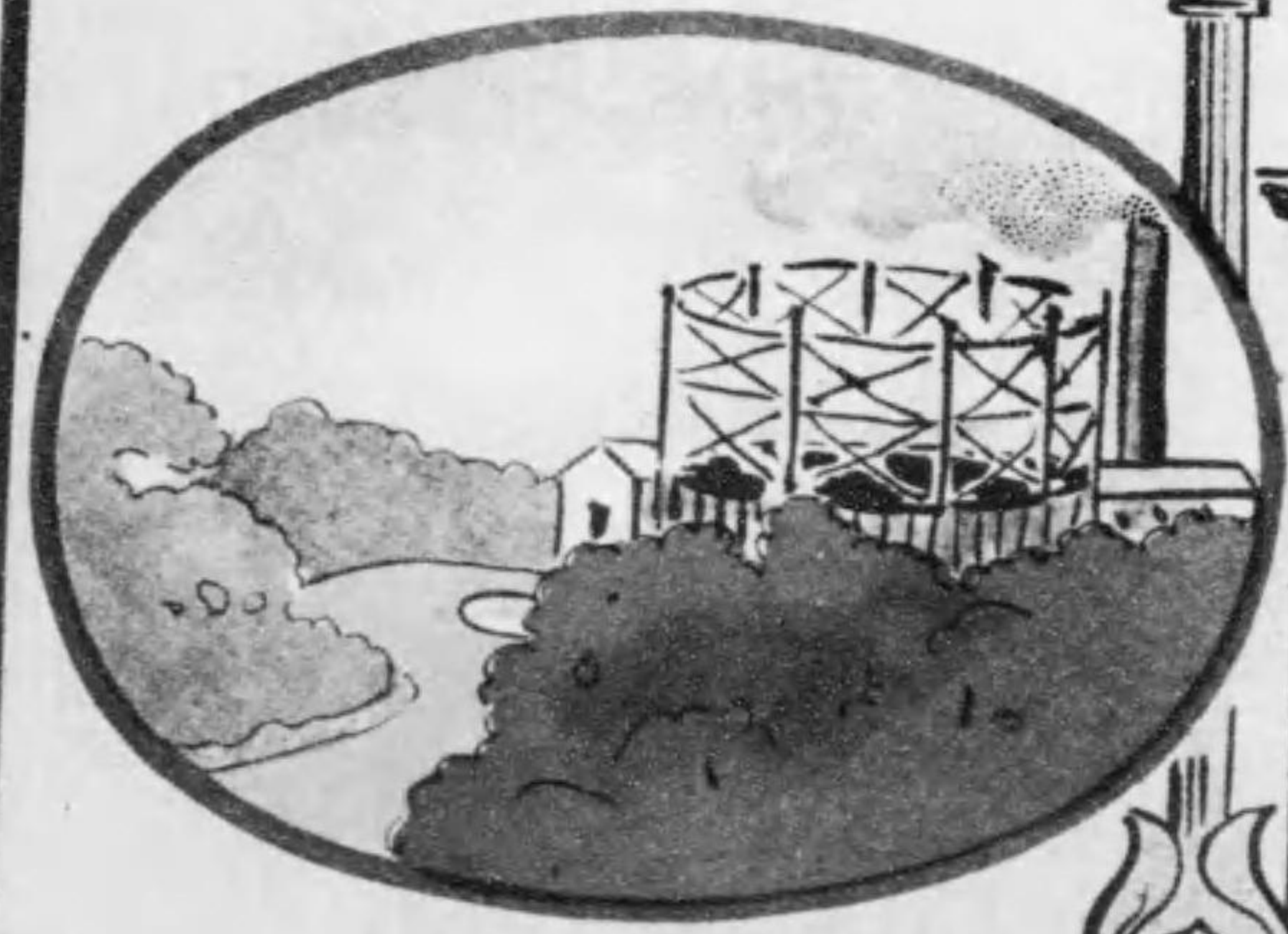
電話六八番

彦根橋本町
川口屋事




彦根瓦斯株式會社

電話貳四六番





福助足袋
 特約店
 学業品目
 諸シヤツ
 マリヤス等以賣
 厚司裁裁
 各種足袋
 男女学生袴
 綿糸
 編類
 老根川原町
 田村シヤツ店
 電話二六一番



今上陛下御買上
 宮内省御用命
 益壽糖
 羊羹
 手紙
 御菓子司
 老根川原町
 藤田湖陽堂
 長電話二六四

各國銘酒
發賣元



滋賀縣彦根町
高橋林太
藤田太吉
電話長五番



人物傳

井伊直政

井伊直政は彦根藩祖にして佐和山城主なり、直親の子にして天正三年二月始めて徳川家康に仕へ二千石を領す、後戦功により累進して四萬石を領し小牧の戦に其功尤も著しく家康感状を與へて軍の寶と賞し二萬石を加賜す、豊臣秀吉又其武勇を感稱し天正十四年秀吉の執奏に依て従五位下に叙せらる翌年侍從に任せられ従四位下に進む、十八年小田原の戦功にて六萬石を加賜せられて十二萬石を領し上野高崎城に居る、慶長五年九月上杉景勝、石田三成異圖あり直政軍議を進め其議に決し先鋒となりて關ヶ原の大戦に大に敵軍を破り進みて佐和山城を陥る、十月家康其功を賞し敵の居城佐和山城を與へ十八萬石を領せしむ、且京都守護を内訓す直政佐和山城に移り勉めて舊法を改めず民をして安堵せしむ、七年二月朔日卒す、年四十二墓は青波村清涼寺にあり。

井伊直孝

井伊直孝は直政の子にして慶長十四年始めて徳川秀忠に仕へ十五年上野白井にて一萬石を領し掃部頭と稱す十九年大阪冬役兄直勝に代り軍勢を率ひて奮戦功を奏す、翌元和元年家康の命にて彦根城主となり十五萬石を領す、五月夏役起る直孝先鋒となり大阪に向ひ玉串川の附近にて木村重成と激戦し重成を始め敵將以下の首級を獲ること多し、直孝進撃して城を陥る、家康秀忠其戦功を感稱して五萬石を加賜し従四位下に叙し侍從に任す、五年五萬石を加賜せらる、九年後水尾帝二條城に行幸あり直孝陪從す、十年五萬石を増して三十萬石を領す、正保二年正四位上に進み左近衛權中將に任せらる、家康より家綱まで四代に仕へ大老となりて國政を料理して畫策する所多し、又藩政に於ても大に心を用ひ民をして安堵せしめ土地を拓き新村を開始せし所少からず、萬治二年六月江戸に卒す、墓は東京市外豪徳寺に在り。

伊井直中

井伊直中は彦根藩主直幸の子にして寛政六年父の遺領を嗣ぎ掃部頭と稱す、官位は累進して正四位上左近衛權中將に至る、文化六年立坊祝賀の爲めに將軍家齊の命を奉じ參内して使旨を奏聞し光格天皇に拜謁す、直中文武を好み十一年藩校稽古館を創立して藩士の文武を教練し賢才を養成して富國安民の法を謀れり、又護國殿を創建して藩祖直政、直孝を祀り、領地を巡視しては水害を除き溝渫を通じ井を穿ちて水利の良法を設け舟運の便を謀り道路を修め橋を架け物産を興し山野に種藝し、荒撫地を開きて新村を設け育子金を給與し貧者の産兒を害することなからしむ、其治績枚舉に遑あらず稱して中興の賢君といへり、墓は清涼寺に在り。

井伊直弼

井伊直弼は直中の子にして直亮の養子と爲る嘉永三年十一月藩主となり官位は累進して

正四位上左中將兼侍從に至る、久しく埋木舎にあり武士の要道を鍛錬し居合の一派を開き國典を研鑽して其造詣深く禪學を修めて其奥に入り算術を學び謠曲に長じ尙茶道花道の如き亦一派を創始せり、皇室尊崇の念渥く守護の爲めに心を碎けり、且屢物を獻じて叡慮を慰め奉れり、米國使節ペリー來りハルリス來る徒に祖法を守るべき時期にあらずとて貿易を主張し貿易の勅許を経ざるも深く國家の先途を憂へ萬全安泰の策を取り條約に調印し國家に事なきを得たり、安政六年十二月に至り外交上の眞意を奏して辯疏に勤めしかは主上は終に調印止むを得ざるを御了解あらせられ假條約の事情を認めて鎖國猶豫の勅允は下りて直弼の反對者より攘斥せられし專斷の毀りを免れたり、藩政に於ても大に心を用ひ藩主たること十年に滿たず在藩其半にも及ばざるに封内を巡回すること九回に及び常に民利を謀りし治績少からず、又開港を唱ふるも一朝攘夷の場合に及べば例により先鋒たらざるべからず、因て武備の擴張を謀り武術の鍛錬に勉めぬ、萬延元年三

月三日直弼櫻田門外に於て水戸浪士に要撃せられて之に死す、年四十六、墓は豪徳寺にあり。

井伊直憲

井伊直憲は直弼の子にして萬延元年四月彦根藩主と爲る官位は從四位上左中將兼侍從に登り後從四位彦根藩知事と爲る廢藩後伯爵に叙せられ正二位勳一等に叙せらる、元治甲子役には勅を奉じて宮門を守護し兵を出して長兵を伐て退く、後大和騷動長州征伐戊辰役に從軍し屢朝廷幕府の重賞を拜す、慶應三年末慶喜將軍を辭し大阪に下るや藩は勤王に屬して祖宗以來の忠勤を全うしたり、遠祖道政は後醍醐帝の皇子宗良親王を居城井伊谷城に奉じて始終守護して南朝に忠勤し薨後世々其靈を祭りて直憲に至る、直憲請ひて自費にて宗良親王の社殿を造營し四年成る、五年勅して井伊谷宮と稱せられ六年官幣中社に列せらる、八年直憲井伊谷宮造營の功を賞せられて金千圓を賜ふ、二年戊辰戦功によ

り賞典祿二萬石を下賜せらる、四年廢藩東京に移る、廿年海防費壹萬五千圓を獻して金製黃綬章を賜ひ廿七八年戦功には二萬石を獻して勳二等に叙せらる、卅七年一月薨す、年五十七、墓は豪徳寺に在り。

岡本宣就

岡本宣就は通稱半介致仕して喜庵と改む無名老翁、安分子の號あり、天正十九年井伊直政に仕へ處々の戦役に功を著して五百石を領す、關ヶ原の役には専ら機密に關り功を以て千五百石に至る直孝に仕へ大阪陣に軍監となり戦功を以て三千石を領す、承應元年致仕し明暦三年三月死す年八十三、宣就上泉流の軍學に精通して軍學師範家と爲る和歌茶道を嗜み又畫を能くし嵯峨流の書を能くす、墓は彦根長純寺に在り。

八田金十郎

八田金十郎名は知當、彦戸藩士八田彌次兵衛の子なり井伊直孝に仕へ大阪陣に従軍す、

玉串川の戦に金十郎槍を執て奮進し死屍を越え一番槍と呼びて突戦す大阪の弓頭飯島太郎左衛門を討取り、尋て大阪の部將山口左馬助弘定を撃たんとす、弘定刀を以て金十郎の槍を攘ひ冑を斬ること三刀、二は軽く一は強し金十郎槍を手繰り弘定の喉を突き終に之を誅す、此日尙一級を得翌日二級を獲、徳川家康秀忠金十郎を召し其戦功を賞し黄金三枚馬一頭を賜ふ、金十郎謁見して禮を述べ家康立て金十郎が頭に手を添へ最も用に立つべき者明日も城へ一番に乗込むべしと尙本多三彌より家康の感悦斜ならざる意を達せり、凱旋後直孝其功を賞して新知三百石を給す、尋て二百石加増す物頭御旗奉行に歴仕して明暦六年十二月死す、年七十、墓は彦根江國寺に在り。

渥美平八郎

渥美平八郎は彦根藩士渥美仁右衛門の子にして井伊直興に仕へ正法念流未來記兵法劍法師範荒川孫三郎の門弟なり、同流は鐵假面を被り剛順を以て擊劍せるを平八郎細拆順を

皮囊に包み假面を用ひず素面擊劔の一派を發明し之を師孫三郎に謀る孫三郎大に感稱し別派獨立して教授すべきことを許す。是に於て平八郎直興より正法念流別派の師範たることを命ぜらる、子孫其法を遵守して世々師範役と爲る平八郎三百石を領し母衣役、物頭に至る、墓は長純寺に在り。

森川許六

森川許六名は百仲字は羽官通稱五助五老井、菊阿佛、風狂堂の號あり、彦根藩士森川與次右衛門の子にして井伊直澄直興に仕へ三百石を領す、家は世々法藏院流鎌槍の師範家にして許六其師範たり、吉田流の馬術に達し文學を好み其造詣深く兼て觀世流の能樂に長ず、畫は狩野安信に學びて一派を爲し彫刻亦巧みにして柿材にて芭蕉の坐像を刻せり元祿五年芭蕉の門に入り俳諧の法を學ぶ芭蕉許六に畫を學ぶ芭蕉許六を評して余が魂に入るもの許子一人なりと正徳五年八月病て家に死す、年六十、墓は長純寺に在り、風俗

文撰歷代滑稽傳、字陀法師俳諧問答、簞突、韻塞及句集等あり。

澤村琴所

澤村琴所名は維顯通稱宮内彦根藩士澤村左平太の子なり、井伊直通に仕へ小姓となり江戸に至り元祿十五年疾に罹りて退く時に年十七、後京に行て性理の學を研究して家に歸り客を謝し讀書研鑽の功を積むこと七八年に及ぶ、後伊藤東涯の門に入り又荻生徂徠の書を読みて益古義を確信す、琴所彦根の南松寺村に松雨亭を卜築し帷を下して經を講す從游日々に多く遠近其名を仰慕して其門に集る從游の盛なること江東に於て未だ曾てあらざる所なり其門下より彦根藩の儒者學士多々輩出せり、井家新書、八陣本義、軍國要覽、彦陽和歌集、琴所稿刪、閑窓集等の著あり、墓は高宮町徳勝寺に在り。

賀川玄悦

賀川玄悦字は子玄彦根藩士三浦軍介長富の子なり、玄悦出で、賀川氏を嗣ぐ京に出で、

屑物買を爲し兼て按摩を業とす居ること數年、隣家の一婦産に臨み胎兒手膊を出して生れず産婦苦悶將に死せんとす衆醫傍觀手を下す能はず、夫來て玄悦に謀る玄悦一見之を治するの術を構思す明且提灯の柄の鐵鈎を以て胎兒を娩出す、是に於て玄悦難産には湯藥其功なく助産にあらざれば救治する能はざるを悟れり、これより其名忽ち喧傳して治を請ふもの續出するに至り、玄悦其術を默考推究して救護の術を發明し明和三年産論二卷を著し賀川流産科を創始せり、支那日本の醫學に於ける三千年來未だ難産を救治する法を説かず玄悦師承する所なく皆親歴して難産救治の法を獨得し、胎兒は頭を上にして脚を下にし臨月に及んで轉身すとの支那説を打破して頭を下にして脚を上にするは順生なるを發明せしより傲然古今を睥睨し當時曠古一人なりとまで稱せらるゝに至れり、玄悦後阿波侯に仕へて徳島に移る門弟數百人各地に行て其術を施せり。

平石久平次

平石久平次は彦根藩士平石彌右衛門の子にして、田祿二百石を領す、名は時光深焉子と號す、久平次幼にして算數を好み京に行て中根玄珪の門に入り天文曆道算數を研鑽講究すること數年何れも精通して一家を爲す、享保八年皇極運曆一卷を著し朝廷の御府に入る九年彦根より天體を觀測したる天文分野圖を作る、又屢具注曆を作成して曆博士幸徳井家に送り博士の檢閲を経て世に行はる、其他曆道に關する著書多く算數にては算法天元式百問を校閲し互用變換（此内に叢駢算數を附記せり）を編纂せり、藩士中久平次に就き天文算數を學べるものあり、井伊直中の時より稽古館中に天文方算學方ありて天文算數を教授するを得たるは久平次其礎を置きしに由る、明和八年八月死す、七十六、墓は彦根長松院に在り。

大菅中養父

大菅中養父名は圭、通稱權兵衛彦根藩士印具氏の室老なり幼より讀書を好み和漢の學に

通ず最も詠歌を能くす晩年復古の學に遊びて古文を修めしも皇典は毫も廢することなく古言に精通す遠近其名を慕ひ教を請ふもの日に月に多く後進の誘導に勉めぬ、近世彦根に於ける皇典詠歌講究の源は主として中養父より發せり故に其門下より小原君雄村田泰足の如き皇典家を出し又美濃の人にして萬葉の古風を首唱せし有名なる田中道麿を出せり、著書には小倉百首批釋あり安永七年四月死す、年六十九、墓は青波村江東庵にあり。

野村公臺

野村公臺は東阜と號し通稱新左衛門彦根藩士庵原氏の從士なり、始め京に行き若林強齋に學び後歸りて澤村琴所に學ぶ太宰春臺服部南郭中根東里にも師事す、父は常に虛文を去り實用を遺るなかんことを誡めぬ、公臺父の訓を守り日夜勉學終に一家を爲す彦根古文辭の學は其源を琴所に發し公臺に至りて大成す、其名聲内外に籍甚し四方刺を投して業を請ふもの門に滿つ、井伊直幸公臺の文學優秀にして拔群なるを賞し藩士に採用し俸

を給し儒員と爲す、又侍讀となし優待殊に渥し其門下に秀才多く稽古館の教授方となりしもの多し著書には藁園集前後篇、復讐論、野叟叢談、野叟隨筆等頗る多し天明四年三月死す、年六十八、墓は千本村慈源寺に在り。

檜物屋太右衛門

檜物屋太右衛門は彦根佐和町の人にして父早く死し老母に仕へ孝道を盡す、母性頑固にして耳目も不自由なれば非理をいふことあるも萬事母の心に從ひ朝夕の食事にも能く心を用ひ母寢に就けば足腰を撫で母寢入れば深更まで家業を奮勵し妻を娶らんことを勸むる人あるも一通りならぬ母の氣質なれば妻を娶るも其心に叶はざれば却て不孝を増すことなればとて終身娶らず、母京都六條參を望みければ太右衛門自ら背負ひ本願寺を始め名所社寺につれ行き母の心を樂ましめて下向せり、彦根にても寺參り物見近所遊び風呂なども背負ひ往返せし其孝狀は上に達し寛政三年褒美として米若干を賜ふ其後太右衛門

養子せしが養子も祖母に孝順なれば同十二年又々太右衛門及び養子卯兵衛に米若干を賜ひたり。

五六

木具屋佐介

佐介は彦根上魚屋町の人にして母に仕へて至孝、主に仕へて忠僕、母の命は背くことな
く能く守り家職を専として寸暇も怠らず母の望む所は必ず奉じ、母の寺詣では必ず送
迎をなせり、木具の師死し子幼にして家業をなす能はざるにより母と共に師家に移り十
一ヶ年養育し木具の細工を教へて自立せしめぬ、又佐介に妹あり弱體にして病床にあり
しにより介抱療養至らざる所よかりしかば其至情は公廳に達し寛政十一年十二月褒美と
して米若干を賜ひたり。

米屋文

米屋文藏は 根四十九町の人にして稟性慈善の心深し天保度の饑饉に米價騰貴し難民多

し、因て五年親の年回法會を執行したりとて本町年寄へ施米として九十九俵を匿名にて
送りぬ、借家多く有せしが此時借家料の受取書を送りて借家料を取らざりき、其後又金
二百兩を施さんとして米一俵四十七八匁なるに二十五匁つゝにて五百餘俵を賣れり、又貧
困者の金子借用證書は屢焼棄して助けしこと亦少からず、其他陰徳の行爲少からざりし
かば井伊直亮其行爲を深く感賞せられ文政六年七月褒美として江州綿三把を下賜せられ
たり。

西村助之丞

西村 之丞名は吉充彦根藩士小澤作左衛門の子にして、西村左近太の養子となり其家を
嗣ぐ享和三年代官と爲り近江國神崎郡栗見郷に荒蕪地あり助之丞が開拓を建議せしが井
伊直中之を聽可し新田開發御用掛を命せらる時に文化三年四月十七日なり、近村より四
十二戸を選抜して移住せしめ一戸に宅地の外田三段畑二段づゝ給與し氏神社と寺とを建

五七

立して人心の一和を謀り村内に河川を通じて水利交通に便せり、其經營成り粟見出在家村と名け同年七月新村の控書を出して之を守らしむ五年其功を賞せられて五十石を加増す、文政二年五月死す村民其恩義を記念せんために神明神社の旅所に一祠を立て、助之丞の靈を祀れり、墓は彦根大信寺にあり。

小原 君 雄

小原君雄通稱春平彦根藩士にして夙に大菅中養父の門に入り専ら皇典を受け後井伊直中の命にて伊勢に行き本居宣長の門に入りて道を問ひ古書を搜り頗る其推獎を得たり、爾來屢往きて其教を受く又京に行き芝山大納言に謁して詠歌の法式を學ぶ、直中稽古館を創立し君雄及村田泰足を和學寮御用掛と爲す泰足も宣長の門に入りて皇典詠歌を講究せし人なり、これより本居派の國學は彦根藩に入り爾來其學派を繼承せり、君雄は國學の造詣深く詠歌に長せるにより藩主の信任渥く侍讀となりて皇典を講し藩校に入ては後進

の誘導に力を盡し兼て歌道を獎勵せり之に由て文政六年班を進めて騎馬徒士となり四十苞四口俸を給せらる、著書には彦根歌集、彦根夫梨、花園隨筆、辨語、宮陵考、家集等あり、天保六年正月死す、年八十四、墓は彦根大雲寺に在り。

張 月 樵

張月樵名は行貞字は元啓通稱は晋藏後に快助と改む、彦根職人町の人にして幼より畫を好み坂田郡醒井村の市川君圭の門に入て畫を學び後京に行て月溪(吳春)の門に入る依て月樵と號す。寛政年中名古屋に移る刻苦奮勵畫名漸く著る、人物花鳥寫生を主とし筆力當時獨歩と稱せらる藩命にて城内御殿の杉戸襖屏風を描く、遂に御用人支配となり帶刀を許さる天保三年六月死す、年六十一。

西 澤 道 庵

西澤道庵は始め菊彌といひ名は其仁字は子榮丹溪と號す、坂田郡上丹生村に生れ父を加

藤治といふ家は桶職なり、菊彌某寺の僧に勧められて醫師たらんことを志し名を周庵と改め彦根の藥種商香具屋の周旋にて長崎に行き蘭醫川本道悦の門に入り外科を學び十ヶ年間研鑽其道に通じ寛政十一年彦根に歸り町醫として手術を始め、これ彦根に於ける和蘭醫方の嚆矢なり、其治方高妙治を請ふもの日々に増加す、文化二年井伊直中に召出されて藩醫となり十口俸を給せられ後累進して奥醫師となり新知百石を給せらる、屢藩主に扈從して江戸に至る、門外治療をも許され外來者多く其名聲江戸市中に嘖々たり弘化三年六月卒す、年七十四、墓は龍潭寺に在り。

宮村藍園

宮村藍園名は定満字は不溢菱園と號す通稱を紺屋六郎兵衛といふ家は陶器商なり、幼より書を好み長するに及び益上達し隸書尤も能くす、兼て詩歌を巧にし廣く文人墨客と交遊す井伊直亮槻御殿の一室を建て儒員龍世華をして表裏なき文字を以て命名せしむ世華

樂々の二字を撰へり、世華元より書を能くすされど直亮一町人たる藍園をして樂樂の二字を隸書にて書せしめ同室の欄間に其文字を透刻になさしむ蓋し類例なき特遇なり後三口俸を給せらる弘化三年五月死す、年八十。

伊藤半兵衛

伊藤半兵衛は彦根外船町の人にして屋號を絹屋といふ家は古着賣買を業となしぬ、文政十二年半兵衛は島屋平介西村字兵衛と共に晒屋にて湖東焼を開始せり、土地の不便と狹隘なる爲めに翌天保元年佐和山下に窯を改築せり、然るに平介字兵衛の兩人は去りしため半兵衛獨力經營し頗る良品を焼成せるに至れり然るに十四ヶ年の後天保十三年井伊直亮のとき御用窯を命せられて藩窯と爲り半兵衛は湖東焼問屋株を與へられぬ、嘉永五年井伊直弼のとき湖東焼開始の功を賞し苗字を免されて伊藤と稱し其後永代苗字御免を願ひしに同年死後之を免されたり湖東焼は直弼の安政年代尤も隆盛を極め優良品多々焼成

せられたり。

六二

中川 祿郎

中川祿郎字は子鄂漁村と號す彦根藩士小原君雄の子なり、祿郎出でて中川氏を嗣ぐ藩の儒員西郷路卿伴東山及び川添白水に學び後京に出て頼山陽の門に入る、博覽強記普く群籍を涉獵す經史詩文自ら一家を爲し又音律數學にも通ず其名遠近に見れ從學の徒頗る多し、天保十三年十二月井伊直亮に召れて儒員と爲る、井伊直弼世子たるのとき祿郎に修身治國の要を問ふ、即ち芻蕘之言を書して呈す、此書立言凱切能く時弊に適中す直弼常に座右に置きぬ、嘉永六年六月米使ベリ來り通交を求む急使來り報ず、時に直弼彦根にあり竟見を藩臣に徵す、祿郎蘭學者に交り且つ西洋事情を記述せるものをも涉獵して其事情に精通せるにより籌邊或問を書して貿易説を進む、直弼の意又こゝに在りて直弼貿易意見書を幕府に呈す、祿郎常に云へり武士は刀の體面上攘夷を唱ふるも最早其時に

あらず遠からず彦根に外國人來るべしと又祿郎が貿易は琉球にて出貿易を行ひ其結果によりて内地の開港をなすべしと云ふにありされど祿郎の自信よりいへば直に内地開港の説なりしなり、後病氣にかゝり彦根に歸り安政元年十二月死す、年五十九、其門下に秀才多くして教育及び藩政に盡せし者少からず、著書に三諫録、漁村隨筆、漁村文稿、詩稿等あり、墓は青波村廣慈庵に在り。

宇津木 駒吉

宇津木駒吉名は泰吉彦根藩士宇津木三四郎の二男なり、駒吉攝津高槻藩日置流道雪派弓術師範若林雲八郎の學僕となりて弓術を修業すること熱心、弓懸屢破損す晝間は修業せるにより常に夜中六里の道を往復して京都にて繕はしむ其の店主駒吉の高志に感じ來れば夜中必ず起き無代にて繕へり、三ヶ年を経て皆傳の免許を得、其弓術の拔群なること内外共に賞讃し弓術の師範家さへ其門に入りて病弊の矯正を請へり、膂力絶倫にして一

六三

寸弓を引けり三十三間堂の通矢無數、他の通矢をなす弓術家と其趣を異にせり、文政十二年直亮採用して新知五十石を給せられしが後故ありて取上げらる、嘉永四年直弼駒吉の弓術拔群なるを賞し別に一家を起さしめ弓術の師範と爲し新知七十石を給せり文久二年四月死す、墓は龍潭寺にあり。

河上吉太郎

河上吉太郎名は房因字は養中孤松と號す彦根藩足輕河上文藏の子なり、幼にして文學を好み易理數學に長す砲術研究の必要を感じ大に鍛鍊して上達す、相州警衛に際し命によりて西洋式巨砲の製造に従事し成りて相州臺場に備ふ功により異例なる重賞あり彦根藩は泉州警衛を命せらるゝに當り吉太郎桔梗形の臺場を築造すこれ臺場築造上の一進歩なり、有志數名相謀り至誠組を作り藩内外の爲めに大に盡瘁し且他藩の疑惑を解し其功顯著なりしかば士分に採用せられて新知百石を給せらる、特に銃砲の製作には熱中し火繩

打の抱銃をドンドル打に改造し地雷火水雷火をも製作せり、彦根の士卒競ひて其門に入りて砲銃を研究するもの數千人に及び同門にあらざるを恥づるに至れり、故に門下より優秀なる門弟多く出で、各地の戦役に功を奏せり、藩は多年の警衛と戦役の爲めに財政の窮狀を呈するにより吉太郎舉げられて勘定奉行と爲り財政を整理せり、慶應三年冬切迫の際方向決定上大に盡力せしにより賞典祿五十五俵を給與せらる明治五年四月死す、年六十、墓は青波村天寧寺に在り。

新野古拙

新野古拙は彦根藩主井伊直中の十男にして直弼の兄なり、始め木俣土佐に養はれて大隅と稱せしが井伊直亮の命にて新野家を再興し新野左馬助と稱し後古拙と改め隠居して氏名を江雪查と改む、千石を領して家老と爲り士大將と爲る後千石を加増す、元治甲子役井伊直憲に従ひて上京し御所を守護す、慶應三年末慶喜將軍を辭す古拙外交御用掛を命

せられ内は直憲を輔佐して藩の方向を決定し外に對しては藩情聲明の衝に當り遠祖井伊道政以來の忠勤を全うすることを得たり、明治元年四月直憲より外交御用の勤勞を賞せられて刀一口を賜ひ七月六日小御所に召され國事盡瘁を賞せらるゝ御沙汰を拜し且物を賜ふ、二年大參事に任せらる、直憲は古拙の朝旨遵奉上に盡瘁し藩をして方向を誤らざらしめし功を賞して田祿千石の加増を命せり後此千石は御賞典中より給せらる、八年六月死す、年六十八、古拙詩を能くし書畫に長し廣く文人墨客に交る墓は龍潭寺に在り。

遠城謙道

遠城謙道通稱平右衛門彦根藩足輕遠城兵之助の子なり、横田俊輔に従ひて儒學を受け畫を吉田雪齋に學び禪を清涼寺の仙英に就て修す、銃術尤も長し射的濟輩を壓す、萬延元年三月井伊直弼の横死あるや計畫する所ありしも事志に齟齬し一も達する能はず終に僧となつて先主の掃墓に委し舊恩に報せんと欲し清涼寺に至り僧たらんとし却つて藩規に觸

れて譴責せらる、後隱居を命せられて一家の斷絶妻子の窮苦をも顧みるに暇あらず終に清涼寺に於て僧となり東海道を行脚して豪徳寺に至り愈掃墓の本願を達せり此時句あり

妻子まで捨て、落葉の掃除坊

爾來三十七年間初心を貫徹し最後まで先主を禮拜し終に明治三十四年五月寂す、年七十九、直弼の墓側に葬らる。

岸竹道

岸竹堂名は昌祿字は子和彦根藩足輕寺居彌右衛門の子にして、幼名を八郎といふ始め畫を彦根の吉田雪齋尋て狩野永岳に學び後岸連山の門に入りて其才を愛せられ女に配して養子となる、維新後畫界衰頽を極め窮乏最も甚しく友禪染刺繡の下繪を描きつゝ後年の振興を期待せり、時世の推運に従ひ邦畫の改良を企て洋畫を修めて遠近法陰陽法を取り之を邦畫に加味して一體を成せり、明治十一年同志を糾合し京都府に畫學校創設を建議

し十三年府立畫學校は開始せられ竹堂入りて教授と爲る、竹堂の畫に對する銳意熱心終に寢食を忘れ殆んど狂に近きものあり、二十九年帝室技藝員に選ばる三十年死す、年七十二。

谷 鐵 臣

谷鐵臣始め澁谷驪太郎といひ中頃谷退一といふ字は百練膽岳太湖如意等の號あり、町醫澁谷周平の子なり、中川祿郎の門に入りて經史を學び儒員西郷路卿に師事す後長崎に行て蘭醫某に就き内科を學ぶ嘉永二年十二月父の病氣によりて歸る、父死して醫業を始むこれ彦根に於て蘭法内科の始めなり、又此時痘苗を長崎に得て種痘を始むこれ近江に於ける種痘の嚆矢にして爾來其痘苗は近江の各地に廣布せり其功偉なりといふべし奥醫師に採用せられ後士分となる明治元年徵士として二度召喚の朝命ありしも幼主を輔けて藩制新定すべきを以て辭す後班を中老次席に進みて藩政に參與す尋て總務局二等執事に任

せられ丁卯の冬切迫の際方向決定の功により百石の加増を命せらる、三年大參事に任せられ四年七月廢藩に至る、此年左院中議官より大議官に進み正五位に叙せらる後一等議官に任せられ六年官を辭す、これより京都に移り宮内省御用掛となり十九年從四位に叙せらる三十八年十二月勳四等に叙せられ旭日中綬章を賜ふ此月死す、年八十四、著書に論語類編心解如意遺稿等あり。

大 東 義 徹

大東義徹は始め小西信左衛門と云へり彦根藩足輕にして河上吉太郎の門に入りて砲術に長す、才識異常なるを以て歩行格に登用せられ後士分に進む元治慶應の際藩命を帯びて京都に出て四方の志士と交り機務を劃策し王政維新の時に當り彦根勤王の方向を決定せる者義徹與て力あり、戊辰の役彦根藩は東山道の先鋒となる義徹軍事方となりて帷幕に參す其功により田祿百石を給せらる藩の少參事に任せられ後辭して歐米を漫遊して歸り

大坂及び山梨の裁判所長と爲る、征韓論起るや西郷隆盛と共に職を辭し野に下る、廿三年衆議院議員となり毎回當撰し三十一年六月司法大臣に任せられ正三位に叙せらる、十一月職を辭す三十四年彦根に歸り三十八年四月薨す、年六十三、墓は天寧寺に在り。

西村捨三

西村捨三は彦根藩士西村又次郎の子にして、幼より學を好み藩校弘道館に入りて勉學し最上の學寮に登る、井伊直憲の命にて江戸に留學す、明治元年戊辰の役に彦根軍の軍事方となりて參畫する所多し二年彦根藩より選ばれて公議人となり集議院に出仕し議事に參與す、又權大參事に任せらる、十年内務省に出仕し累進して大書記官土木局長に至る木曾川筑後川の改修工事に功を奏し、沖繩縣知事大阪府知事となりて治績を著し、二十四年農商務次官に登る二十六年官海を去り北海道炭礦鐵道會社社長となりて社業を整理擴張し、大阪築港事務所長となりて大阪の發展を謀る其他別格官幣社、四條畷神社を創設

し平安神宮の創立に盡力し楠公遺跡の順道を表示せり、明治四十一年一月從三位勳二等に叙せられ十四日薨す、年六十六、墓は彦根蓮華寺にあり、大阪人士捨三の功を追念せんため住吉社内に銅像を建設せり、著書には南島記事外篇御祭草紙双烈遺事、祭の夢等あり。

中居忠藏

中居忠藏は彦根藩士中居彌五八の子にして、父の後を承け三百五十石を領す、滋賀縣屬となりて勸業課に勤務し十一年彦根製絲場の創立せらるゝや同場詰となりて専ら其業務を擔任し後場長と爲れり、縣下に於ける春蠶改良飼育改良を稱へて着々其功を奏し尙蠶業の普及と桑園の改良上にも力を盡して功を奏せり、又坐繰製絲を開始し終に縣下を始め關西地方に普及するに至れり、縣の内外を問はず製絲の普及を勸誘し指導せしにより機械若くは坐繰の製絲場は各地に起り彦根製絲場は模範工場となり且製絲教師工女及現

業者の供給場となり十九年同場は井伊家拂下げ忠藏場長となりて經營し大に擴張を謀り、三十三年場長を辭し四十四年五月死す、年七十一、墓は龍潭寺に在り。

七二

彦根案内 (終)



呉服本物
卸小賣

三西村要次郎商店

本店彦根橋本町
電三一七

支店朝鮮馬出京町
電二二二



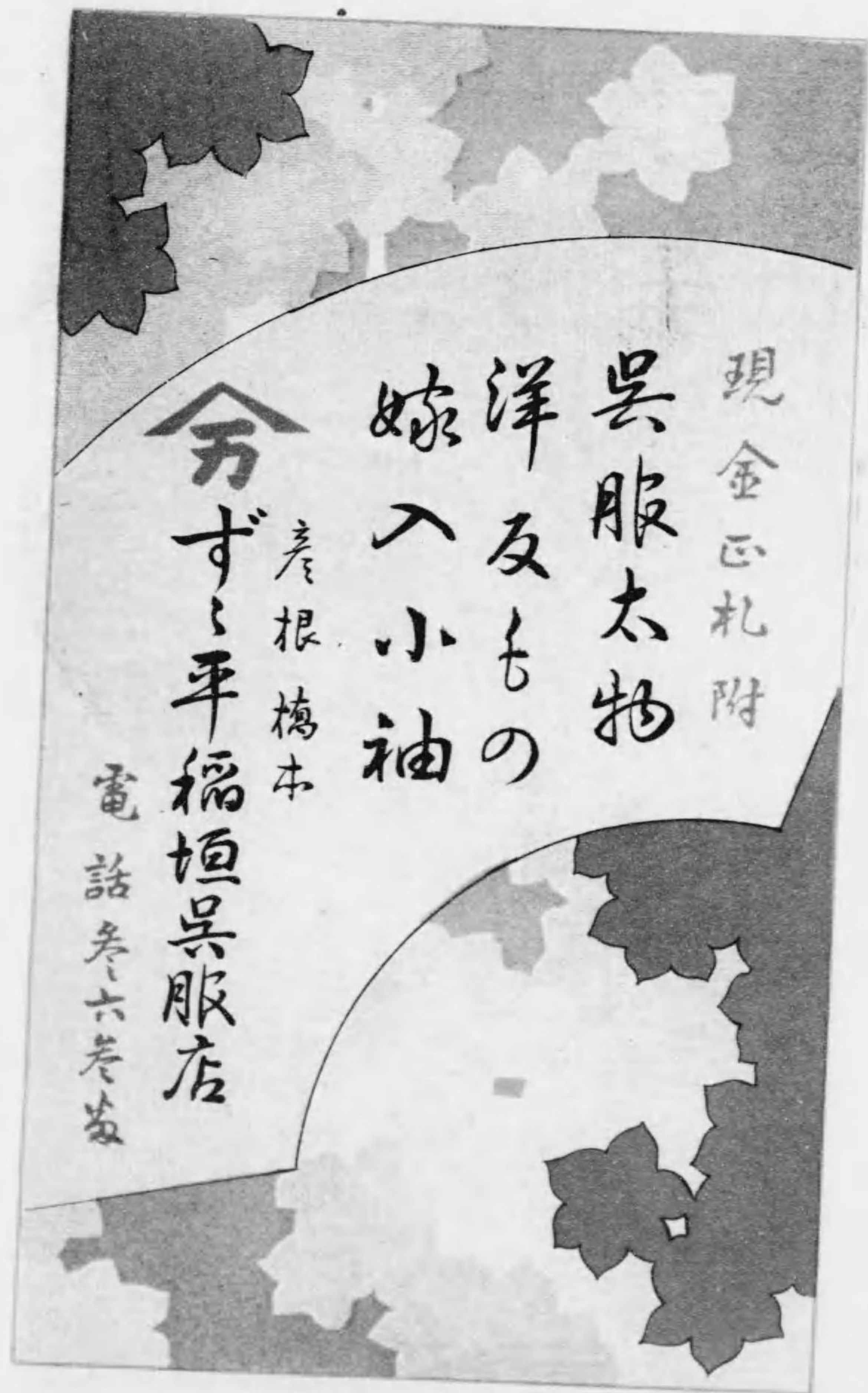
彦根町字四番

(一番町通)

樂友堂

岩崎文次郎

電話長一七番



現金正札附

呉服太物

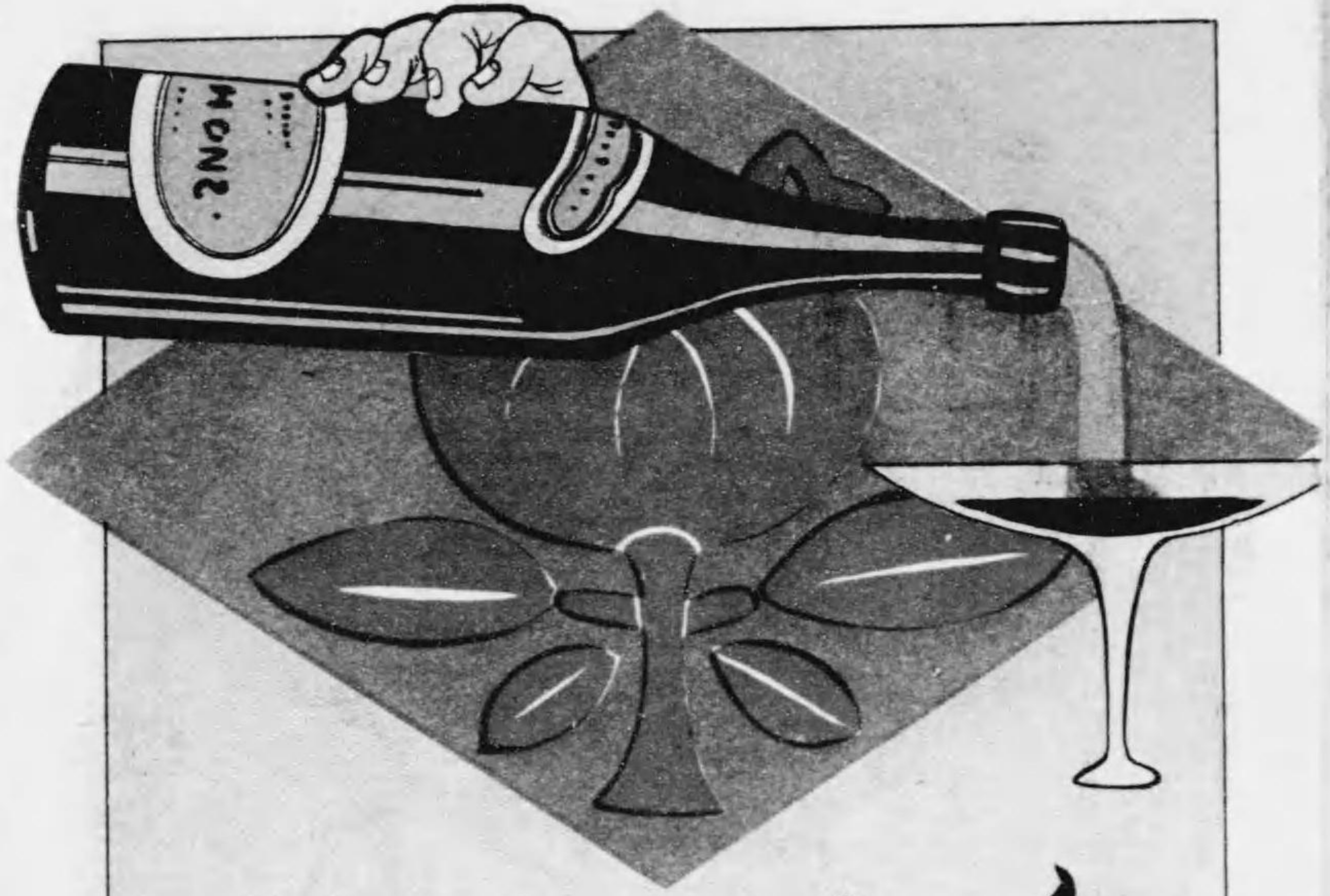
洋及もの

嫁入小袖

今すぐ平福恒呉服店

彦根橋本

電話冬六番



和洋菓子司

餅饅頭

和洋酒類各種

卸小賣

彦根土橋

北

北村甘泉堂

電話二三四番

近江國產米商
米穀委託賣買

江州彦根

刃

前川惣次商店

電話長壹貳番

皇國優等醬油
 天保二年創業

滋賀縣彦根市
 鹽造田吉元
 醸造場
 BREWED BY Z. YOSHIDA
 HIKONE, JAPAN.

滋賀縣彦根市
 吉田醬油造場

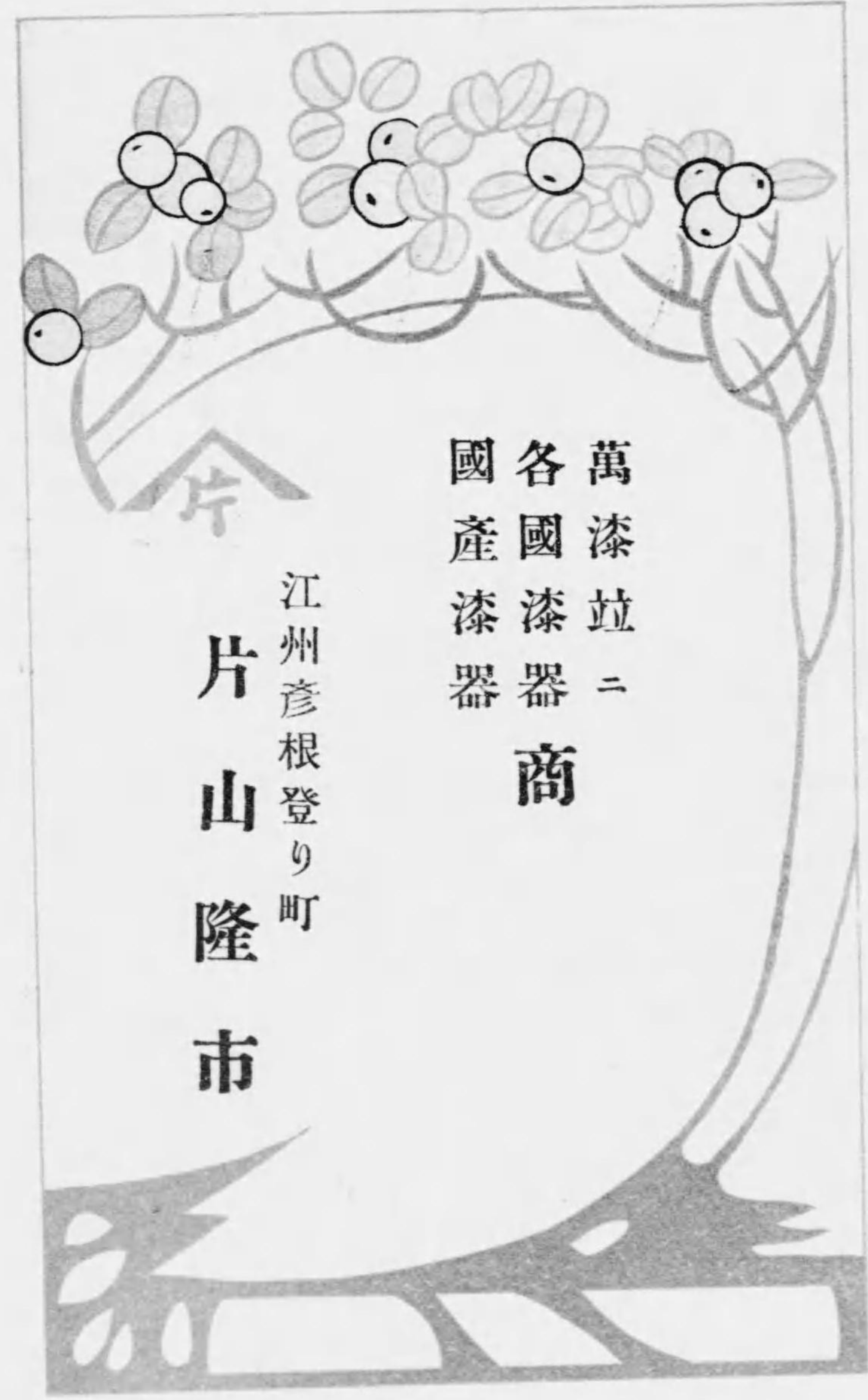
電話參百參番
 振替大坂三三一九番

裁縫用
 コテ 臺
 ヘラ 臺

一人一
 魚上字町根彦縣賀滋

商 美
 須 屋

吉 安 田 堀



萬漆竝ニ
各國漆器
國產漆器
商

江州彦根登り町

片山隆市

吳服太物

卸小賣

不

彦根町字外船

高綿屋

伊藤喜三郎商店

電話八番

確實勉強

紙、荒物、

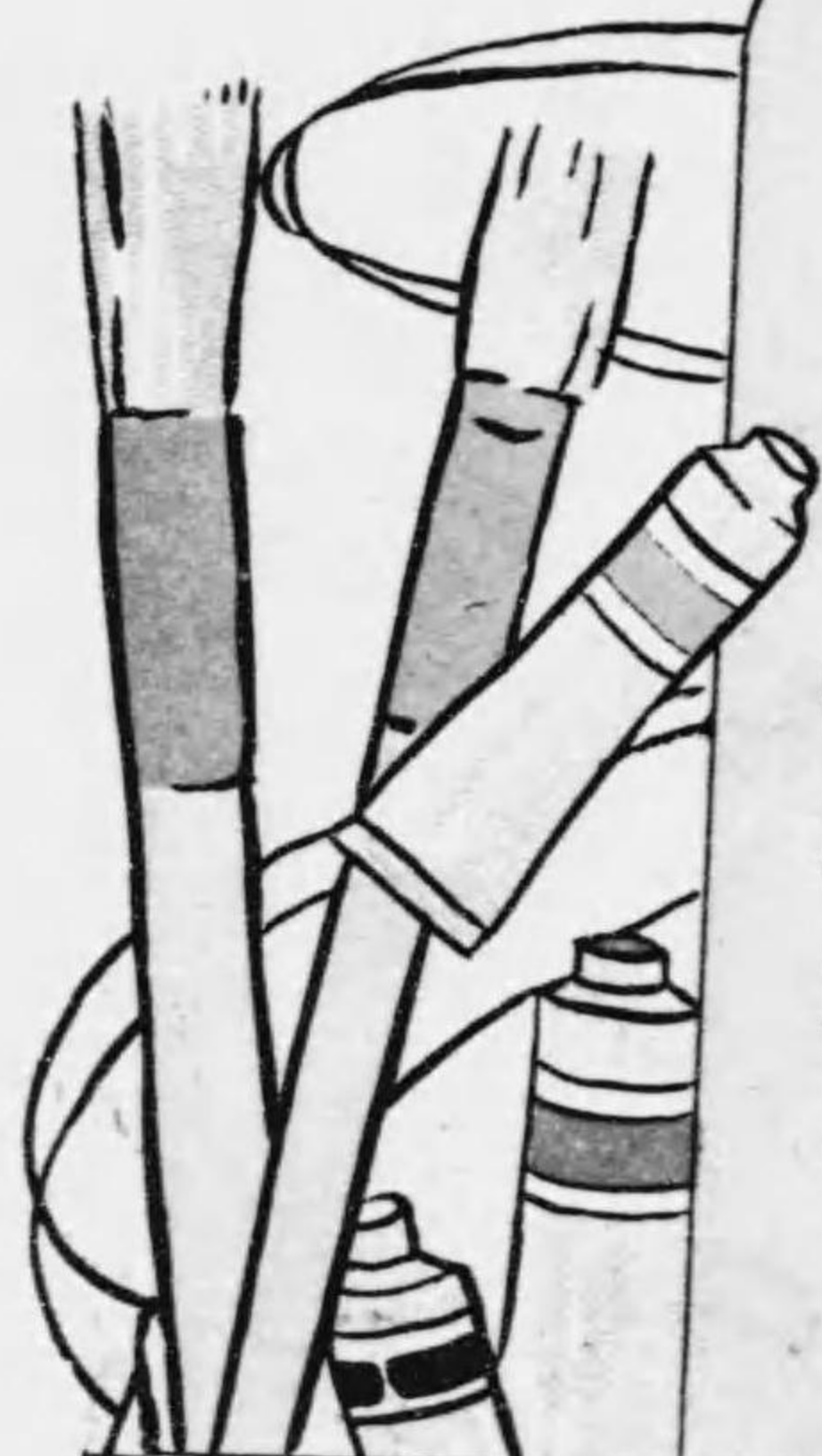
文房具

卸小賣



馬印マツチ

特約販賣



橋す

向商バ

町子や

近藤平兵衛

電話二六四番



貿易刺繡製造
美術品雜貨

輸出業

彦根町

本店

增田太兵衛

支店

神戸市元町貳丁目

海外
第一支店

香港中環皇后大道十七號
商號 日光洋行

海外
第二支店

香港軍器局街第五號
商號 日光洋行

定期米賣買



彦根米穀取引所仲買人

田中捨次郎商店

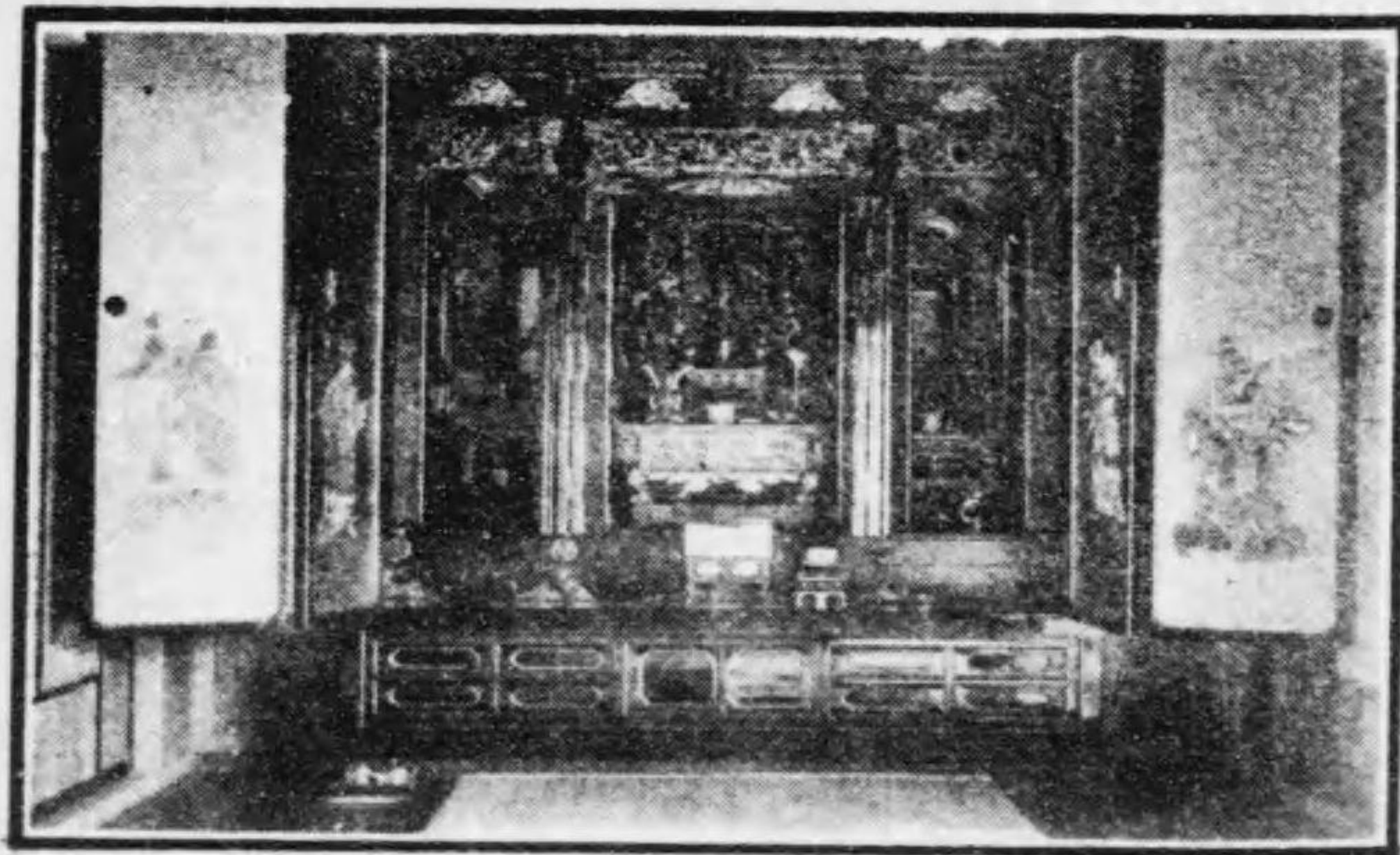
電話 長六七番
一四〇番

創立明治三十六年七月
一年産額千七百本

價額拾貳萬圓

彦根佛檀業組合

員	役	組合長	加納文藏
		副組合長	小堀源三郎
		評議員	藤村佐平
			木野末次郎
			若宮德太郎
			大村佐太郎
			北村利平





常に原料の撰擇に努め
製造に細心の注意を拂ふ

各種製綿

蒲団綿・牛入綿
小袷綿・真綿
蘇子製綿紗

工場 彦根四番町
工場 同 彦根町
分工場 同 表付馬町

電話 四二二三番

KF



株式會社 百卅三銀行

彦根町大字本
電話 四三三三番

積立金 金貳拾八萬參千圓
創立 明治十二年

資本金 金百萬圓
拂込額 金七拾五萬圓
配當率 壹割貳分

大津市坂本町
大津支店
電話 三二三番

彦根町字川原
川原町支店
電話 一〇三番

神崎郡北五個莊村
五個莊出張所

堅田町字本堅田
堅田出張所
電話 四三番

今津町字今津
今津出張所
電話 四三番

膳所町字膳所
膳所出張所
電話 二五番

愛知川町字愛知川
愛知川出張所
電話 三三番

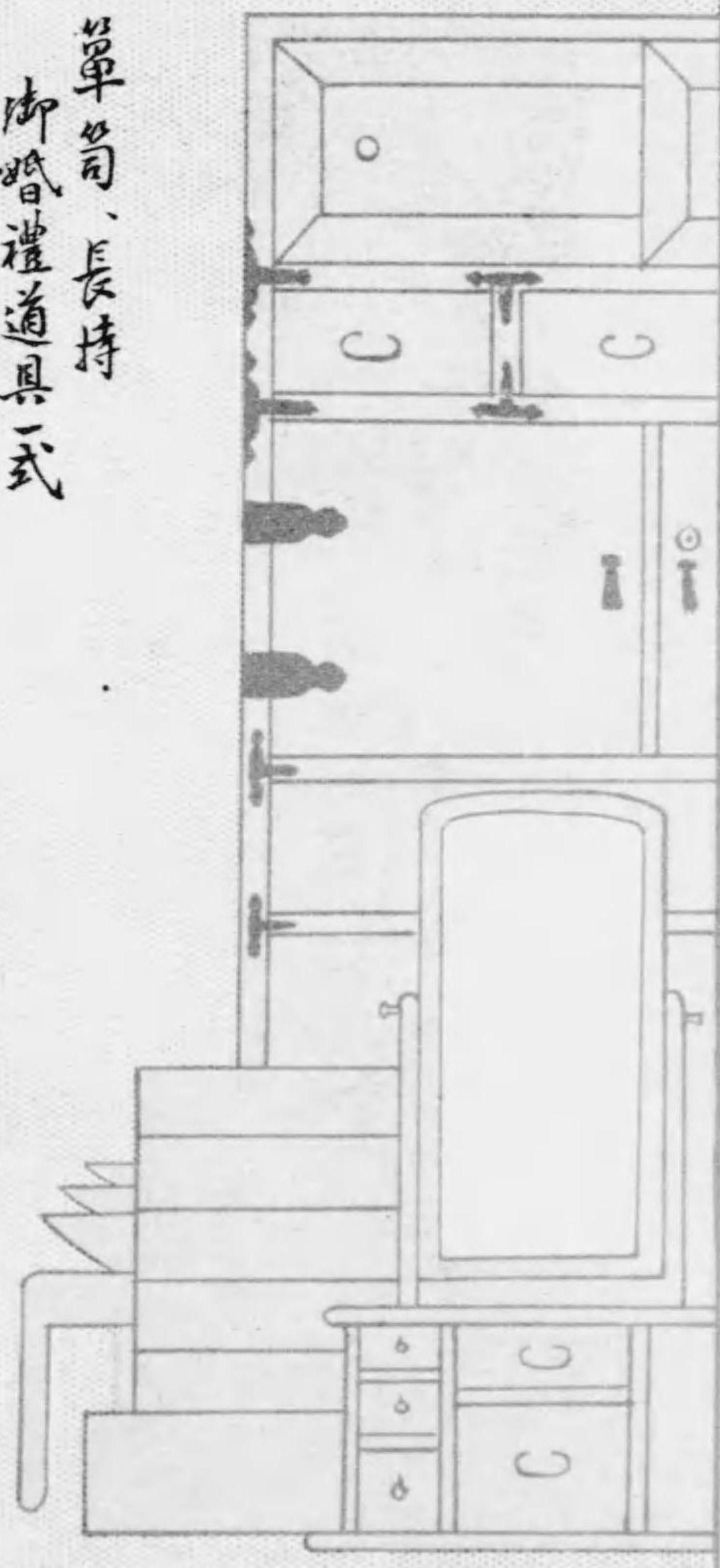
草津町字草津
草津出張所

塩酸
加里
製造



彦根町大字上新屋敷
近江製薬社

一、三八キロワット發電機二基ヲ使用シテ壹ヶ月六十樽ヲ生産ス
一、品質ノ優良ナル事他ノ類ナシ



單筒、長持
御婚禮道具一式
輪島膳梳粧室箱
各桂漆器銅器商

彦根橋本町
檀治事 中村治子商店

電話七十五番

桐油

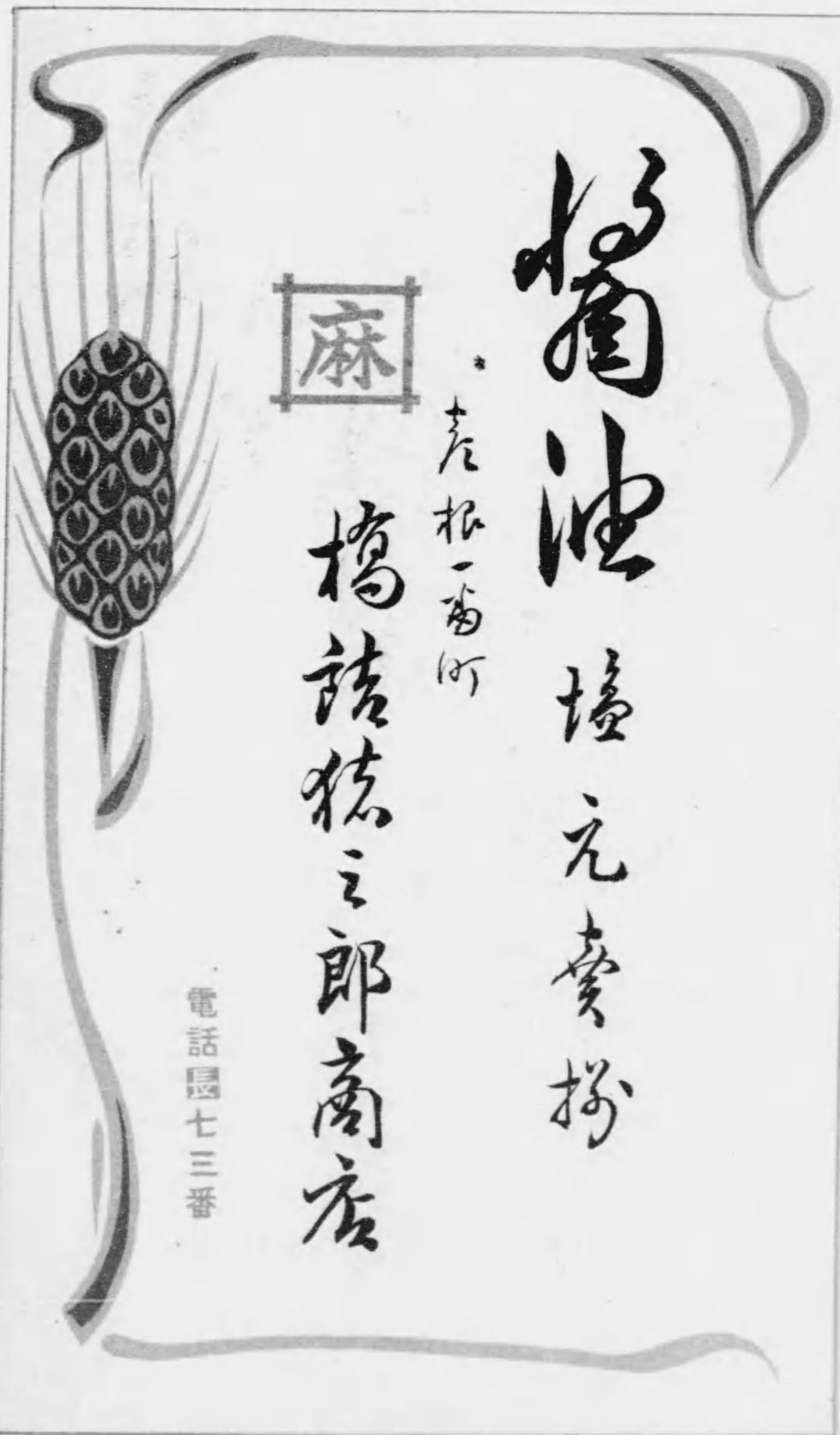
塩元賣揚

麻

檜詰徳之郎商店

彦根一高所

電話四七三番



七下
毛ノ



各國陶磁器卸小賣

彦根川原町側

傘
小出商店



近江鐵道株式會社

創立 明治三十一年六月

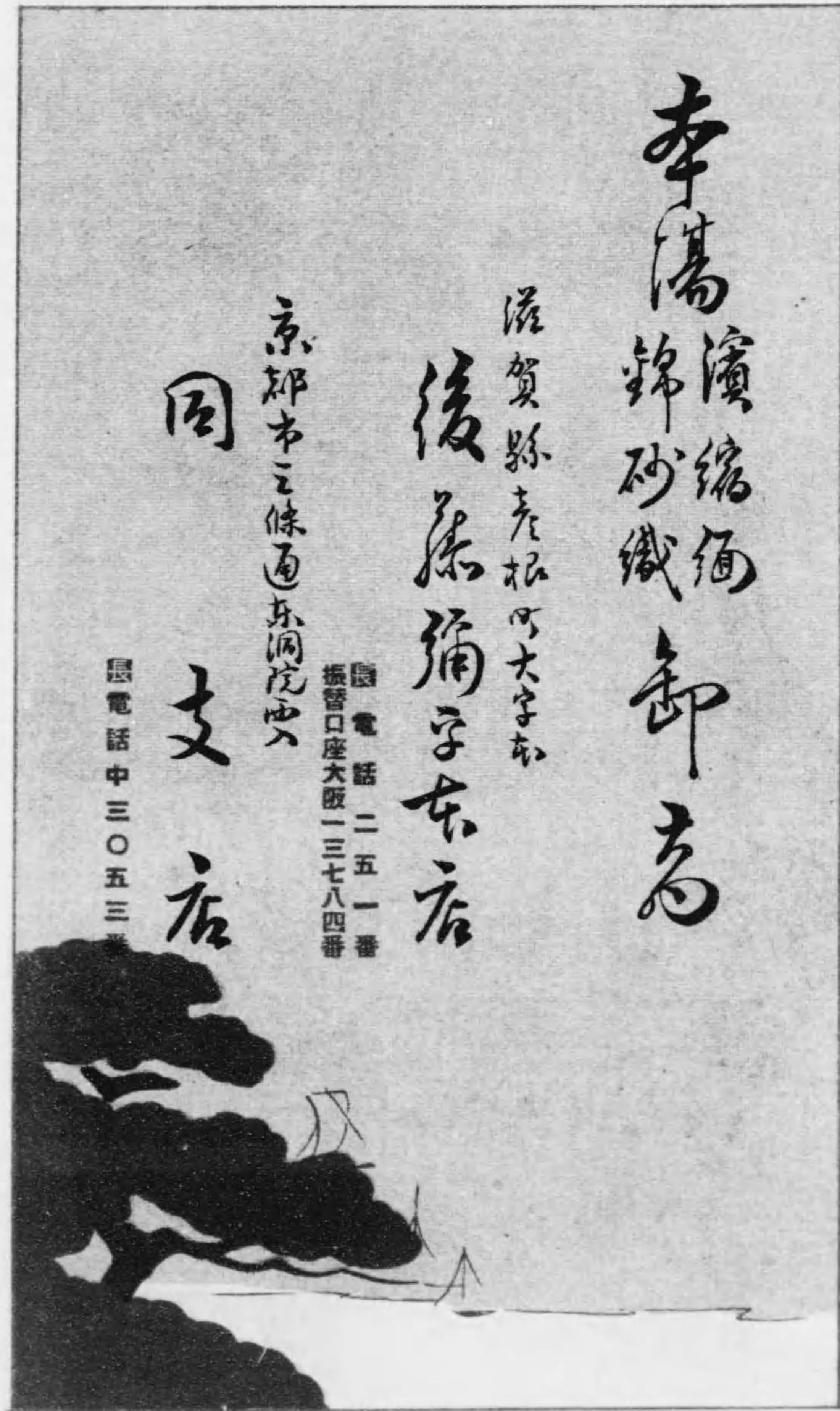
資本金 百拾萬圓

營業哩數 彦根貴生川間(二十六哩)

支線 高宮多賀間 (二哩六)



社長 阿部市三郎
 取締役 正野玄三
 全 廣野織藏
 全 大海原尚義
 監査役 澤田政七



露光量違いの為重複撮影



表

華大表探毫紹介
 畫畫肯量
 滋賀縣彦根

木下喜七

電話二四五番

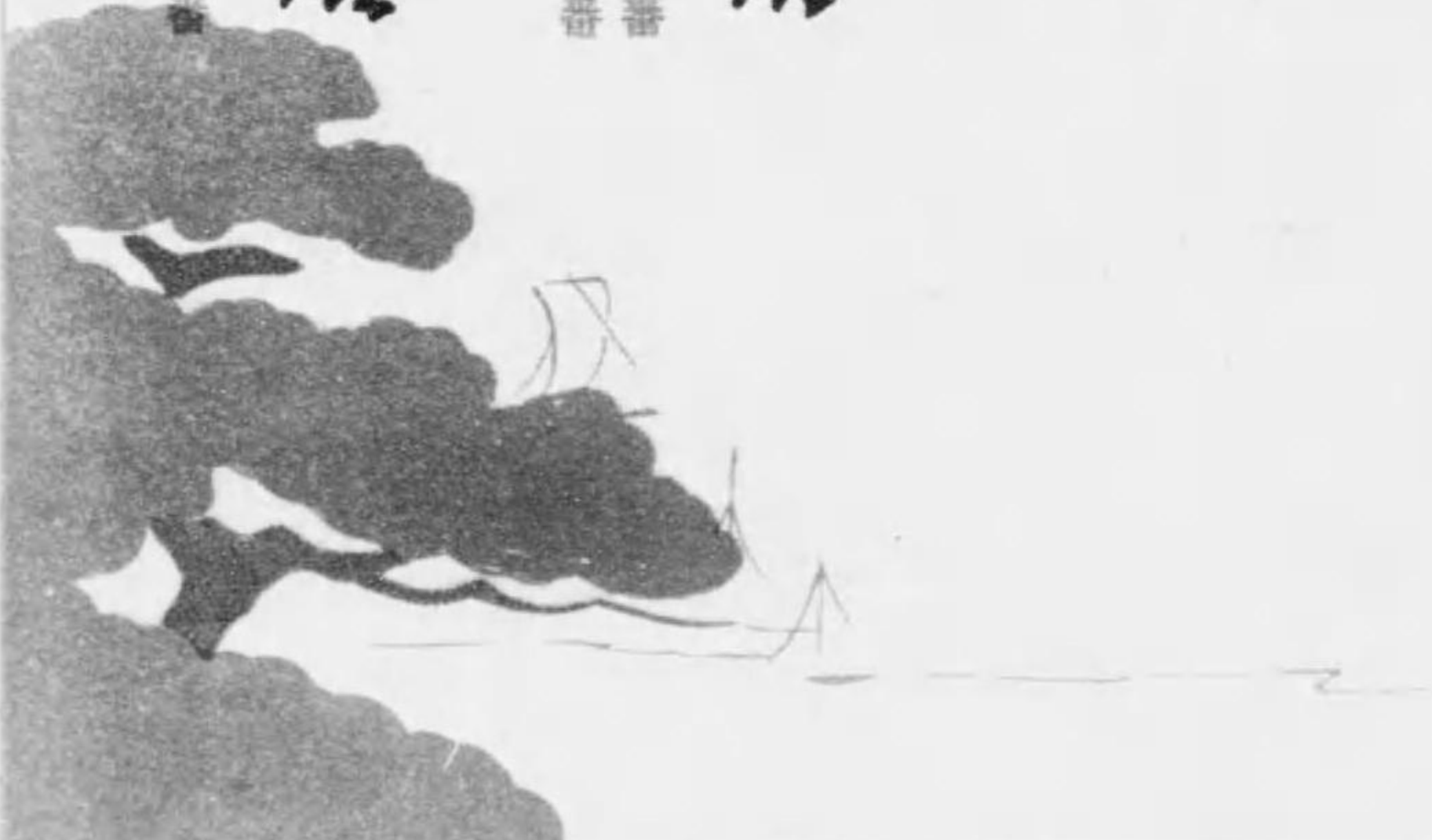
幸傷 濱綿緬卸為
 錦砂織卸為

滋賀縣彦根市大字町
 後孫彌子本店

電話 二五一番
 振替口座大阪一三七八四番

京都市三條通東洞院西
 支店

電話 中三〇五三番



織物

卸商

彦根二番町

安居喜造商店

電話長一二七番



諸株券公債
現物仲買

北川留吉商店



電話
長二四四番
二七三番

露光量違いの為重複撮影

紙

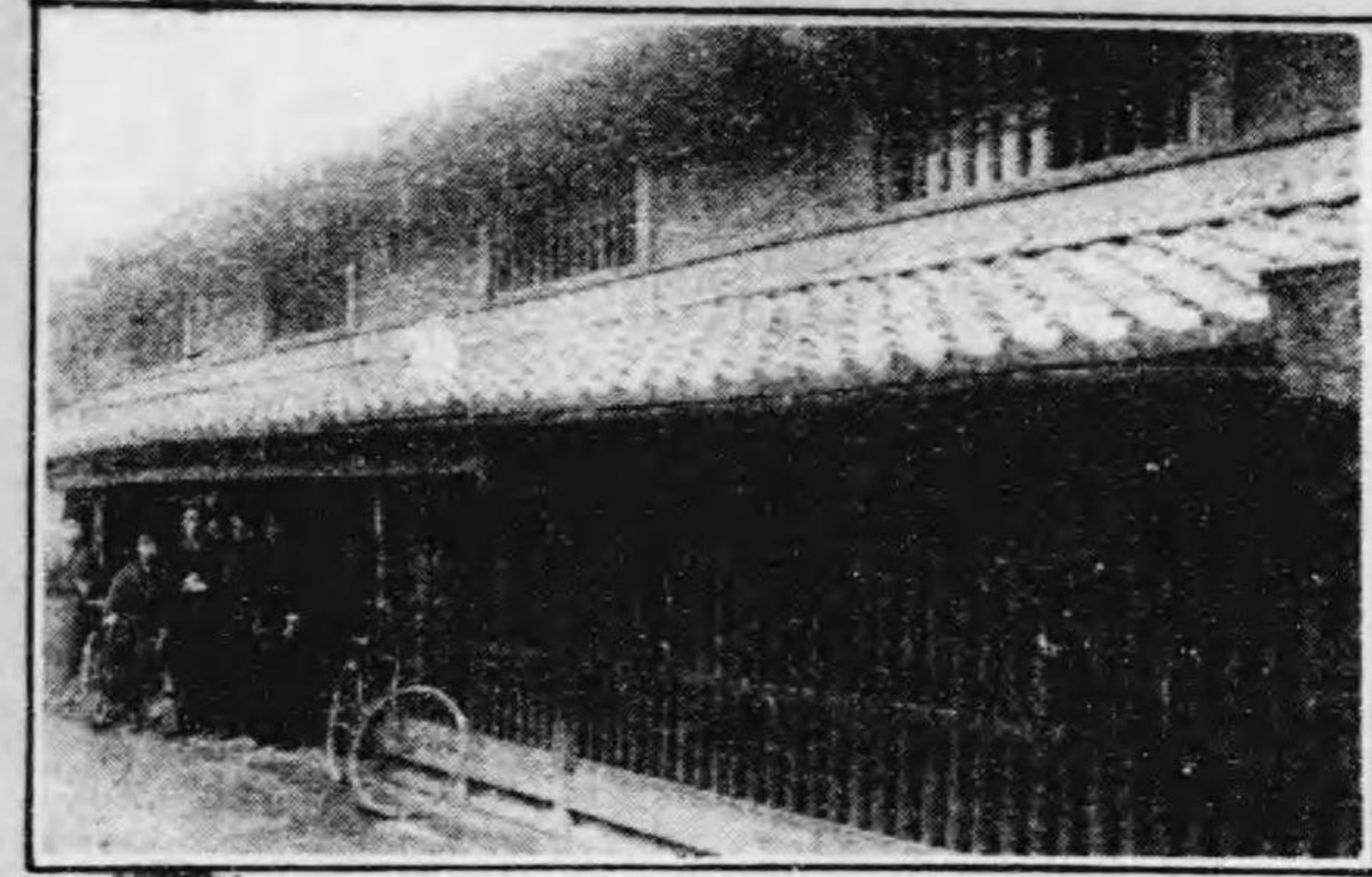
紙商

全

安 居 喜 八 商 店

根 二 番 町

電話 園 五 三 番



舎

竹 商 店

創業 享 保 拾 七 年 五 月

營業 品 砂 友 粉 石 油

電話 園 五 三 番

振替 阪 二 七 番

露光量違いの為重複撮影

紙

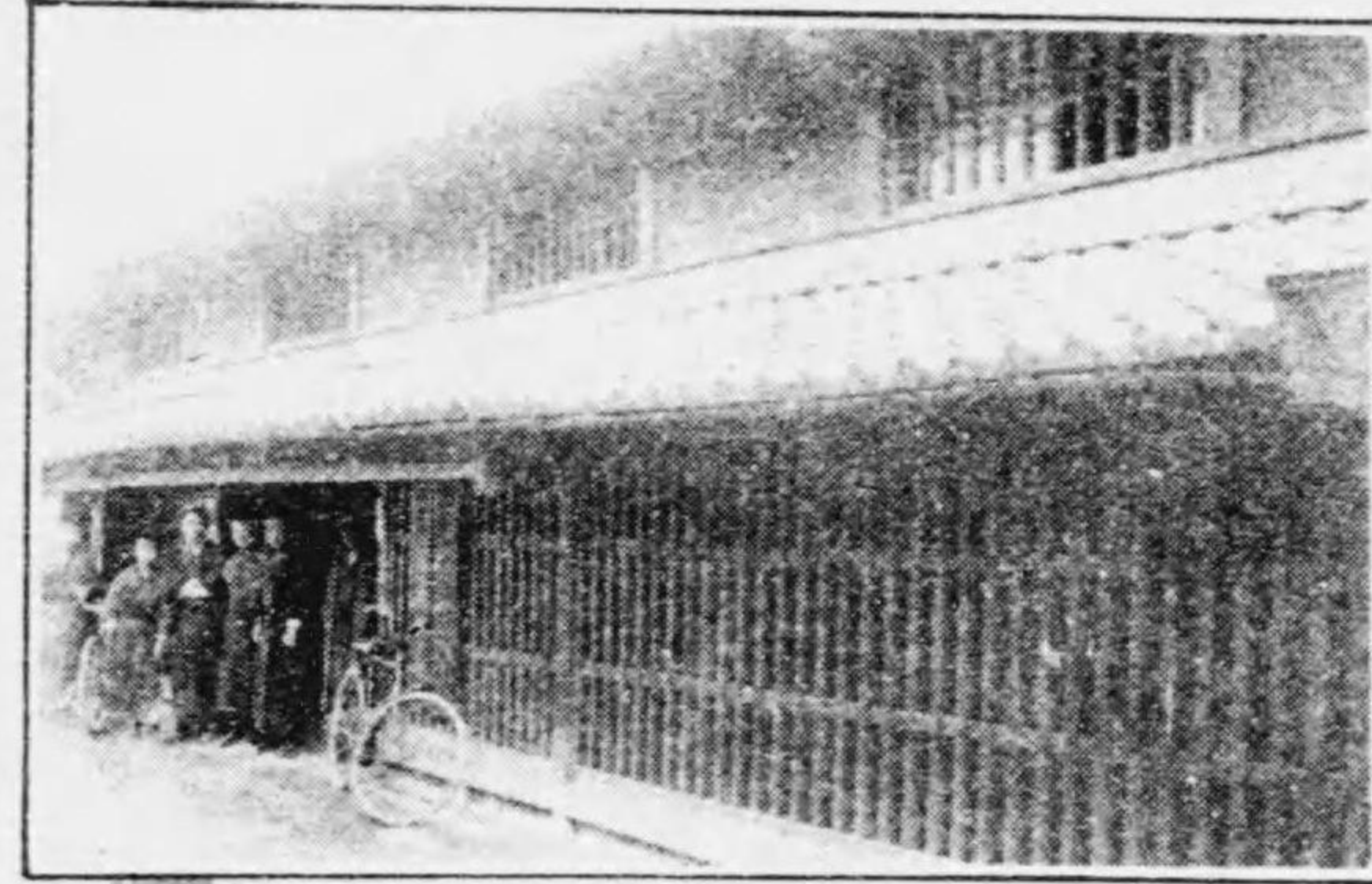
紙商

全

安根二番町

安居喜八商店

電話三五三番



舎

竹村商店

創業享保拾七年五月

營業品 砂糖 麦粉 石伸

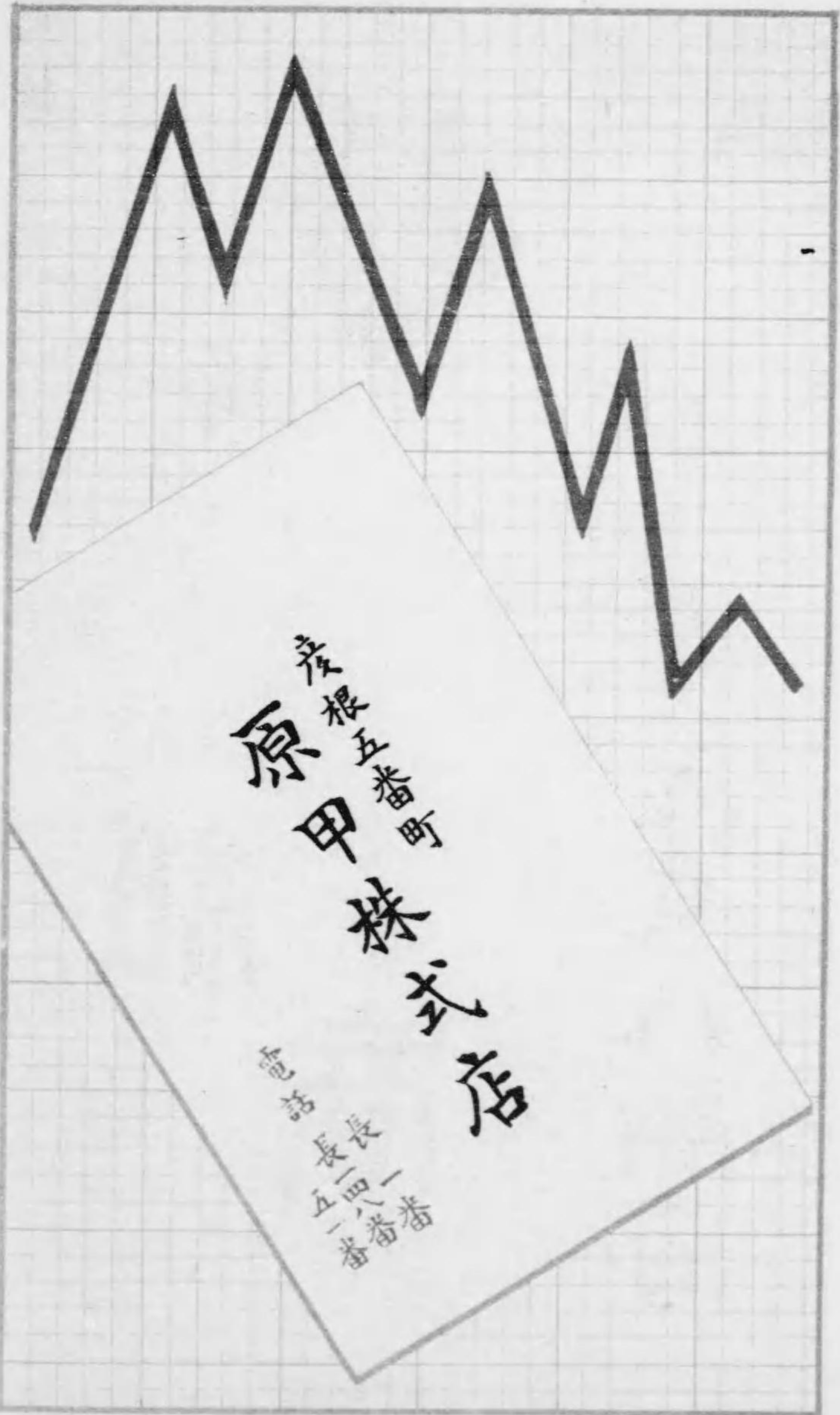
本店 阪神本町四丁目

支店 大阪市東区西成寺町

電話 南二九六五番

振替 大阪二二六二番

振替 大阪三三八三番



大正六年十一月八日印刷
大正六年十一月十二日發行

〔非賣品〕

發行兼
編輯者

彦根實業同志會

滋賀縣犬上郡彦根町字川原十九番屋敷
右代表者 若松榮吉

岐阜縣安八郡大垣町字郭一五三番戶
西濃印刷株式會社代表者

印刷者 河田貞次郎

印刷所 西濃印刷株式會社

179
255